

県道向山・日之影線道路改良事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書

TA MUKAI

HIRATANI

田向遺跡・平谷遺跡

1994・3

宮崎県教育委員会

県道向山・日之影線道路改良事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書

TA MUKAI

HIRATANI

田向遺跡・平谷遺跡

1994・3

宮崎県教育委員会

序

宮崎県教育委員会では、文化財の保護・活用のための調査を行い、毎年刊行される報告書や各種の普及活動により文化財に対するご理解を頂いております。

このたび当教育委員会では、西臼杵支庁の依頼を受け、平成3年度から2か年にわたり、県道向山・日之影線道路改良予定地内に所在する田向遺跡、平谷遺跡の発掘調査を実施しました。

田向遺跡においては、縄文時代早期の土器や集石遺構、前期の曾畑式土器、後期の土器や石器、竪穴式住居跡等が、平谷遺跡では縄文時代の土器群や石器、弥生時代の竪穴式住居跡等が確認されました。久しく、本格的な発掘調査が行われていなかった日之影町の、ひいては山間部における歴史事象の解明に新たな知見をもたらすこととなりました。

本書が学術資料として、また、社会教育および学校教育の場においても広く活用され、文化財に対する認識と理解がさらに深まることを期待します。

なお、調査にあたって御協力いただいた西臼杵支庁・日之影町教育委員会等の関係諸機関をはじめ、御指導、御助言をいただいた先生方、並びに地元の方々に心から感謝申し上げます。

平成6年3月

宮崎県教育委員会

教育長 高山 義孝

例 言

1. 本書は、平成3年度・4年度に宮崎県教育委員会が、宮崎県西臼杵支庁から委託を受けて、県道向山・日之影線道路改良事業に伴い、埋蔵文化財発掘調査を実施した西臼杵郡日之影町大字岩井川所在の田向遺跡・平谷遺跡の報告書である。
2. 発掘調査は、田向遺跡が平成3年6月25日から10月5日まで、平谷遺跡が平成5年1月8日から3月31日まで行った。
3. 本書に使用した位置図は、国土地理院発行の5万分の1図をもとに作成し、周辺地形図は、西臼杵支庁土木課作成の1,000分の1図をもとに作図した。
4. 現地の図面は、各調査員の他、甲斐重利、甲斐利子、甲田スナエ、黒木小夜子の協力をえて作成した。
5. 出土した遺物の実測は、各担当者の他、久木田知代子、富永優子、藤崎順子、家村真澄、松浦由美、金子悦子、藤川留美子が、トレースは、各担当者の他、橋本英俊の協力をえた。
6. 本書の執筆は、第I章第1節を北郷泰道が、第I章第2・3節・第II章を飯田が、第III章を松林が行った。
7. 現地調査にさいして、土壌分析を古環境研究所にお願いした。
8. 本書に使用している方位は磁北である。
9. 出土した遺物および本書で使用した記録は宮崎県総合博物館埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

序	
例言	
第I章 はじめに	
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 遺跡の環境	2
第II章 田向遺跡	
第1節 遺跡の概要	7
第2節 調査の方法	7
第3節 調査の経過	8
第4節 遺跡の層位	11
第5節 調査の結果	13
1. 縄文時代早期	13
2. 縄文時代前期	17
3. 縄文時代後・晩期	24
第6節 まとめ	34
第III章 平谷遺跡	
第1節 調査の概要	43
第2節 遺跡の層序	43
第3節 各時代の遺構と遺物	46
1. 縄文時代の遺構と遺物	46
2. 弥生時代の遺構と遺物	65
第4節 まとめ	72

挿図目次

第I章 はじめに	
第1図 遺跡の位置図	3
第2図 調査区周辺地形図	5
第II章 田向遺跡	
第1図 遺構分布図	9
第2図 遺構分布図(縄文早期)	9
第3図 土層図	12
第4図 基本層序図	12
第5図 1号集石遺構	13
第6図 2号集石遺構	13
第7図 出土土器実測図	15
第8図 出土遺物実測図	16
第9図 出土土器実測図	18
第10図 出土土器実測図	19
第11図 出土土器実測図	20
第12図 遺物出土分布図(縄文前期)	21
第13図 遺物出土分布図(縄文後期)	21
第14図 竪穴式住居跡実測図	24

第15図	住居跡出土遺物実測図	25
第16図	出土土器実測図	27
第17図	出土土器実測図	28
第18図	出土土器実測図	29
第19図	出土石器実測図	29
第20図	出土石器実測図	30
第21図	出土石器実測図	31
第Ⅲ章 平谷遺跡		
第1図	遺構分布図	44
第2図	土層概念図	45
第3図	土層図	45
第4図	集石遺構実測図	47
第5図	出土土器実測図	49
第6図	出土土器実測図	50
第7図	出土土器実測図	51
第8図	出土土器実測図	53
第9図	出土土器実測図	54
第10図	出土土器実測図	55
第11図	出土石器実測図	59
第12図	出土石器実測図	60
第13図	出土石器実測図	61
第14図	出土石器実測図	62
第15図	1号・2号住居跡実測図	67
第16図	3号住居跡実測図	68
第17図	出土土器実測図	68
第18図	出土土器実測図	69
第19図	出土土器実測図	70
第20図	出土石器実測図	71

表 目 次

第Ⅱ章 田向遺跡		
第1表	出土土器観察表	14
第2表	出土石器計測表	17
第3表	出土土器観察表	23
第4表	住居跡出土土器観察表	25
第5表	住居跡出土石器計測表	25
第6表	出土土器観察表	31
第7表	出土土器観察表	32
第8表	出土石器計測表	33
第Ⅲ章 平谷遺跡		
第1表	出土土器観察表	56
第2表	出土土器観察表	57
第3表	出土土器観察表	58
第4表	出土石器計測表	63
第5表	出土石器計測表	64

第6表	出土石器計測表	65
第7表	出土土器観察表	70
第8表	出土土器観察表	71
第9表	出土石器計測表	71

図 版 目 次

第II章 田向遺跡		
図版1	遺跡遠景 表土剥ぎ 土層の状況 基本層序	36
図版2	調査区近景 竪穴式住居跡 チャート剥片出土状況 石臼出土状況	37
図版3	作業状況 遺物出土状況 1号集石遺構	38
図版4	2号集石遺構 土器出土状況 調査終了状況 遺跡見学会	39
図版5	早期出土遺物 早期出土石鏃 前期出土遺物	40
図版6	住居跡出土遺物 後期出土遺物 晩期出土遺物	41
図版7	出土石器	42
第III章 平谷遺跡		
図版1	遺跡遠景 作業風景 VI区土層	73
図版2	遺跡遠景	74
図版3	集石、礫群、検出状況	75
図版4	住居跡検出状況・遠景	76
図版5	早期出土土器	77
図版6	後・晩期出土土器	78
図版7	弥生土器	79
図版8	出土石器	80

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経緯

西臼杵支庁が建設を計画する県道向山・日之影線の予定路線について、平成 2 年 12 月 17 日付けで、文化課に文化財の所在の有無についての照会があった。文化課では、予定路線内の分布調査を実施した結果、数箇所の遺物散布地を確認し、また地形的に遺跡立地の可能性のある場所を確認した。さらに、地元の方から、過去農地造成の際に出土し、保管されている遺物に関する情報を得た。その遺物の中には、大分県大野川上・中流域を中心に、高千穂地方に広がりを持つ弥生時代後期の「工」字突帯文の土器片も含まれており、その分布圏を広げる資料であった。

これらの場所について、引き続き試掘調査を実施し、遺跡の範囲及び包含層の状態等を確認した。4 地点についての試掘調査の結果、2 地点については遺物等の出土を認めず、縄文時代後期を中心とした遺物を出土した地点を田向遺跡とし、また過去に「工」字突帯文土器が出土した地点を平谷遺跡として認定した。西臼杵支庁との協議の結果、平成 3 年度から平成 4 年度の 2 箇年にわたり発掘調査を実施することになった。

なお、発掘調査は平成 3 年 6 月 25 日から 10 月 5 日まで田向遺跡を文化課主事飯田博之を担当とし、平成 5 年 1 月 8 日から 3 月 31 日まで平谷遺跡を飯田・同嘱託松林豊樹を担当とし、実施した。

第 2 節 調査の組織

調査主体	宮崎県教育委員会	
	教 育 長	高 山 義 孝
	文 化 課 長	長 友 巖 (平成 3 年度)
		甲 斐 教 雄 (平成 4 年度～)
庶 務	庶 務 係 長	税 田 輝 彦
	同 主 査	卷 庄 次 郎
調 査	埋蔵文化財係長	岩 永 哲 夫
	同 主 査	北 郷 泰 道 (調整)
	同 主 事	飯 田 博 之 (田向遺跡担当)
	同 調 査 員	松 林 豊 樹 (平谷遺跡担当)
調査協力	宮崎県西臼杵支庁	日之影町教育委員会 古環境研究所

第3節 遺跡の環境

田向遺跡は、西臼杵郡日之影町大字岩井字田向に、平谷遺跡は同字平谷に所在する。

九州のほぼ中央部に位置する日之影町は、宮崎県の北西にあり、西に阿蘇を含む巨大な盆地を、北は祖母・傾山系の山々を臨み、町の中央を五ヶ瀬川が流れ、支流とともに、阿蘇熔結凝灰岩を基盤とする土壌を浸蝕し、急崖を形成している。九州山地の裾部にあたり、五ヶ瀬川の浸蝕とともに起伏の激しい地形を呈している。

報告する2遺跡は、五ヶ瀬川左岸にあり、谷を挟んだ標高200～220mの丘陵の斜面に位置する。

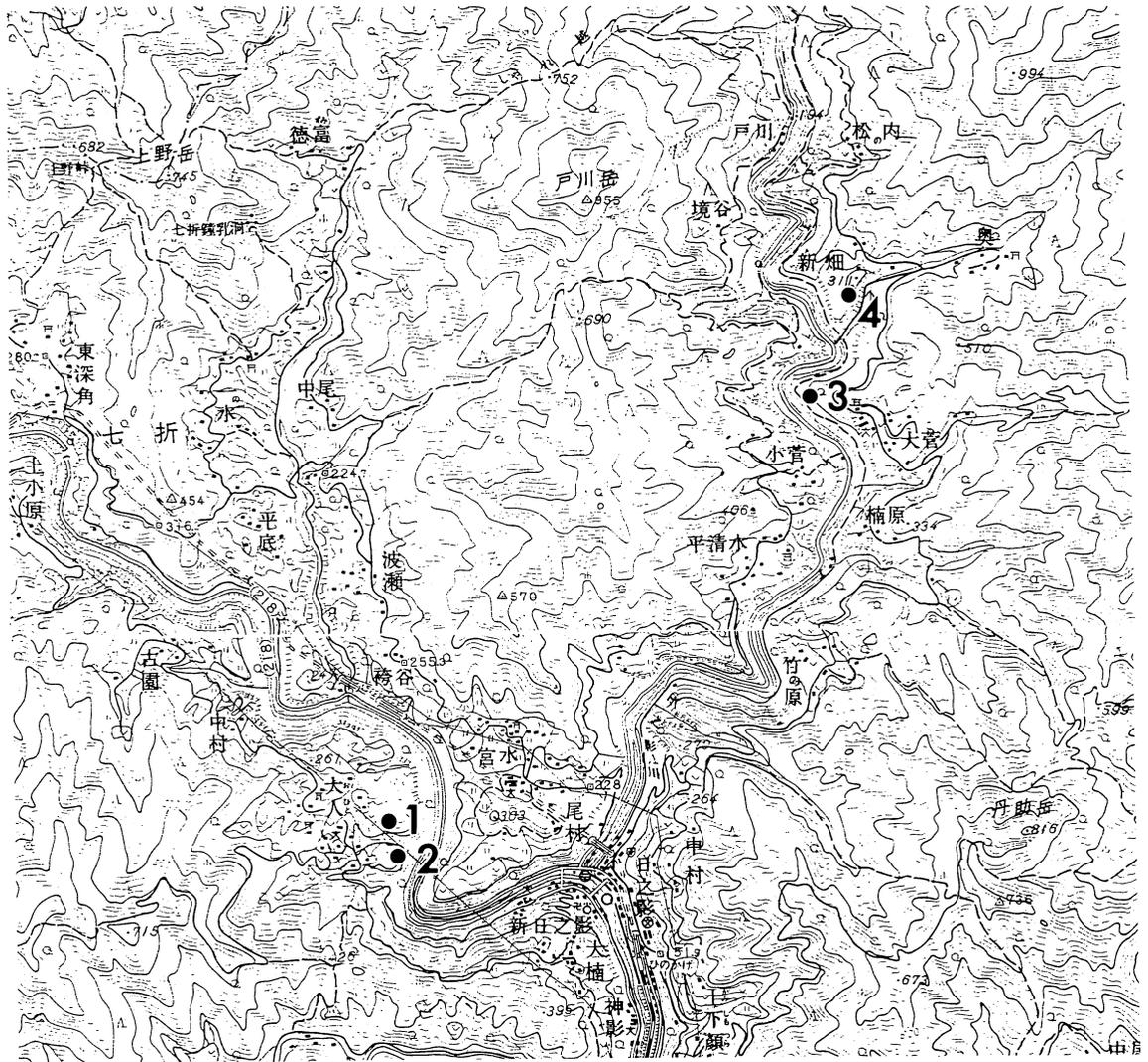
日之影町においては、本格的な調査は少なく、表採資料と合わせて歴史事象の断片だけが見出だされているに過ぎない。日之影町内で調査が行われたのは、昭和28年の日向遺跡調査団による大溜遺跡と、新畑洞穴⁽¹⁾そして、昭和41年の南九州短期大学によって調査された見立地区の出羽洞穴遺跡⁽²⁾だけである。

五ヶ瀬川上流域で、旧石器時代の人間の営みが最初に確認された遺跡が、前述の出羽洞穴遺跡で、鈴木重治氏を中心として南九州短期大学および宮崎高等学校の生徒により調査が行われ後期旧石器時代の遺物が検出されている。旧石器時代の遺跡や遺物は、五ヶ瀬川上流では、平成元年度に調査が行われた、高千穂町の宮ノ前第2遺跡⁽³⁾の黒曜石製の剥片尖頭器が出土しているだけで出羽洞穴を含めて2例しかない。中流域の北方町では、調査例⁽⁴⁾が増えており、今後、五ヶ瀬川水系の旧石器時代の様相も徐々に明らかになっていくであろう。

平成4年度に調査が行われた、高千穂町の岩戸五ヶ村遺跡⁽⁵⁾では、手向山式、塞ノ神式等の土器が出土しているが、今回報告する2遺跡でも同様の資料が見られる。県北山間部の早期の遺跡の調査は前述の3例しかなく、他に所在が確認されているのは、高千穂町の押方、三田井地区⁽⁶⁾そして、五ヶ瀬町の三ヶ所神社裏遺跡⁽⁷⁾などがあるが、調査例が少なく今後の資料の増加を期待したい。

縄文前期から、五ヶ瀬川上流域では九州北・西部あるいは東九州・瀬戸内地方との交流が盛んになる兆しが見られる。田向遺跡では、轟式・古い段階の曾畑式等の土器が出土している。曾畑式土器については、同じ日之影町の大菅地区でも出土している。⁽⁸⁾

昭和28年に調査された大溜遺跡と新畑洞穴では、打製石斧・石錘・石匙等の石器の他、磨消縄文系や沈線文を主体とする土器群が出土しており、鐘崎式をはじめとして、各種の磨消縄文系の土器群や、瀬戸内の津雲Aおよび彦崎KIなどの影響を受けた土器や夜臼式の土器片も出土している。周辺には、高千穂町の陣内⁽⁹⁾、薄糸平⁽¹⁰⁾、セベット⁽¹¹⁾、梅ノ木原⁽¹²⁾等の遺跡で磨消縄文系の文化が展開しており、この地方における縄文後期の特徴を物語っている。



第1図 遺跡の位置図 (1/50,000)

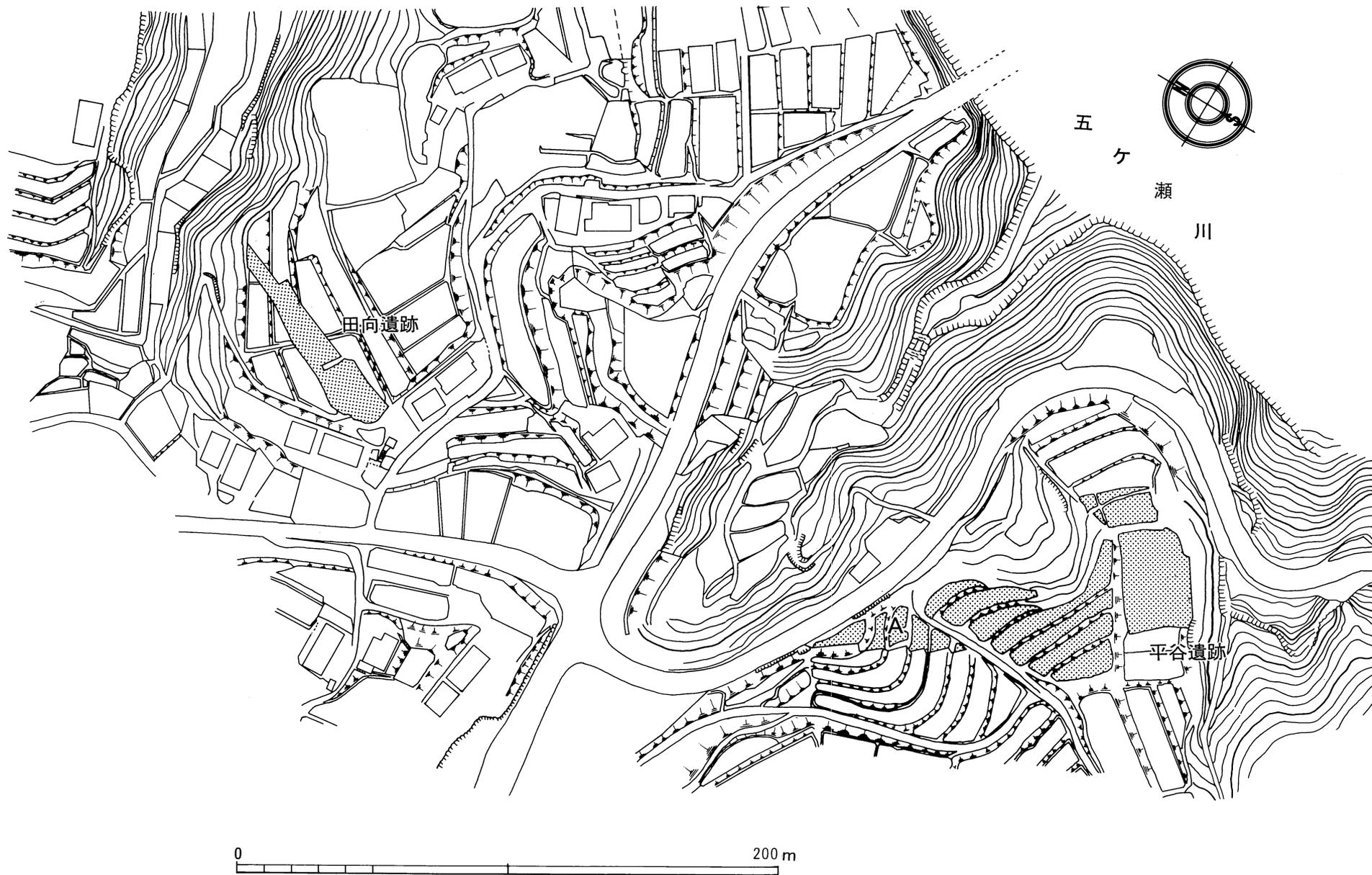
1. 田向遺跡 2. 平谷遺跡 3. 大溜遺跡 4. 新畑洞穴

高千穂町の押方神社周辺で、弥生時代の遺物が表採され⁽¹³⁾ 北部九州あるいは、東九州瀬戸内の影響を受けた様相が想起されていたが、その後の調査により資料が追加され補充されていくこととなった。薄糸平、梅ノ木原遺跡などから、下城式、須玖式、工字突帯を有する甕が出土している。そして、今回報告する平谷遺跡でも、工字突帯の甕が出土しており各地との交流が活発に行われたこの地方の様相を如実に現している。

日之影町内で行われた調査は、先述の3遺跡と今回の田向・平谷遺跡の5遺跡である。旧石器から縄文時代早・前・後・晩期そして、弥生の資料が出土しており、人々の生活が連綿と行われてきたことを示している。今後の調査により、資料の充実・補強がなされ様々な視点から吟味されることにより、五ヶ瀬川上流域の各時代の様相も明らかになっていくであろう。

註

- 1) 宮崎県教育委員会「新畑洞穴遺跡及大溜包含層」『日向遺跡調査報告』第二輯 1955
- 2) 鈴木重治「宮崎県見立出羽洞穴」『日本の洞穴遺跡』1967
- 3) 宮崎県教育委員会『国道218号線高千穂バイパス建設関係発掘調査報告書』1993
- 4) 北方町内では、宮崎県教育委員会により平成4年度に矢野原遺跡が、平成5年度には蔵田遺跡が調査され、平成5年度には、北方町教育委員会により矢野原第2遺跡が調査されている。
- 5) 戸高眞知子「宮崎考古学会第27回例会発表要旨」1993
- 6) 高千穂町教育委員会『高千穂町遺跡詳細分布調査報告書』1983
- 7) 『宮崎県史』資料編考古1
- 8) 北川町の沢皇臣氏の御教示による。
- 9) 宮崎県教育委員会「陣内遺跡」『日向遺跡総合調査報告』1962
- 10) 高千穂町教育委員会『薄糸平遺跡』1977
- 11) 高千穂町教育委員会『高千穂町文化財報告書』3
- 12) 高千穂町教育委員会『高千穂町文化財調査報告書』4
- 13) 沢皇臣「宮崎県西臼杵郡高千穂町押方神社周辺の遺跡」『九州考古学』45 1972



第2図 調査区周辺地形図(1/2,000)

第Ⅱ章 田向遺跡

第1節 遺跡の概要

平成3年度に調査を行った本遺跡は、標高約210mで緩やかに下る丘陵の北側の斜面に位置する。

試掘調査の結果では、縄文時代早期および後期の遺物が出土しており、少なくとも2枚の遺物包含層が残っていることが確認されていた。また、遺跡の所在する丘陵は、地元の人々から「城」とよばれており、中世山城に関連する遺構・遺物の出土も予想された。

本遺跡での調査の結果、検出した遺構を列記すると、縄文時代早期の集石遺構2基、縄文時代後期の竪穴式住居跡1軒、多数の柱穴群である。

先にも述べたように、試掘調査の結果と同じ時期の遺構が検出されており、予想通りの調査結果となったが、縄文前期および晩期の遺物も検出できた。遺物の分布は、ほとんどが調査区のほぼ中央付近にまとまって出土しており、その他の場所では遺物の分布は稀薄であった。

調査の鍵となるアカホヤ火山灰層も残存状況が極めて良好で、厚いところで約40cm程の堆積があり、層位的にもしっかりとした調査ができたことは恵まれていた状況であった。

縄文時代後期の竪穴住居跡は、日之影町では調査の機会がほとんどないこともあり、初めての検出となり、周辺の遺跡では高千穂町のセベット遺跡とあわせて2例目である。

調査区の南北で、弧状に掘削され、客土が堆積している部分があった。掘削されて斜めに残った壁には、柱穴が掘り込まれていたが、埋土と客土を比較して、同じ土の混入が確認でき、新しい時期の耕作地等の開墾によって生じた掘り込みと判断した。

調査は、遺物出土分布のとおり、中央付近での作業が多かった。各種の遺構もこの近辺で検出ができており、まわりの土層の状況からみても、浅い谷状にくぼんだ地形だったのではないかと考えられ、調査区外の部分にも住居跡をはじめ、各種の遺構が存在する可能性が想定できる。

第2節 調査の方法

本遺跡の調査は、前年度の試掘調査の結果を踏まえ、道路建設予定地内全域を調査対象地として、法面の部分を余裕を残して調査区を設定した。調査面積は、約900㎡である。

調査前は、段段畑となっており、調査区南側から重機による表土剥ぎを開始した。縄文時代後・晩期の遺物包含層である黒色土を検出しながらの作業を進めていった。

斜面に平行して土層観察用のベルトを残し、調査区の西側の壁と対比しながら掘り下げを行っていた。

表土剥ぎの後、調査区南側の部分では、黄褐色土の粘質土が露出しており、縄文早期以前の遺物包含層を確認するため、斜面に直行あるいは平行するトレンチを設けて掘り下げていったが、遺物を検出することはできなかった。

中央付近では、包含層の残存状況が良好で、後・晩期の包含層である黒色土から層序をふまえて掘り下げていき、アカホヤ層上面で精査を行い遺構等の検出を行った。調査が終了するとアカホヤ層は、重機により除去し、早期の包含層の掘り下げに入っていた。

調査機関の関係で、対象地すべてにおいて、一様の掘り下げができずに、遺物の密集度の様子により、掘り下げる範囲をトレンチ等により設定した。

遺物の取り上げは、Ⅰ層出土については、図面に記録せずに一括資料として扱い、表土および客土ごとにわけていった。Ⅱ層以降の遺物については、図面に位置、レベルを出土層を記録していく作業にした。

第3節 調査の経過

調査は、平成3年6月25日に開始し、10月5日の約3ヶ月間行った。

調査を開始するにあたり、6月10日に宮崎県西臼杵支庁土木課・日之影町教育委員会の担当者を交えて事前の協議を行った。

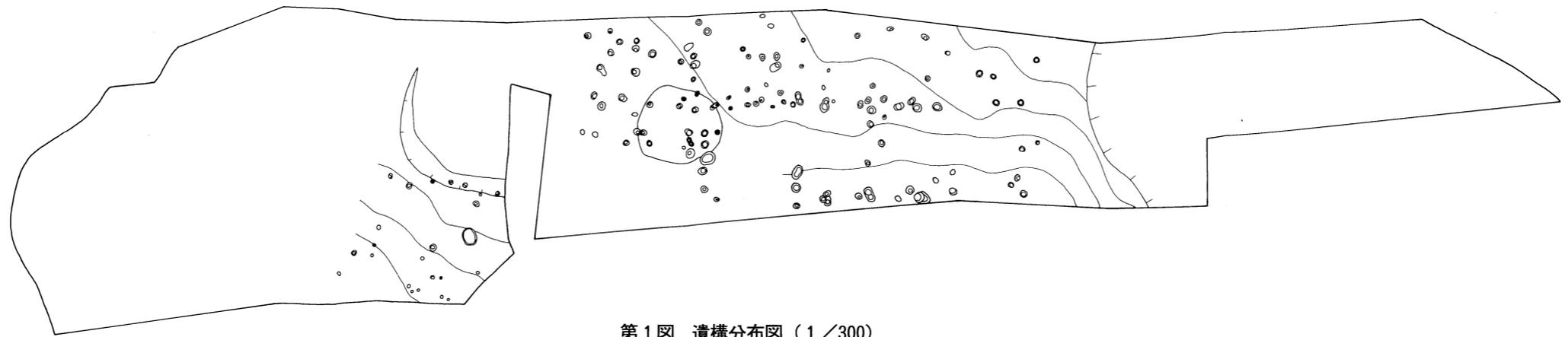
6月25日から調査区の表土剥ぎを2日間かけて行った。同時に器材の搬入および、事務所等の設営も行う。

6月27日から作業員を投入してテントの設営、ジョレンによる精査を行い、黒色土層(Ⅱ層)より掘り下げを開始した。Ⅲ-a層上面まで掘り下げ、平板による遺物の取り上げを開始しながら、さらにⅢ-b層までの掘り下げを8月中旬まで続けた。

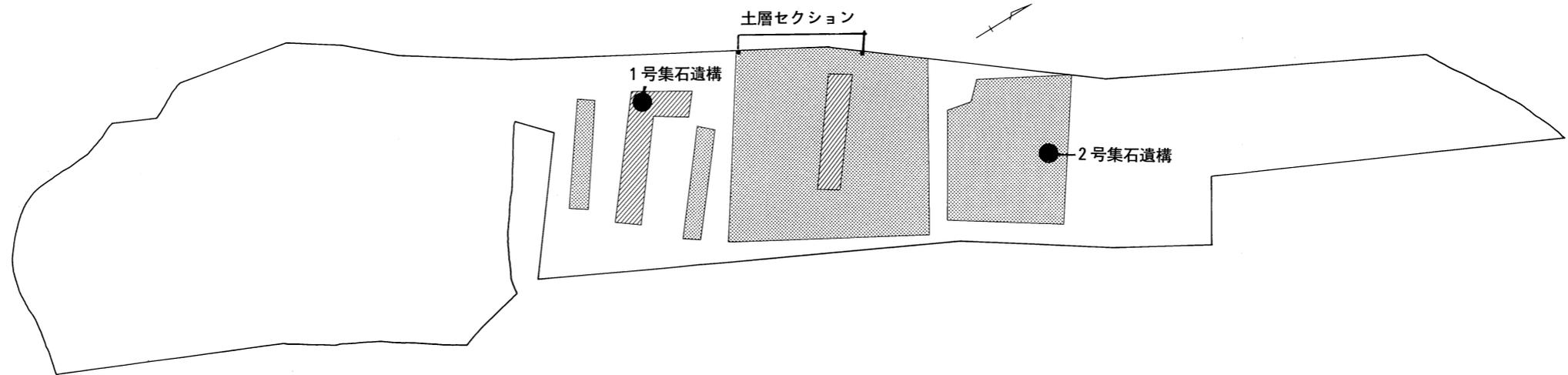
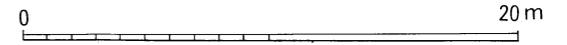
7月上旬に竪穴式住居跡を検出し、掘り下げを行い、完掘した。その他の以降は、掘り下げと同時に検出し、順次、検出を行った。

9月上旬には、重機によりアカホヤ層を除去し、精査の後、範囲を設定し、掘り下げを行っていった。第Ⅴ層より、塞ノ神系と考えられる土器片の密集を検出し、取り上げを行う。

9月中旬には、第Ⅵ・Ⅶ層まで掘り下げるトレンチを設定し、作業を行っていった。9月後半には、集石遺構2基を検出し、掘り下げを行い、10月1日より実測に入った。3日には土層断面および、調査区の実測等を行い、4日に器材のかたづけ、テントの撤去を行い、翌日器材等の搬出を終え、調査を終了した。



第1図 遺構分布図 (1/300)
(アカホヤ層)



第2図 早期遺構分布図 (1/300)

第4節 遺跡の層位

本遺跡の土層は、調査区西側の壁の、層位がI層より連続している良好な堆積の見られる部分について図面に表した(第3図)。なお、トレンチにより深く掘り下げた部分の土層と、西側の壁の部分での土層を合成して柱状図(第4図)を作成した。

先述したように、遺跡の両端ではIX層が露出しており、中央部付近で良好な土層の堆積がみられた。ただ、第II層の黒色土は、東側の方だけに残っている状況であった。

以下、各層については次のとおりである。土色については、日本色研事業株式会社発行の「新版標準土色帖」を参考にして色の記述を行った。

第I層 表土および客土。客土の中にはアカホヤ層の混入がみられる。

第II層 黒色土。縄文後・晩期の遺物包含層である。

第III層 a 黒色土とアカホヤ火山灰の二次堆積の混入土。縄文後期の遺物も少量出土するが、前期の土器の包含層である。

b アカホヤ火山層

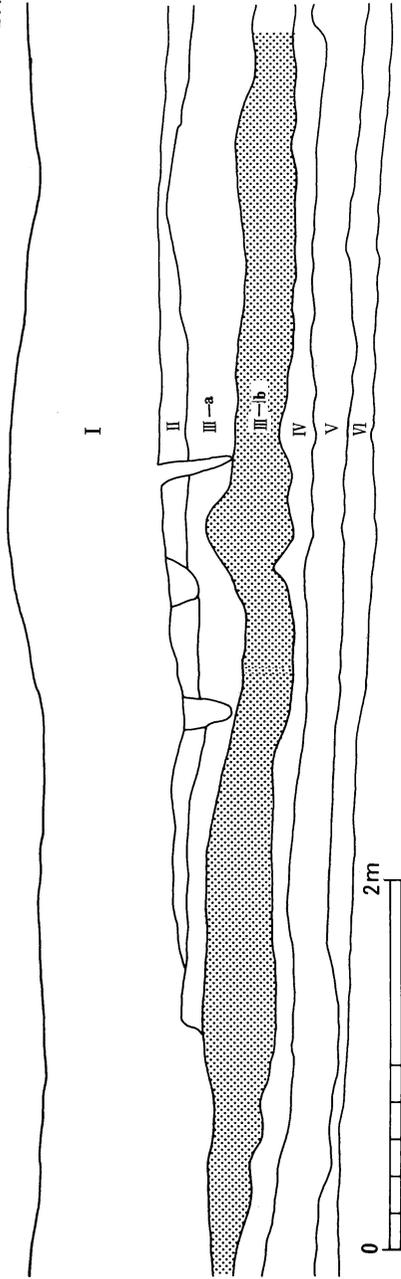
第IV層 褐色土。かたくしまっている。上部にはアカホヤ火山灰層が微量混入している。

第V層 かたくしまった黒褐色土。1～3mm程度の橙色のスコリア粒が混入する。

第VI層 黄褐色土とV層の漸移層。

第VII層 黄褐色粘質土。

第I層は、表土と客土の区別は図面上ではとくになかった。第IV層から第VI層にかけて縄文早期の遺物包含層である。第VI層から出土した遺物は、第7図の1～7である。なかでも1は中位からの出土である。



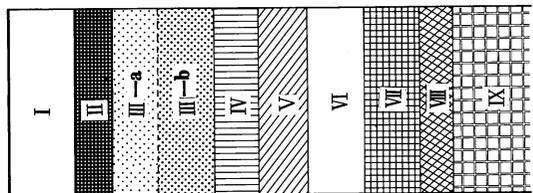
第3図 土層図 (1/40)

- 第I層
- 第II層
- 第III層
- 第IV層
- 第V層
- 第VI層
- 第VII層

表土および客土。客土の中にはアカホヤ層の混入がみられる。
 黒色土。縄文後・晩期の遺物包含層である。

a 黒色土とアカホヤ火山灰の二次堆積の混入土。縄文後期の遺物も少量出土するが、前期の土器の包含層である。

b アカホヤ火山灰層。
 褐色土。かたくしまっている。上部にはアカホヤ火山灰層が微量混入している。
 かたくしまった黒褐色土。1~3mm程度の橙色のスコリア粒が混入する。
 黄褐色土とV層の漸移層。
 黄褐色粘質土。



第4図 土層柱状図

第5節 調査の結果

1. 縄文時代早期

(1) 集石遺構

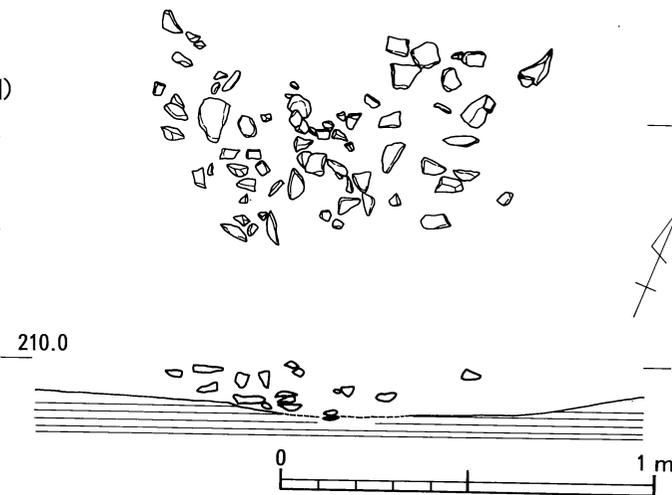
1号集石遺構 (第5図)

本遺構は、調査区のほぼ中央部に位置する。

確認面は、基本土層の第VI層上面である。

掘り込みはなく、ほとんどの石は角礫である。

長軸 1.1 m、短軸 0.6 m の範囲で礫が広がり、半分程度が、赤変している。



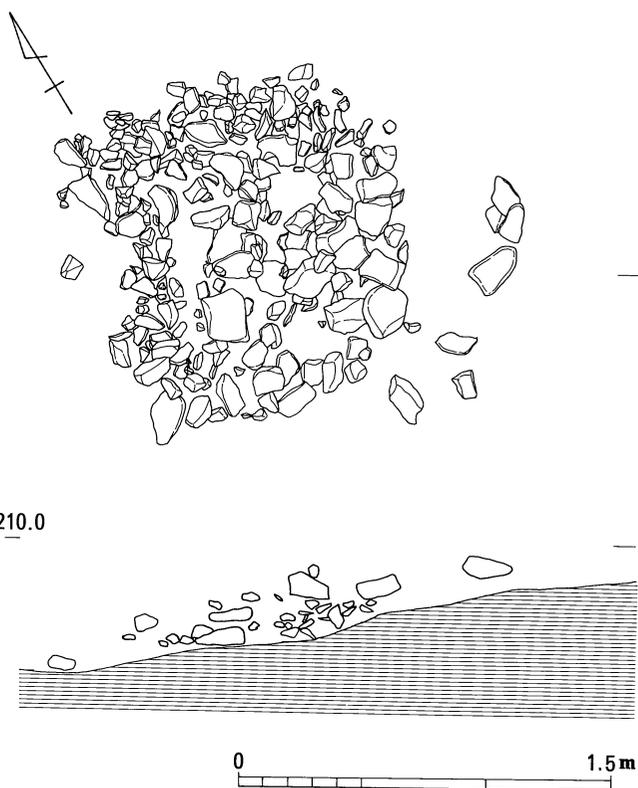
第5図 1号集石遺構 (1/20)

2号集石遺構 (第6図)

本遺構は、長軸1.6 m、短軸が1.4 mを計り、明瞭な掘り込みは見られないが、やや窪んだ部分に焼土や炭化物の粒が少量見られる。

遺構の上部の礫は、阿蘇の熔結凝灰岩で、下部には、砂岩質の角礫が多く、多くが熱を受けたためか赤変している。

本遺構の検出面は、第VI層の上面である。



第6図 2号集石遺構 (1/30)

(2) 遺物

土器 (第7・8図)

土器は、基本層序 (第4図) 第VI層から第IV層にかけて出土している。調査範囲が限られてしまったため、遺物の量はあまり多くない。

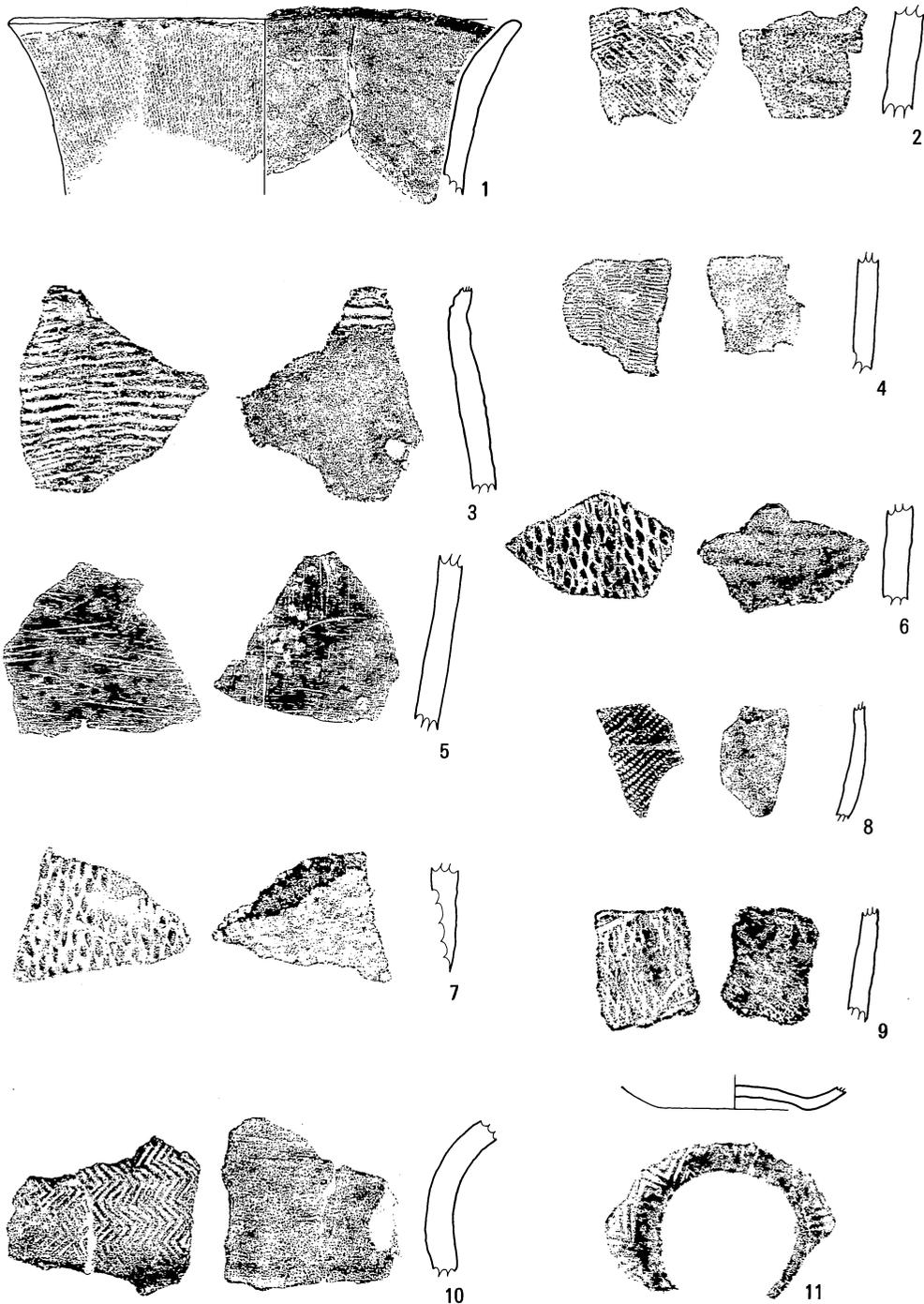
1～4は、第VI層出土の土器で、1・2・4は、外面に捺糸を施し、3は貝殻条痕を施す。5～8は、第V層出土で、5は内・外面ともナデがみられるが、工具による擦痕が残っている。6・8は楕円の押型を外面に施し、7は捺糸を施している。9～12は第IV層出土である。9は網目状捺糸の押型文を施し、10・11は手向山式の頸部と底部である。12は、塞ノ神系の土器で口縁部付近に4条の貝殻による刺突を施す。

石器 (第8図)

出土した遺物は、ほとんどが石鏃で、他は石匙が1点のみであった。石鏃はVI層出土が5でV層出土が1・2・4・6・9、IV層出土が3・7・8、10は縦長の石匙でIV層出土である。石材は、すべてチャートである。

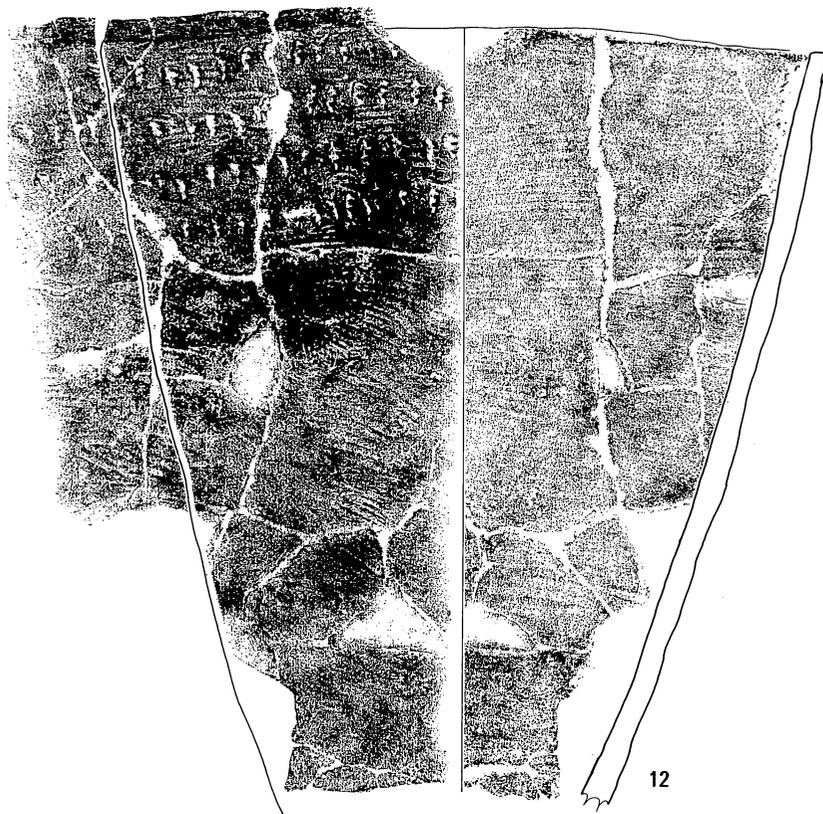
図面 番号	出土 層位	文様および調整		焼成	色調		胎土	備考
		外 面	内 面		外 面	内 面		
1	VI	タテ方向の捺糸	ナデ	良好	明褐灰色	灰褐色	2mm以下の褐色・灰色・黒色の砂粒を含む。	内・外面にスス付着
2	VI	斜め方向の捺糸のあとナデ、そして斜め方向の沈線を施す。	ナデ	良好	明赤褐色	明赤褐色	1mm以下の黒色・褐色・乳白色の砂粒を含む。	
3	VI	横方向の貝殻条痕	ナデ	良好	にぶい 橙色	灰褐色	3～6mmの褐色・黒色・乳白色の砂粒を含む。 2mm以下の雲母を含む。	
4	VI	横・斜め方向の捺糸	斜め・横方向の工具による擦痕	良好	にぶい 赤褐色	にぶい 橙色	1～3mmの灰色・淡黄色・黒色の砂粒を含む。	
5	V	斜め・横方向の工具による擦痕	ナデ	良好	橙色	にぶい 褐色	1～4mmの褐色・灰色・乳白色の砂粒を含む。	
6	V	楕円形の押型文	ナデ	良好	にぶい 橙色	にぶい 褐色	1～3mmの灰色・淡黄色・黒色の砂粒を含む。	
7	V	斜め方向捺糸	ナデ	良好	黄橙色	黄橙色	0.5～1.5mmの褐色・灰色・黄色の砂粒を含む。	
8	V	楕円形の押型文	ナデ	良好	にぶい 褐色	褐灰色	0.5～2.0mmの淡黄色乳白色・透明に光る砂粒を含む。	
9	IV	網目状の捺糸を施した後、斜め方向の沈線を施す	ナデ	良好	にぶい 赤褐色	にぶい 褐色	2～7.5mmの乳白色・明褐灰色・褐色の砂粒を含む。	
10	IV	タテ方向の山形押型文	ナデ	良好	黄橙色	浅黄褐色	1～2mmの茶色・灰色・灰白色の砂粒を含む。	
11	IV	山形押型文	ナデ	良好	にぶい 褐色	褐色	2mm以下の灰白色・淡黄色・褐色粒を含む。	
12	IV	貝殻条痕の後、4列の貝殻腹縁による刺突を施す	ナデ	良好	にぶい 褐色	にぶい 褐色	0.5～3mmの茶色・黒色砂粒と雲母を含む。	外面にスス付着

第 1 表 土 器 観 察 表

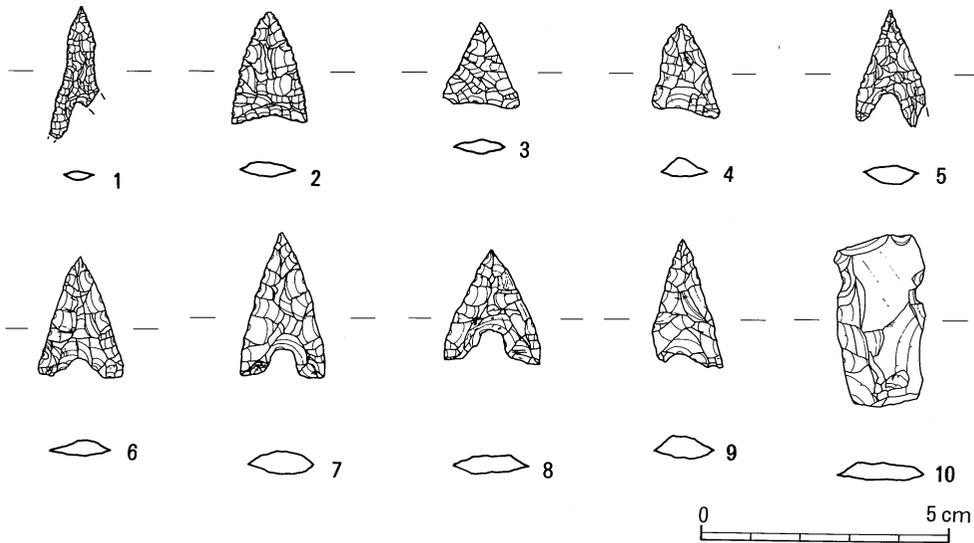


0 10cm

第7图 出土土器实测图(1/3)



0 20cm



第8図 出土遺物実測図 (2/3) (12は1/3)

図面 番号	出土 層位	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材	欠 損 状 況
1	V	石鏃	2.7	1.0	0.2	0.5	チャート	脚片方欠損
2	V	石鏃	2.1	1.6	0.3	1.1	チャート	
3	IV	石鏃	1.6	1.6	0.3	0.7	チャート	脚片方欠損
4	V	石鏃	1.7	1.4	0.4	0.8	チャート	脚片方欠損
5	VI	石鏃	2.4	1.5	0.4	0.8	チャート	脚片方欠損
6	V	石鏃	2.5	1.8	0.3	1.3	チャート	
7	IV	石鏃	3.0	1.7	0.5	1.9	チャート	
8	IV	石鏃	2.3	2.0	0.4	1.5	頁 岩	
9	V	石鏃	2.6	1.5	0.5	1.2	チャート	脚片方欠損
10	V	石匙	3.6	1.9	0.4	3.9	チャート	刃部欠損

第 2 表 石 器 計 測 表

2. 縄文時代前期

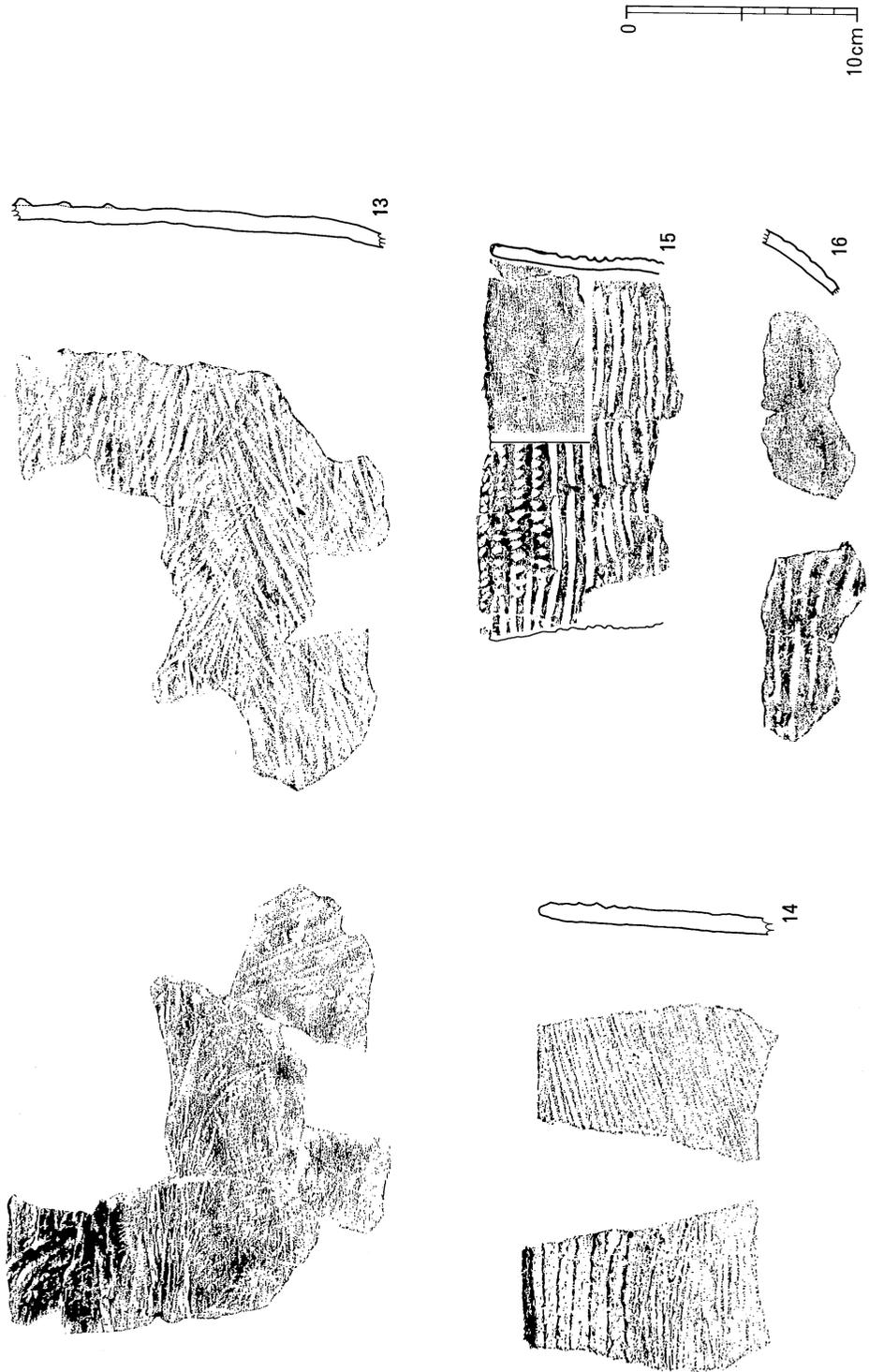
本遺跡から出土した前期の遺物は、基本層序のⅢ-aおよびb層からで明確な分層はできなかった。遺物の分布もほぼ中央付近に集中して出土している（第12図）。後期の遺物も数としては少ないが出土している。土器に関しては、型式により時期をわけたが、石器に関しては時期区分は明確にできないので一括資料とした。

遺 物

土器（第9～11図）

13は、胴部にみみず腫れ状の突帯を3本有する土器片で、14は口縁部付近に6条のつまみだしの突帯を有する土器片である。

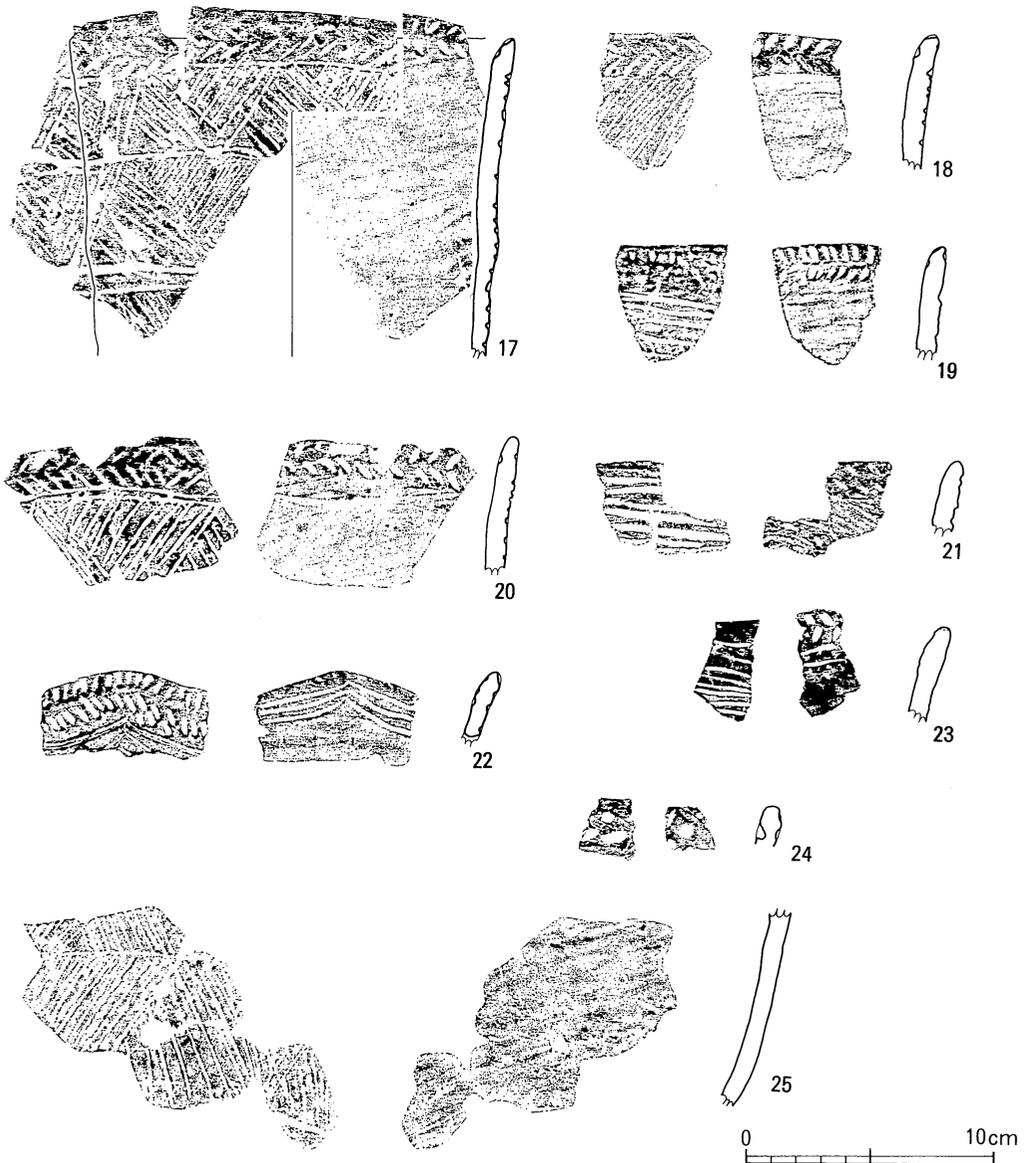
15～31はいわゆる曾畑式土器である。15は口縁部に3条の刺突あるいは、横方向の沈線を持ち、口唇部にも刺突を有する。16は横方向の沈線を持つが、15と同一個体の底部付近と考えられる。17・18・20は、口縁部内・外面に「ハ」の字状の刺突があり、胴部外面にかけて、横方向の沈線と鋸歯状の沈線がしっかりと区画をもっている。19は外面に縦方向と連点の刺突を、その下に横方向の沈線を持ち、内面には「ハ」の字状の刺突を有する。21・23は、外面に横方向の沈線を持ち、内面に「ハ」の字状の刺突を有する。波状口縁で、外面に「ハ」の字状の刺突と、下に山形の沈線を持ち、内面に3条の山形の沈線を持つ。24は外面に「ハ」の字状の刺突があり、内面には点状の刺突を有する滑石混入の口縁部片である。



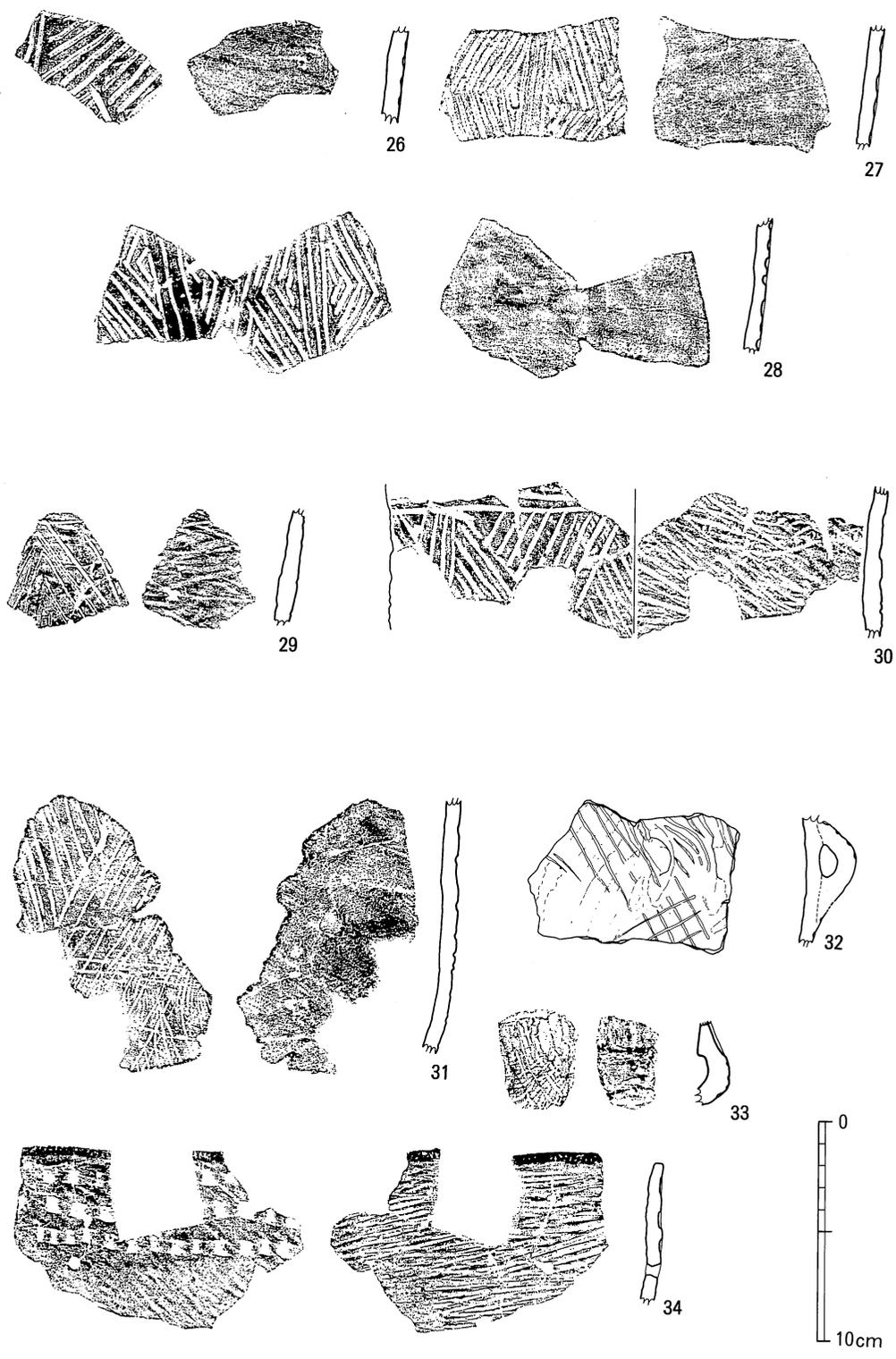
第9图 出土遺物実測図(1/3)

25・28は、横方向と鋸歯状の沈線の区画がはっきりしている胴部片で、とくに28は内面に貝殻条痕を施してある。26も同様と考える。27・29・31は菱形の沈線を持つ胴部片で、30は横方向と鋸歯状の沈線を持つが、やや区画がはっきりとしなくなるタイプである。

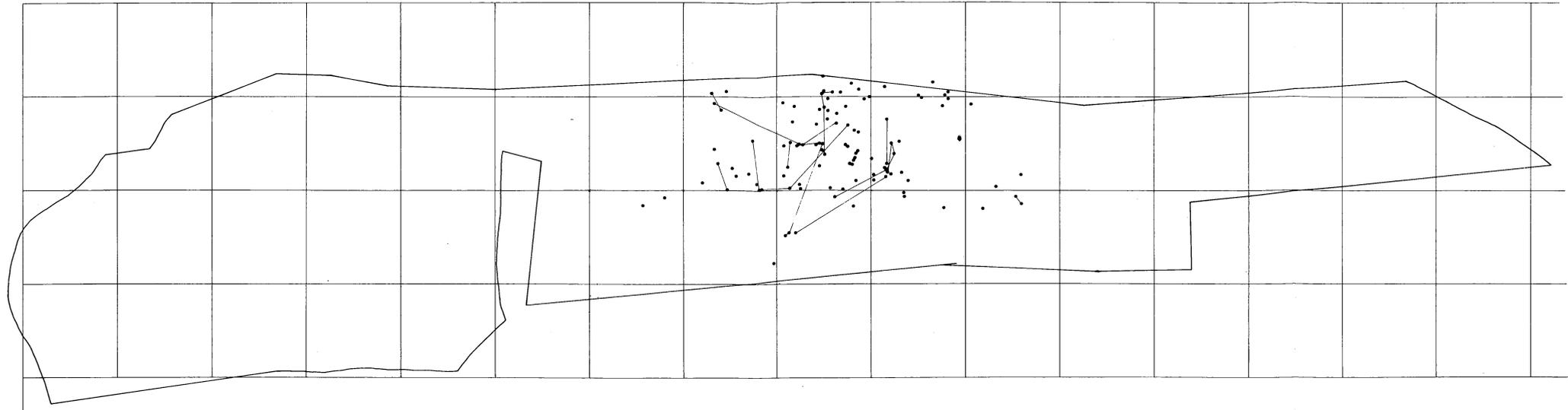
32は口縁付近に3条の押し引きを、その下に、貝殻条痕を施す。瀬戸内系の彦崎ⅡI式に併行する時期と考える。33は取手を有する胴部片で外面は、貝殻条痕を施した後、斜め方向の沈線を入れ、ナデを行っている。内面は、貝殻条痕の施した後、ケズリを斜め、あるいは横方向に施している。34は同一個体の取手の一部と考える。なお、33・34いずれの取手にも沈線が施している。



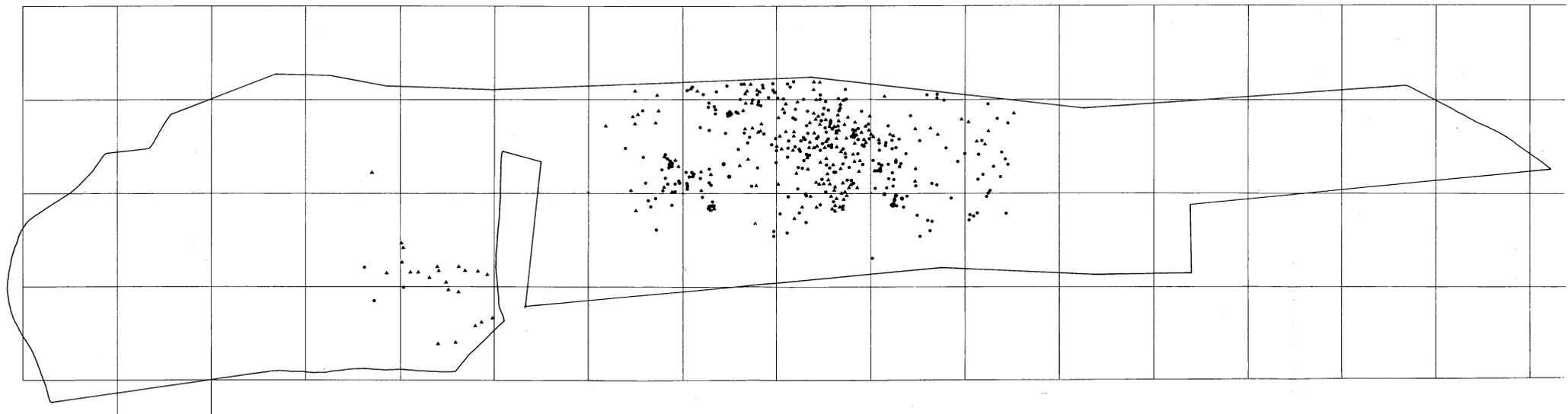
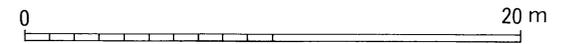
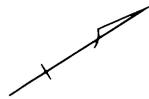
第10図 出土土器実測図 (1 / 3)



第11图 出土土器实测图 (1 / 3)



第12図 遺物出土分布図（前期）（1/300）



第13図 遺物出土分布図（後期）（1/300）

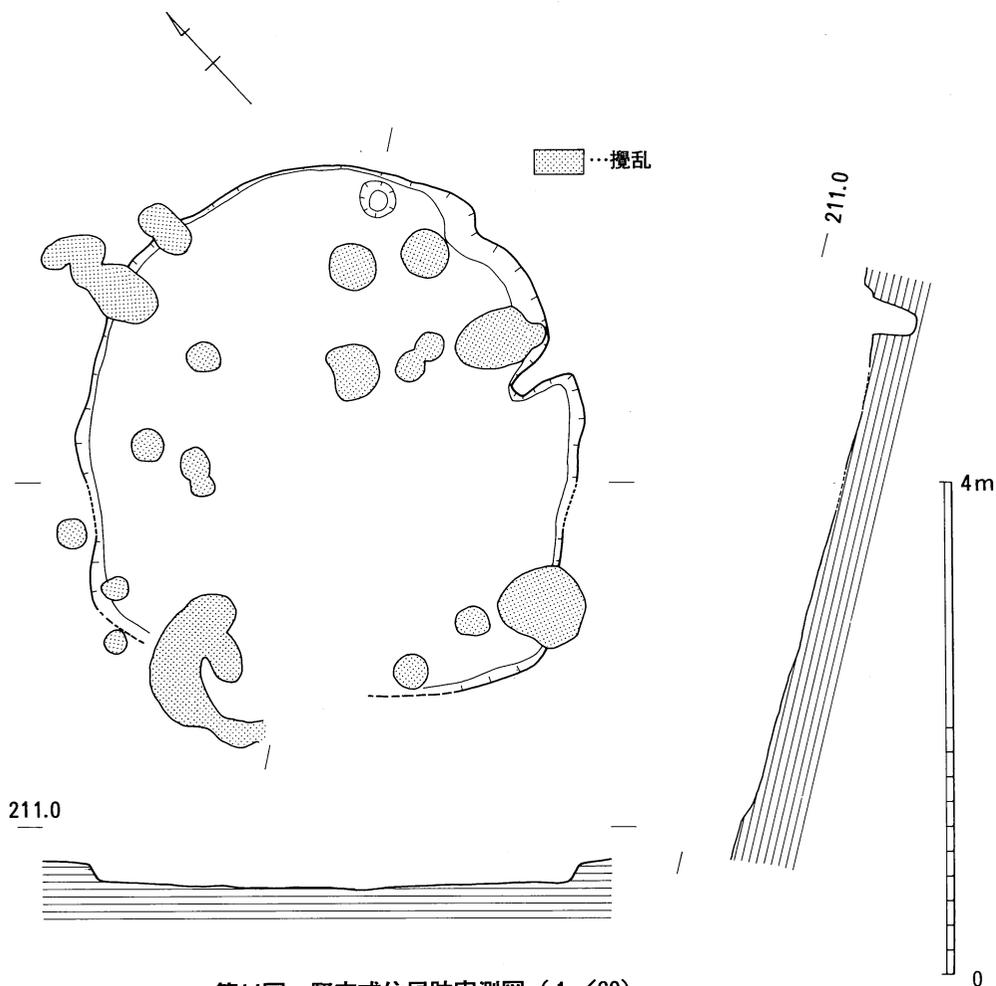
図面 番号	出土 層位	文様および調整		焼成	色 調		胎土の特徴	備 考
		外 面	内 面		外面	内面		
13	Ⅲ	斜め・横方向の突帯を有する。貝殻条痕の後、ナデ	貝殻条痕	良好	明赤褐色	にぶい赤褐色	1～4mmの乳白色・赤褐色・白色の砂粒と黒雲母を含む。	
14	客土	横方向の貝殻条痕を施し、6条のミミズばれ状の突帯を有する	斜め方向の貝殻条痕	良好	にぶい黄橙	灰黄褐色	1mm以下の茶色・乳白色・透明の砂粒を含む。	
15	Ⅲ	横方向の凹線と半竹管による刺突文	ナデ	良好	褐灰色	褐灰色	1mm以下の透明な砂粒・2mm以下の茶色・灰色・乳白色の砂粒を含む。	
16	Ⅲ	横方向の凸凹線がナデによりつぶれている	ナデ	良好	にぶい褐色	淡黄色	3mm以下の褐色・乳白色の砂粒と黒雲母を含む。	
17	Ⅲ	刺突文と斜め方向の沈線	刺突文	良好	にぶい赤褐	にぶい赤褐色	5mm以下の乳白色・黒色・褐色砂粒と雲母を含む。	
18	Ⅲ	刺突文斜め方向の沈線	刺突文	良好	にぶい赤褐	にぶい赤褐色	2mm以下の灰色・褐色の砂粒を含む。1mm以下の雲母を含む。	
19	客土	刺突文横方向の沈線文	刺突	良好	褐色	灰褐色	0.5～2mm以下の乳白色・茶色の砂粒を含む。	
20	Ⅲ	刺突文斜め方向の沈線	刺突文	良好	にぶい橙色	にぶい赤褐色	3mm以下の褐色・灰色の砂粒と雲母を含む。	
21	Ⅲ	横方向の沈線	刺突文	良好	褐灰色	灰褐色	0.5～2mm以下の茶色・透明の砂粒と黒雲母を含む。	
22	Ⅲ	刺突文沈線	3列の波状の沈線を施す	良好	灰褐色	褐灰色	1mm以下の透明な砂粒を多く含み、雲母も含む。	
23	Ⅲ	横方向の沈線	刺突文斜め方向2本の沈線	良好	にぶい赤褐	にぶい橙色	1mm以下の淡黄色・灰白色砂粒と雲母を含む。	
24	客土	斜め方向の刺突文	斜め下方向の刺突文	良好	にぶい橙色	にぶい褐色	1mm以下の褐色粒を含む。滑石混入	
25	Ⅲ	斜め・横方向の沈線	ナデ	良好	にぶい赤褐	にぶい赤褐色	5mm以下の灰褐色・灰色乳白色砂粒と雲母を含む。	
26	Ⅲ	斜め方向の沈線	ナデ	良好	褐灰色	褐色	2mm以下の茶色・透明の砂粒を含む。	
27	Ⅲ	タテ・山形の沈線	ナデ	良好	灰白色	黄灰色	3mm以下の褐色・黒色砂粒を含む。	外面にスス付着
28	Ⅲ	タテ・山形の沈線	ナデ	良好	にぶい黄橙	灰褐色	2mm以下の黄褐色・黒色砂粒を含む。	外面にスス付着
29	Ⅲ	菱形の沈線	横・斜め方向の条痕	良好	褐灰色	にぶい赤褐色	1mm以下の透明・黒色の砂粒を含む。	外面にスス付着
30	Ⅲ	横沈線、斜め方向の沈線	貝殻条痕	良好	赤褐色	にぶい赤褐色	5mm以下の黒色・灰色の砂粒を含む。	
31	Ⅲ	横・斜め方向・弧状の沈線	貝殻条痕	良好	暗褐色	灰褐色	5mm以下の灰褐色・灰色・乳白色砂粒と雲母を含む。	
32	Ⅲ	貝殻条痕の後、斜め方向・斜め方向の格子状の沈線	斜め・横方向のケズリ	良好	明赤褐色	黒褐色	0.5～3mmの灰色・褐色・乳白色・黒色の砂粒を含む。	
33	Ⅲ	タテ方向の凹線の後斜め方向の格子状沈線		良好	明褐色	橙色	0.5～1mmの灰白色・黒色砂粒を含む。	外面にスス付着
34	Ⅲ	斜め方向の貝殻条痕の後、3条の押引列点文	斜め方向の貝殻条痕	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	1mm以下の黒色・灰白色・透明の砂粒を含む。	内・外面にスス付着

第3表 土器観察表

3. 縄文時代後・晩期

(1) 竪穴式住居跡

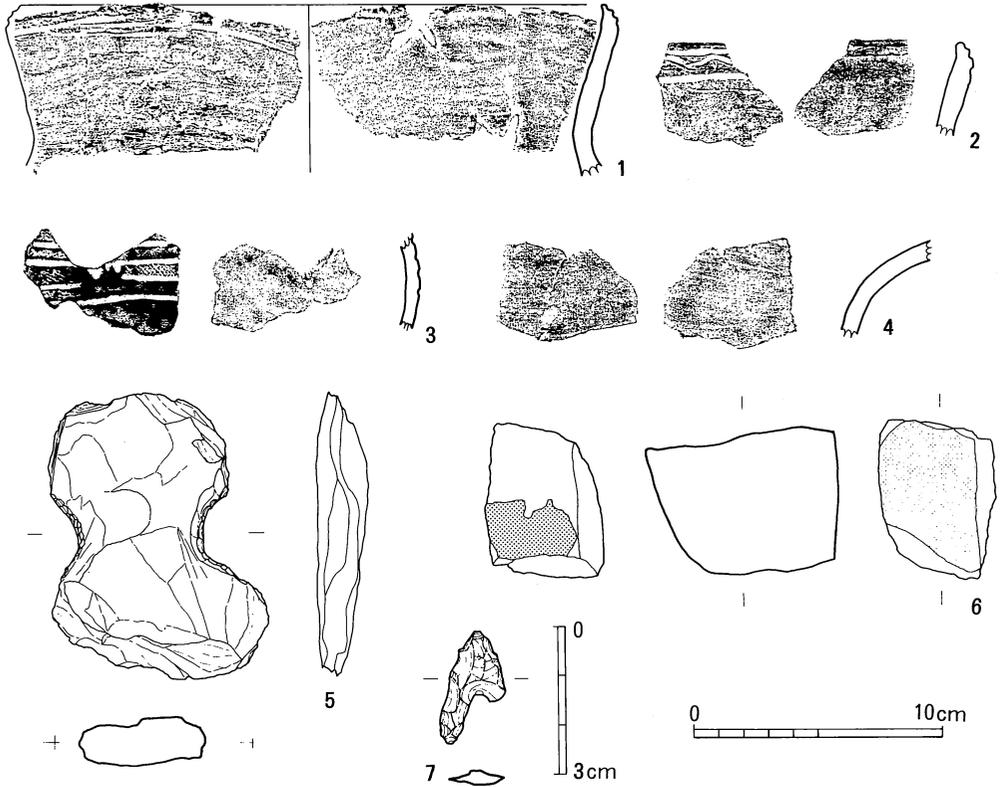
調査区のほぼ中央部で検出した。削平がひどく、また攪乱を受けており平面の全容は明らかでない。遺構の規模は、長軸で約4.4m、短軸4.0mで床面までの検出した深さは、最大で20cmである。北側の方では、円形に近い状態となるが、全体的に方形を基調にした形である。なお、北東側に張り出しを持つ。柱穴は、一本だけ検出できたが、後世の掘りこみであるピットや攪乱が非常に多く、残りの柱穴の確認はできなかった。住居跡内の埋土からは、縄文後期の磨消縄文の土器片や石器類が出土している。



第14図 竪穴式住居跡実測図 (1/60)

出土遺物

1は口縁部片であるが北久根山式と併行する時期と考えられる。2は口縁部片で外面に横方向の沈線を一本もち下に波状の沈線を施している。3は磨消縄文系土器の胴部片である。4は磨研土器の胴部片である。5は中央両側に抉りの入った打製石斧である。7は石鏃、6は破碎してはいるが、磨石と考えられる。



第15図 住居跡出土遺物実測図(1/3) (7は2/3)

図面 番号	文様および調整		焼成	色調		胎土の特徴	備考
	外面	内面		外面	内面		
1	貝殻疑似磨消縄文3本の沈線 ナデ	ナデ	良好	灰赤色 暗赤灰色	灰赤色 に黄褐色	4mm以下の褐色・灰白色砂粒と雲母を含む。	
2	ナデ 横方向の沈線の間に波状の沈線を施す	ミガキ	良好	黒色	黒色	3mm以下の黒・褐色の砂粒と雲母を含む。	
3	磨消し縄文沈線	ナデ	良好	黒褐色	黒褐色	3.5mm以下の乳白色・褐色砂粒を含む。	
4	ミガキ	ミガキ	良好	黒褐色	黒褐色	2.5mm以下の茶色・乳白色の砂粒を含む。	

第4表 土器観察表

図面 番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	欠損状況
5	石斧	11.6	8.8	2.1	228	緑泥片岩	
6	磨石	—	—	—	314	尾鈴酸性岩	
7	石鏃	2.3	1.35	0.3	0.7	砂岩	脚片方欠損

第5表 石器計測表

遺物

土器（第16図～第18図）

出土した土器は、後期から晩期にかけての時期で、磨消縄文系の資料が多かった。揭示した資料は、比較的大きな破片に限り、時期不明の小片は省略した。

35は外面に三角形をモチーフとした凹線を施している。中期末から後期初頭にかけての時期と考えられる。36は頸部から口縁部にかけての土器片で、口縁内面は欠損しているが、外面に2条の沈線が施してある。頸部の下部には横あるいは斜め方向に沈線が施してあり、北久根山式と同じ時期に位置付けられる。37～45は辛川Ⅱ式と平行する時期に位置づけられる。37は肥厚した口縁部片で、38は外面に磨消縄文が見られない。42～45は胴部片で、横方向の沈線を基本として、刺突文や斜め方向の沈線を施す。上部の沈線から下に向けて、曲線がのび、半弧文で支えるように囲む沈線が施されている資料も見られる。46～48は、西平式に併行する時期である。46は口縁部から胴部にかけての復元可能な資料であった。口縁端部に2つの刻みをもち、口縁部外面に3本の沈線をもち、上から2本目の沈線には、左から下にのびる刺突を半弧文で囲む文様が施文してある。また、2本目の沈線は、刺突により区切られている。同部は、刺突文を2本の沈線が挟み、横走る沈線が3本、斜めに上がっていくのが2本施されている。47は、横走る沈線の左から、下に向かって刺突がのび、半弧文で囲む文様が施されている。

49～53は磨研土器の口縁部片、54・55は胴部片である。56～65は突帯を有する口縁部片である。66～69は、底部片である。66・68は平底、67・69は上げ底である。

石器（第19～21図）

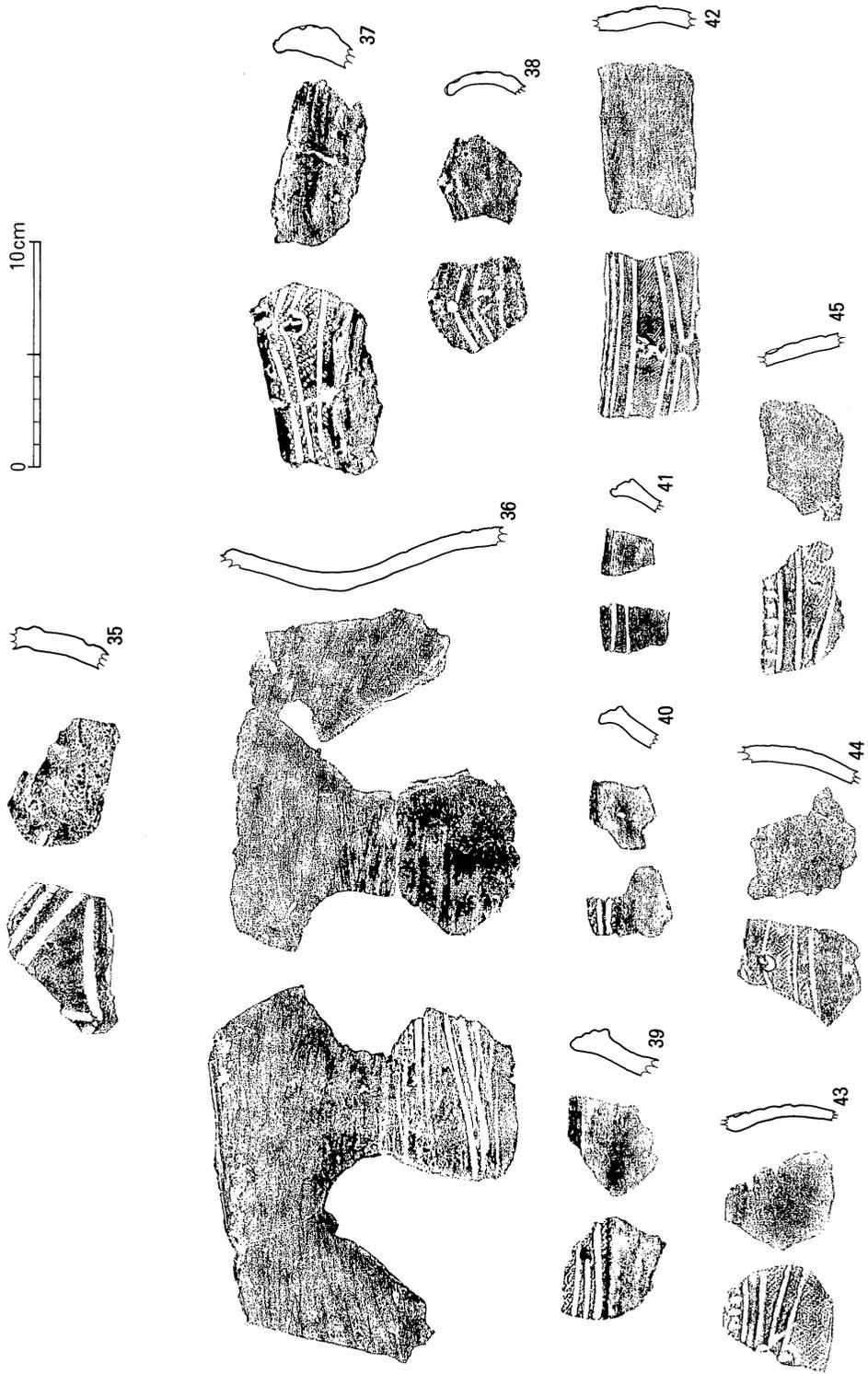
石器は基本層序の第Ⅲ層および客土から出土した資料である。器種は石鏃・敲石・磨石・石錘・石斧である。

11～34は、石鏃である。基部の抉りが深い、いわゆる「鍬形鏃」とよばれる資料と、やや基部の抉りが浅い資料、平面が三角形を呈し基部をややくぼませる資料がある。

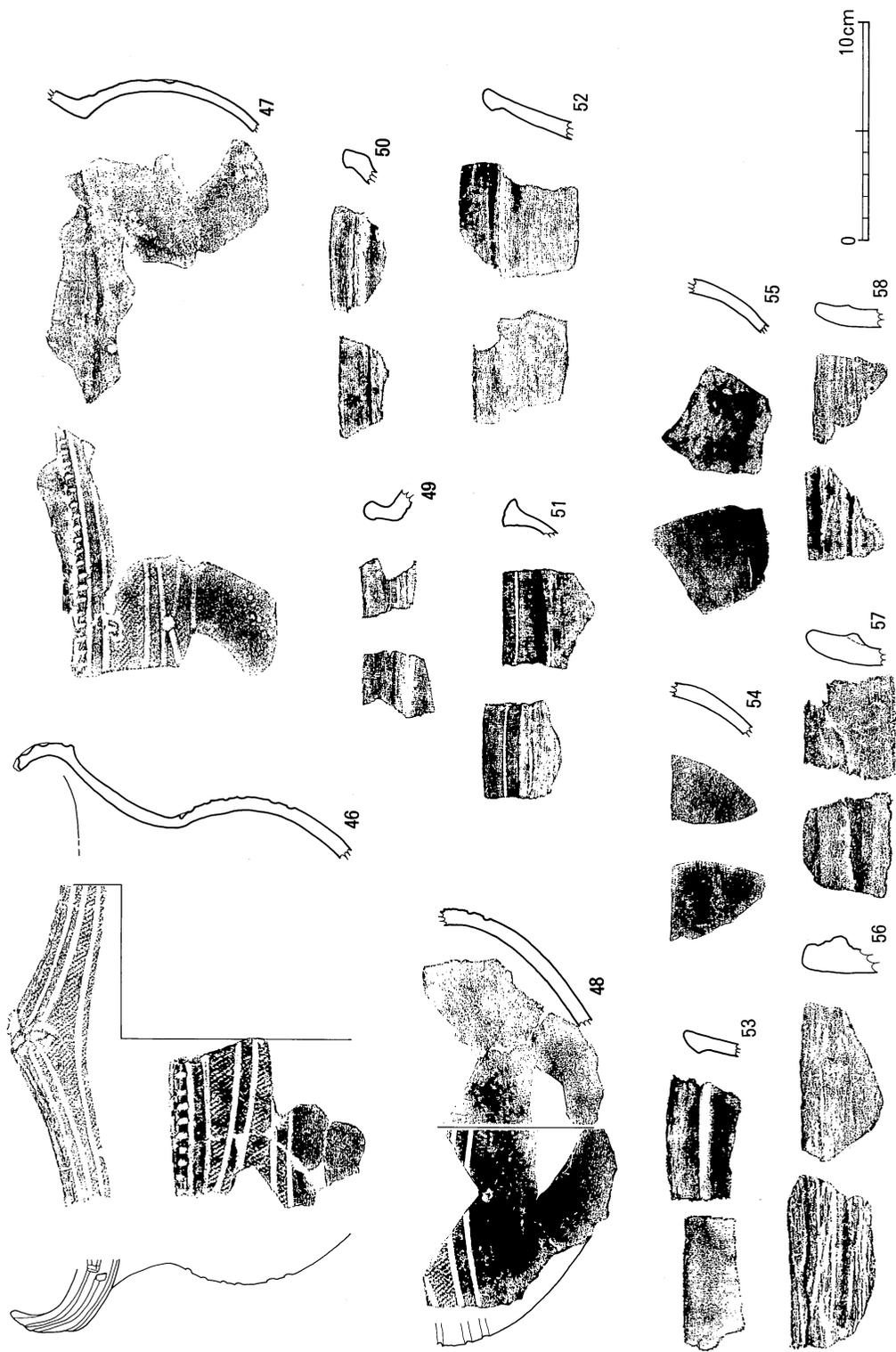
39は石錘で、3箇所抉りを施している。

35は敲石、36～38は磨石である。40～44は石斧である。いずれも偏平な打製石斧で44は刃部が欠損しているが、基部に抉りを入れている。

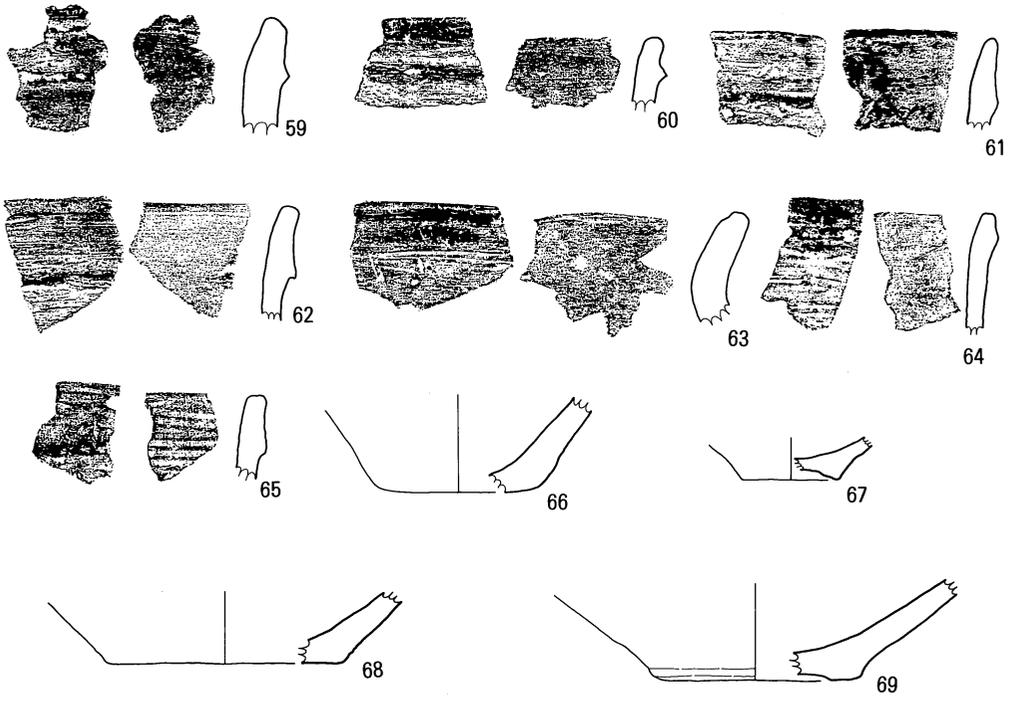
45・46はスクレイパーで、チャート製である。47は縦型の石匙で基部の両側に抉りを入れているが、未製品と考える。



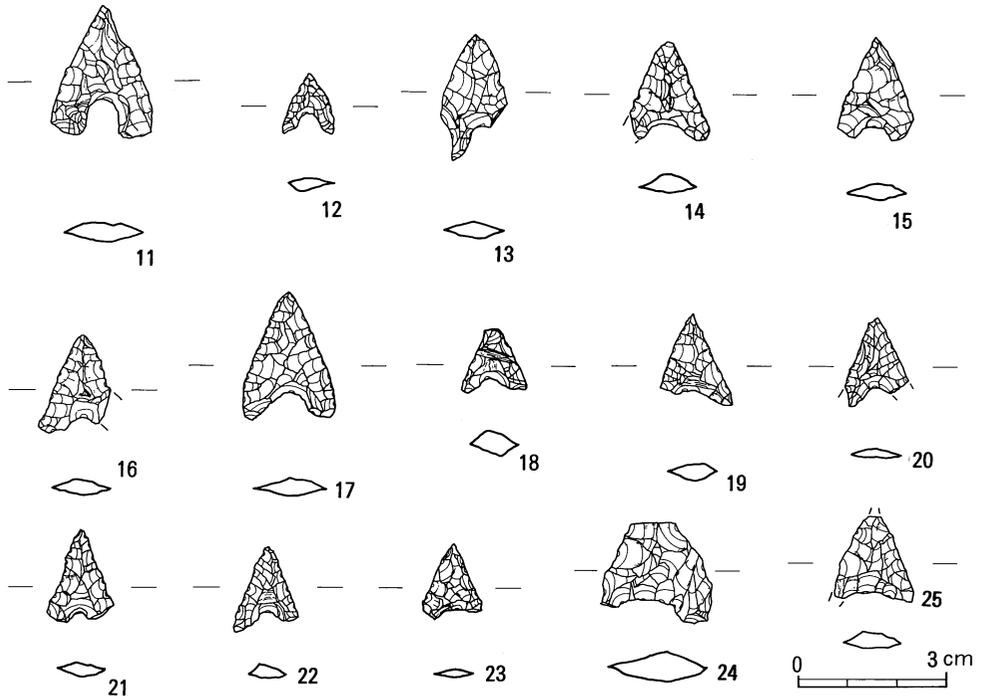
第16图 出土土器实测图 (1/3)



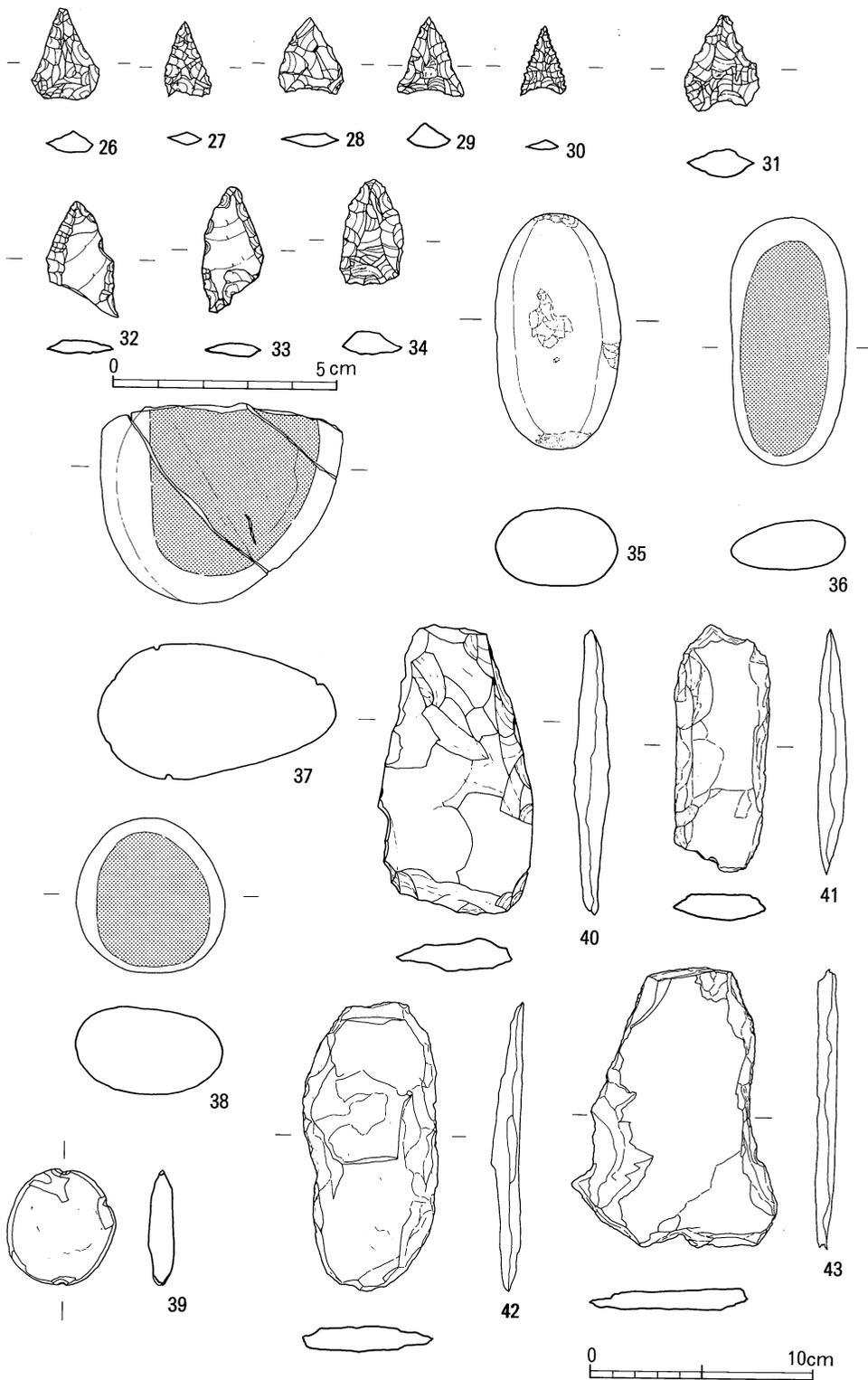
第17图 出土遺物実測図(1/3)



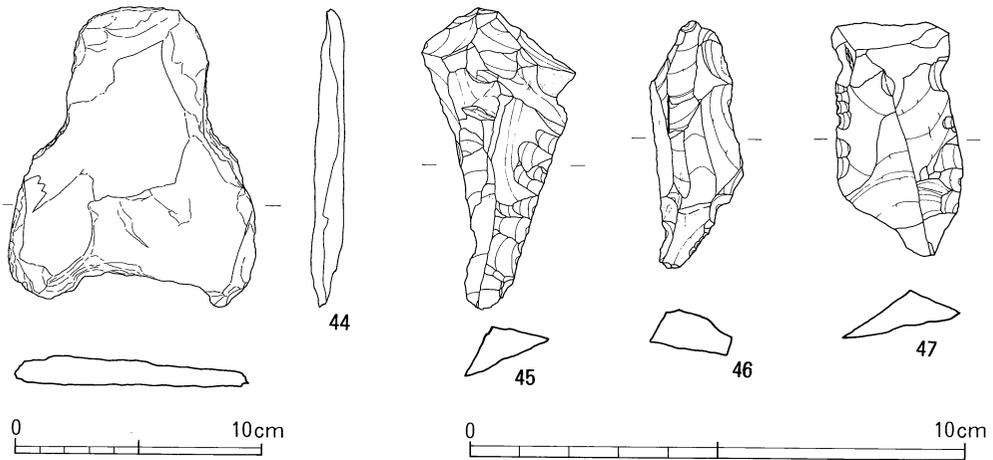
第18图 出土土器实测图 (1 / 3)



第19图 出土石器实测图 (2 / 3)



第20図 出土石器実測図 (26~34は2/3、35~43は1/3)



第21図 出土石器実測図 (44は1/3、45~47は2/3)

図面 番号	出土 層位	文様および調整		焼成	色 調		胎土の特徴	備 考
		外 面	内 面		外面	内面		
35	Ⅲ	ナデの後、太い凹線 を施す	ナデ	良好	橙色	褐色	6mm以下の褐色・赤 褐色・乳白色の砂粒 を含む。	
36	Ⅲ	斜め方向のミガキ 横方向のナデ	横・斜め方向のミガ キ	良好	にぶい 橙色	褐灰色 にぶい褐色 にぶい黄褐色	1mm程度の透明・茶 色・黒色の砂粒を含 む。	
37	客土	沈線縄文を施し、一 部磨消した後。沈線 文	横・斜め方向のミガ キ	良好	褐灰色 にぶい 橙色	褐灰色	5mm以下の赤褐色・ 灰白色・砂粒および 雲母を含む。	
38	客土	ナデ	ナデ	良好	黄褐色	浅黄褐色	1mm以下の灰白色・ 褐色の砂粒および雲 母を含む。	
39	Ⅲ	地文に磨消縄文を施 し、3本の沈線を施 す沈線の一部に刺突	ナデ	良好	暗赤褐色	にぶい 赤褐色	3mm以下の淡黄色・ 褐色・黒色砂粒を含 む。	
40	客土	地文に磨消縄文、2 本の沈線を施す	ナデ	良好	淡黄色	淡黄色	2mm以下の淡黄色・ 褐色・黒色砂粒を含 む。	
41	客土	磨消縄文 2本の沈線を施す	横方向のミガキ	良好	にぶい 赤褐色	にぶい 褐色	0.5mm以下の透明・灰 白色の砂粒を含む。	
42	客土	磨消縄文、 刺突文、沈線	ナデ	良好	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	0.5~1mm以下の茶色 ・乳白色の砂粒を含 む。	
43	客土	磨消縄文、 刺突文、沈線文	斜め・横方向のミガ キ	良好	褐色	黒褐色	0.5~2mm以下の灰色 ・褐色・砂粒と、雲 母を含む。	
44	Ⅱ	磨消縄文 沈線文	ナデ	良好	浅黄褐色 褐灰色	黄灰色	1mm以下の茶色・黒 色・透明の砂粒を含 む。	外面にスス附着
45	Ⅲ	磨消縄文、沈線文、 刺突文	ナデ	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	1mm以下の黒色・茶 色・灰色・白色の砂 粒を含む。	
46	Ⅲ	磨消縄文	横方向のミガキ ナデ	良好	にぶい 褐色	黒色	2mm以下の褐色・雲 母を含む。	
47	Ⅲ	磨消縄文、ナデ 沈線、刺突文	ナデ	良好	橙色 黒褐色	黒褐色	3mm以下の灰色・褐 色・乳白色・透明な 砂粒を含む。	
48	Ⅲ	磨消縄文、ミガキ 沈線文	ナデ	良好	にぶい 赤褐色 褐灰色	浅黄褐色 にぶい 褐色	2mm以下の黒色・褐 色・乳白色の砂粒を 含む。	
49	客土	横方向のミガキ	横方向のミガキ	良好	暗赤灰色	暗赤灰色	暗赤灰色の微砂粒を 含む。	

第6表 土器観察表

図面 番号	出土 層位	文様および調整		焼成	色 調		胎土の特徴	備 考
		外 面	内 面		外面	内面		
50	客土	横方向のミガキ	横方向のミガキ	良好	明赤褐色	赤褐色	2mm以下の黒褐色・乳白色の砂粒を含む。	
51	客土	横・斜め方向のミガキ	横方向のミガキ	良好	明赤褐色	暗赤灰色	微砂粒を含む。	
52	Ⅲ	横・斜め方向のミガキ	横方向のミガキ	良好	にぶい赤褐色 明赤褐色	赤褐色	2mm以下の黒褐色・乳白色の砂粒を含む。	
53	客土	横・縦方向のミガキ	横方向のミガキ	良好	暗赤褐色	暗赤褐色	微砂粒を含む。	
54	Ⅱ	横・斜め方向のミガキ	横方向のミガキ	良好	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	0.5mmの黄褐色の砂粒を含む。	
55	客土	横方向のミガキ	横方向のミガキ	良好	にぶい黄褐色	褐灰色	0.5～1.5mmの茶色・淡黄色の砂粒を含む。	
56	客土	貝殻条痕の後、横ナデ突帯を有する	ナデ	良好	にぶい橙色	にぶい褐色	1mm以下の透明砂粒と雲母を含む。	
57	客土	ナデ、突帯を有する	ナデ	良好	明赤褐色	にぶい橙色	2mm以下の淡黄色・黒色・透明な砂粒および雲母を含む。	
58	客土	貝殻条痕を施した後ナデ、突帯を有する	貝殻条痕	良好	赤褐色	にぶい赤褐色	2mm以下の淡黄色・灰白色・褐色・透明な砂粒を含む。	
59	客土	横・斜め方向のナデ突帯を有する	ナデ	良好	黒色	にぶい褐色	3mm以下の褐色・灰白色の粒と雲母を含む。	
60	客土	ナデ、突帯を有する	ナデ	良好	にぶい赤褐色	褐色	0.5～1mmの茶色・黒色・透明の砂粒を含む。	
61	客土	ナデ、突帯を有する	ナデ	良好	黒褐色 にぶい褐色	灰褐色 にぶい褐色	2mm以下の黒・透明・灰色・茶色の砂粒を含む。	
62	客土	ナデ、突帯を有する	ナデ	良好	褐色	にぶい褐色	2mm以下の淡黄色・黒色砂粒と雲母を含む。	
63	客土	ナデ	ナデ	良好	にぶい褐色	にぶい褐色	2mm以下の灰色・乳白色・茶色・透明な砂粒と雲母を含む。	
64	客土	貝殻条痕のあとナデ突帯を有する	貝殻条痕のあとナデ	良好	褐灰色	にぶい黄褐色	3mm以下の茶色・黒色・乳白色・透明な砂粒を含む。	
65	客土	ナデ	貝殻条痕のあとナデ	良好	灰褐色	灰褐色	2mm以下の茶色・黒色・透明な砂粒を含む。	
66	客土	ナデ	ナデ	良好	にぶい褐色	浅黄褐色	4.5mm以下の乳白色・白色・褐色砂粒を含む。	
67	客土	風化が著しく不明	ナデ	良好	にぶい黄褐色	黒褐色	1mm以下の淡黄色・灰色・褐色・黒色砂粒を含む。	
68	客土	ナデ、一部に工具痕が残る	ナデ	良好	明黄褐色	褐灰色	3mm以下の淡黄色・灰色・褐色砂粒を含む。	外面にスス付着
69	客土	ナデ	ナデ	良好	褐色 灰褐色 にぶい黄褐色	灰黄色 黒褐色	2mm以下の灰白色・淡黄色・褐色・黒色の砂粒を含む。	

第7表 土器観察表

図面 番号	出土 層位	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材	欠損状況
11	客土	石鏃	2.7	2.1	0.4	1.9	チャート	
12	Ⅲ	石鏃	1.3	1.1	0.3	0.2	チャート	
13	客土	石鏃	2.6	1.3	0.4	0.9	チャート	脚両方欠損
14	客土	石鏃	2.1	1.7	0.45	1.0	チャート	脚片方欠損
15	客土	石鏃	2.1	1.6	0.3	0.8	チャート	脚両方欠損
16	客土	石鏃	2.0	1.5	0.4	0.8	チャート	脚片方欠損
17	Ⅲ	石鏃	2.6	1.9	0.4	1.3	チャート	
18	Ⅲ	石鏃	1.3	1.4	0.5	0.5	チャート	先端部欠損
19	Ⅲ	石鏃	1.9	1.5	0.35	0.8	チャート	脚片方欠損
20	客土	石鏃	1.8	1.45	0.2	0.4	チャート	脚片方欠損
21	客土	石鏃	1.9	1.4	0.3	0.7	チャート	脚両方欠損
22	客土	石鏃	1.7	1.3	0.3	0.5	チャート	脚片方欠損
23	Ⅲ	石鏃	1.6	1.25	0.2	0.4	チャート	脚両方欠損
24	客土	石鏃	2.05	2.3	0.6	2.7	チャート	先端脚片方欠損
25	客土	石鏃	1.8	1.6	0.35	0.8	チャート	先端脚片方欠損
26	Ⅲ	石鏃	2.1	1.5	0.5	1.3	チャート	先端脚両方欠損
27	Ⅲ	石鏃	1.7	1.1	0.3	0.5	チャート	脚片方欠損
28	客土	石鏃	1.7	1.5	0.35	0.7	チャート	
29	客土	石鏃	1.8	1.55	0.55	0.9	チャート	
30	Ⅲ	石鏃	1.6	1.05	0.25	0.2	チャート	脚片方欠損
31	客土	石鏃	2.2	1.7	0.65	1.8	チャート	
32	客土	石鏃	2.6	1.7	0.3	1.3	チャート	脚片方欠損
33	客土	石鏃	2.8	1.4	0.3	1.3	チャート	脚片方欠損
34	客土	石鏃	2.4	1.45	0.5	1.9	チャート	
35	Ⅲ	敲石	10.6	5.6	3.55	330	砂岩	
36	客土	磨石	11.2	5.3	2.2	226	砂岩	
37	Ⅲ	磨石	9.1	10.8	6.1	772	砂岩	1/2欠損
38	Ⅲ	磨石	6.95	6.7	3.95	252	尾鈴酸性岩	
39	Ⅲ	石錘	5.2	4.85	1.2	45	緑泥片岩	
40	客土	石斧	13.0	7.1	1.6		緑泥片岩	
41	Ⅲ	石斧	11.1	4.3	1.2	74	緑泥片岩	
42	Ⅲ	石斧	13.1	6.2	1.2	112	緑泥片岩	
43	Ⅱ	石斧	12.6	9.3	0.8	128	緑泥片岩	
44	客土	石斧	12.3	10.1	1.1	155	緑泥片岩	
45	Ⅲ	スクレイパー	6.1	3.2	0.8	13.7	チャート	
46	Ⅲ	〃	5.1	2.0	0.9	8.1	チャート	
47	Ⅱ	石匙?	4.8	2.7	0.7	12.9	チャート	

第8表 石器計測表

第6節 まとめ

試掘調査の結果を裏付けるかのごとく、本遺跡では縄文早期・後・晩期の遺物や遺構が検出された。そして、曾畑式土器などの前期の良好な資料も出土し、予想外の成果も得られた。

調査範囲が狭く、限られた範囲の調査になったが、層序もしっかりとしており、わずかではあるが本遺跡周辺の縄文時代の様相が垣間見ることができたのではないだろうか。以下、調査の結果に関して気付いたことを述べてまとめとしたい。

前期の遺物

田向遺跡で出土した前期の遺物は、第9～11図に示したが、13・14の土器は、ミミズばれ状の突帯を有し、器面の調整が貝殻条痕を施してあることより轟B式土器と考える。

15～31は曾畑式土器で、34は、外面の押し引き文が彦崎Z I式に類似することにより、瀬戸内の影響を受けた土器と考える。32・33は内・外面の調整および施文・胎土などから前期の範疇に入れた。

出土した曾畑式土器は、ほとんどが区画が明確で、31の資料がやや区画が崩れるタイプである。文様から見るとI期の新段階からII期の古段階にかけての時期が該当する。ただ、本遺跡出土資料の特徴として、器壁が厚く、30の内面に貝殻状痕をはっきりと残している資料があることより、九州西北部あるいは中部の同時期とは異なる点をもつ。また、24の資料は滑石が混入している。

現在の段階では、轟B式→曾畑式土器に先行する土器→曾畑式の図式が定まりつつあるが、本遺跡では、調査範囲の制約もあり、曾畑に先行する土器の出土がなく前記の図式の連続性は追及できなかった。ただ、推測の域を脱しきれないが、前述した32・33の資料は、曾畑に先行する時期に当てはまるのかもしれない。

また、曾畑第I期からII期にかけての時期の資料が出土したことより、従来の分布域が広がりを見せたことは注目できる。すなわち、九州脊梁山地を越えて東九州側に展開したことになる。五ヶ瀬川水系を利用した交流があったならば、中流および下流域にも曾畑式土器が普及していったかもしれないが、現在のところ出土した報告は少ない。そして、前述したように器型および調整についても注目できる。滑石混入の資料が出土していることから、九州西北部からの移入品もあるが、施文は古い段階の様式で、内面の貝殻条痕による調整や器壁の厚い資料などは、地域色を示す資料と考えられる。

後期の遺構・遺物

検出された遺構は、竪穴式住居跡1軒である。出土した遺物より後期後半の時期と考える。攪乱などで遺構の平面プランは全容がつかめないが、方形を基調としている。住居跡の一部に、張り出した部分があるが突出壁と考えた方がよいのか慎重に検討する必要がある。現在のところ、本遺跡周辺で検出されている縄文時代後期の住居跡はなく、晩期のセベツ遺跡で1軒だけ検出されているだけである。今後の調査による資料の蓄積を待ちたい。

土器は、磨消縄文系の資料がほとんどである。北久根山式から西平式までの変遷を辿ることができる。後期磨消縄文系の土器は細分化が行われ、出土した資料の中にも辛川式の範疇に含まれるものがある（第17図37～45）。田向遺跡の資料は各型式の標識となるものとは、若干異なるものもある。中でも第19図46の資料は、口縁端部にV字状の切り込みを2つ持ち、口縁波頂部外面には、沈線左側から下に向かって刺突を、そして半弧文で囲むような施文を持つ。西平式の範疇としているが、まったく同じ型式ではなく西平式の影響を受けた土器である。

かつて、陣内遺跡出土の磨消縄文系土器の編年が岩永哲夫氏、永友良典氏らによって試みられている。岩永編年では、西平式を3つに区分しているが、本遺跡出土の第19図46の資料を、どの時期に位置付けるか検討の必要がある。

《参考・引用文献》

- 1 中村愿「曾畑式土器」『縄文文化の研究』3
- 2 水ノ江和同「中・南九州の曾畑式土器」『肥後考古』第7号 1990
- 3 水ノ江和同「西北九州における曾畑式土器の諸様相」『考古学と地域文化』同志社大学考古学シリーズⅢ
- 4 熊本県教育委員会「曾畑」熊本県文化財調査報告 第100集 1988
- 5 桑畑光博「九州の曾畑式土器とその前後」『考古学ジャーナル』365 1993
- 6 富田 紘一「西山南麓の未紹介遺跡」『戸坂遺跡発掘調査報告書』熊本市教育委員会
- 7 宮崎県総合博物館「陣内第2遺跡」『埋蔵文化財調査研究報告』Ⅰ 1987
- 8 高千穂町教育委員会「陣内遺跡」『高千穂町文化財調査報告書』第8集 1989
- 9 北方町教育委員会「笠下原遺跡」『北方町文化財報告書』第4集1992

註 曾畑式土器の時期区分は、水ノ江和同氏の設定を用いた。後期の土器については、富田紘一氏の上記の6の文献を参考にした。

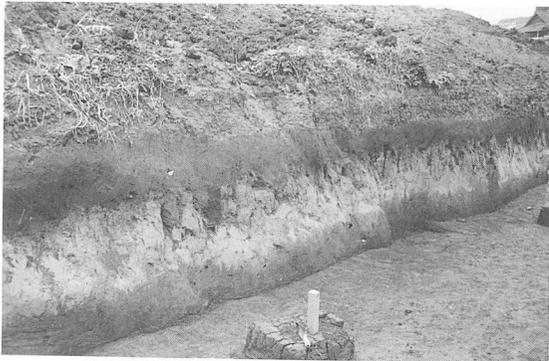
なお、曾畑式土器については、桑畑光博氏（都城市教育委員会）に御教示いただいた。



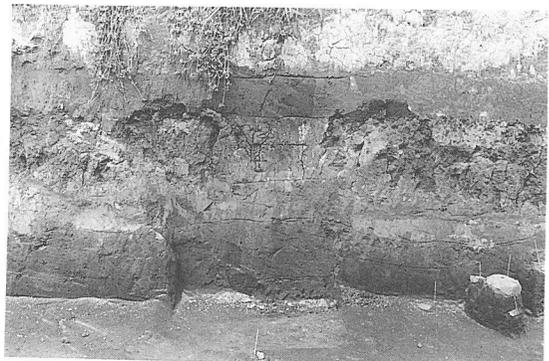
遺跡遠景（北より）



表土剥ぎ



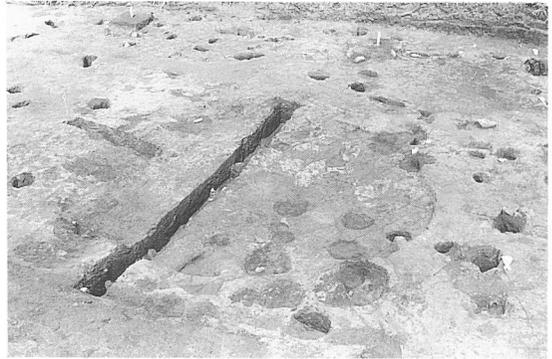
土層の状態（アカホヤ火山灰層の残存状況）



基本層序



アカホヤ層上面での調査区の状況
(南より)



竪穴式住居跡
検出状況
(東から)



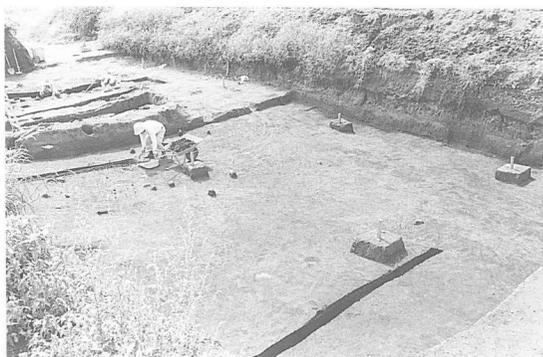
チャート剥片出土状況



石臼出土状況



作業状況



作業状況



遺物出土状況
(第V層)

1号集石遺構





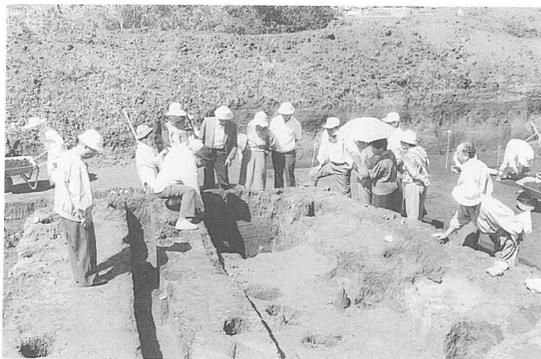
2号集石遺構

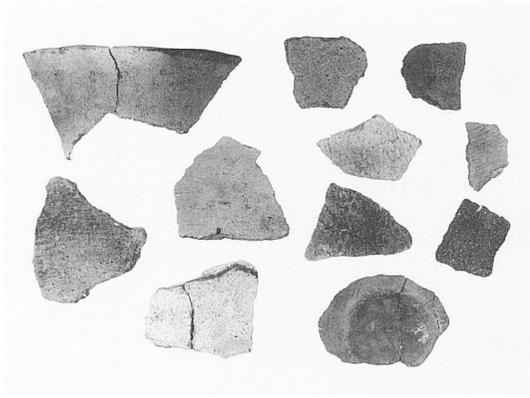
塞ノ神式土器出土状況



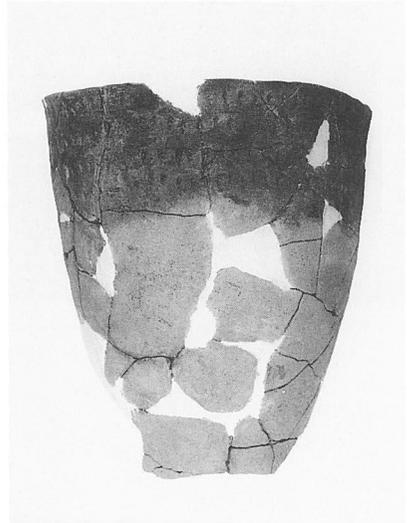
調査終了状況

遺跡見学会

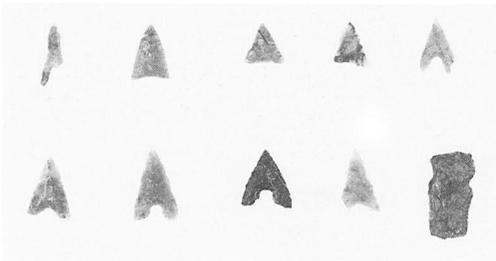




早期の土器



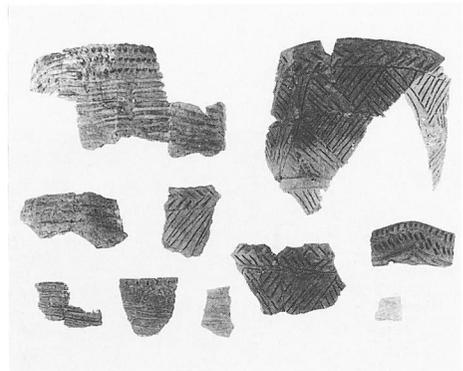
早期の土器



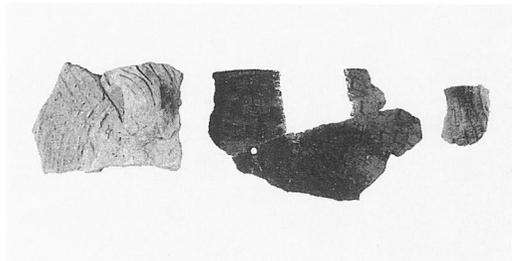
早期の石器



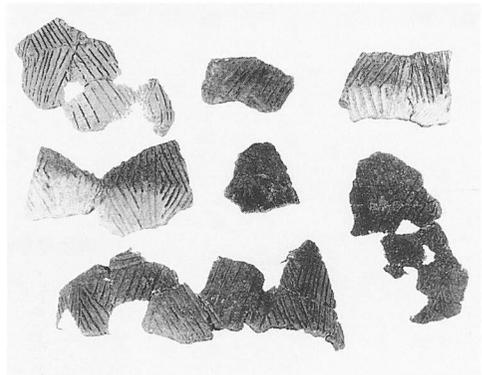
轟B式土器



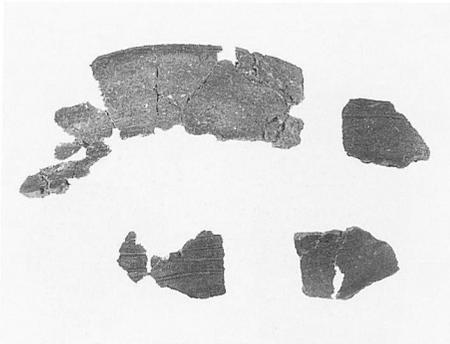
曾畑式土器



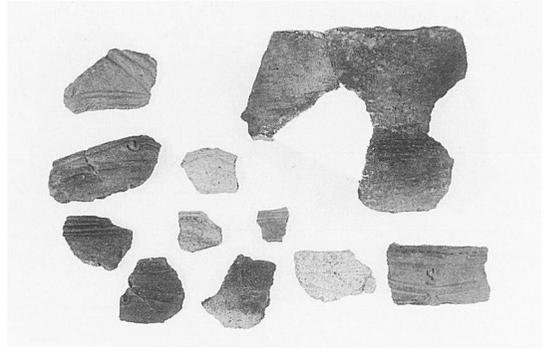
前期?の土器



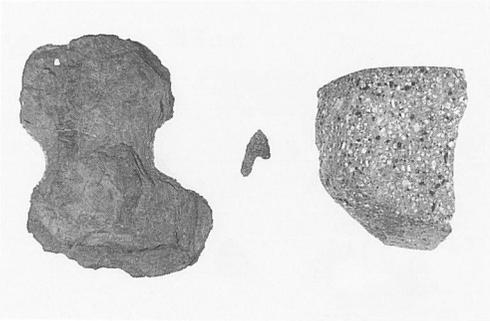
曾畑式土器



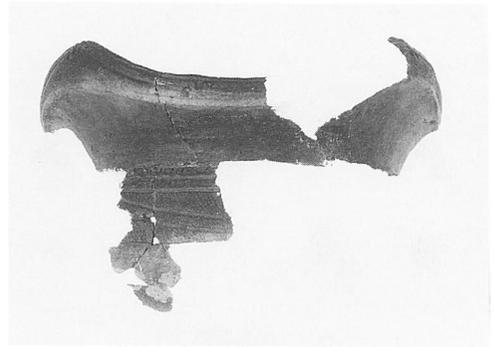
住居跡出土土器



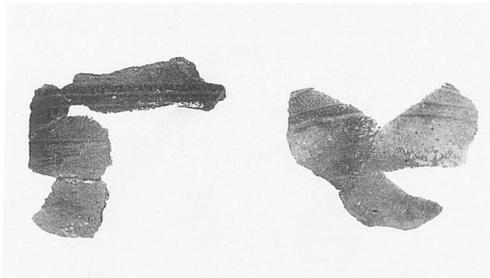
後期の土器



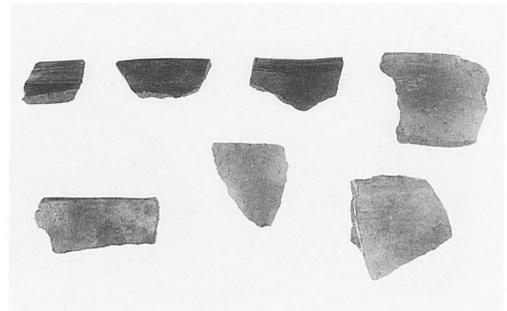
住居跡出土土器



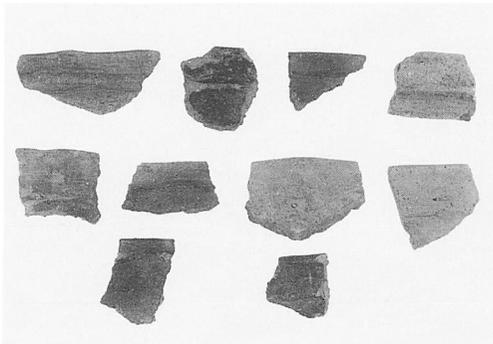
後期の土器



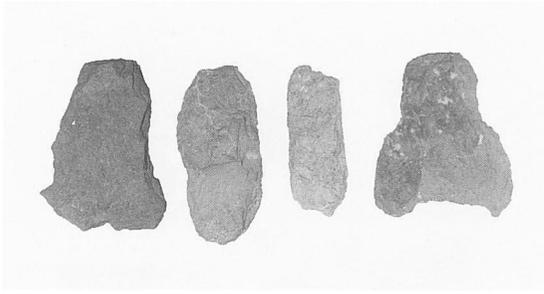
後期の土器



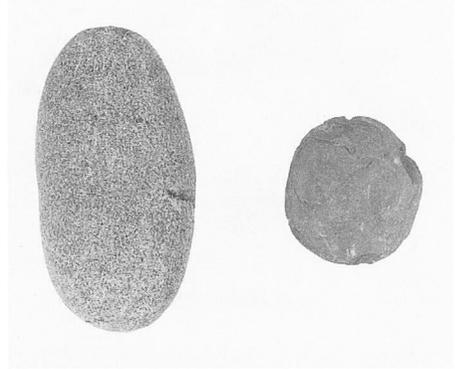
晩期の土器



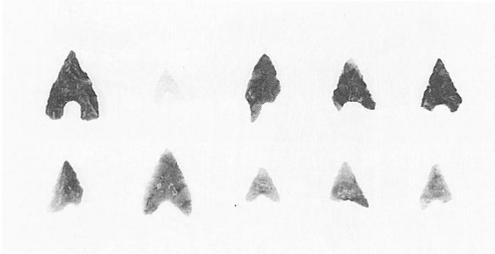
晩期の土器



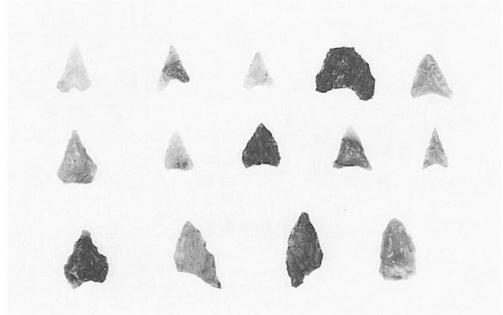
出土石斧



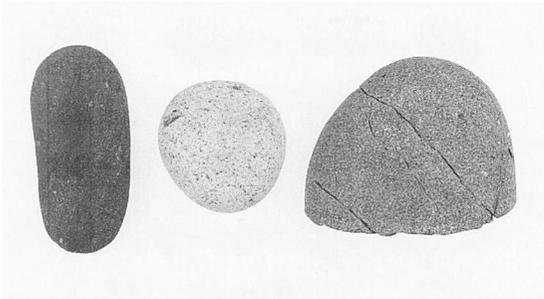
出土石器



出土石鏃



出土石鏃



出土磨石



出土石器

第3章 平谷遺跡

第1節 調査の概要

本遺跡は、傾斜地を削平して数段狭い平坦面を形成し、その平坦面を水田や畑として利用していたため、各平坦面ごとにⅠ～Ⅹ区を設定して調査をおこなった（第1図参照）。

重機による表土剥ぎの後、試掘調査の結果や、旧地形がかなり急斜面であったことから、遺構、遺物の残存する可能性が低いと考えられたⅡ～Ⅶ区と、水田の一部が調査対象となる部分（第1章第2図A、以下A区と呼ぶ）に関しては、トレンチ調査をおこなった。A区では、すべての水田面において、耕作土直下より第Ⅹ層以下の堆積が確認されたため、この時点で調査区から除外した。Ⅱ～Ⅶ区では、各区ごとに5～7本のトレンチを設けて調査を進めたが、各区ともほぼアカホヤ層下まで削平をうけており、若干残りのよかった部分では面的に広げてはみたものの、やはり、遺構、遺物は検出できなかった。しかし造成時に生じた客土と思われる第Ⅰ層中より、縄文時代早期の押型文土器片、縄文時代後期の西平式系土器片、縄文時代晩期の突帯文土器片、打製石鏃等が混在するかたちで出土した。また、Ⅹ区は、調査対象となる部分が平坦面の斜面側にあたり、かなり深い削平をうけ、耕作土直下より第Ⅹ層以下の堆積が確認されたため、A区と同じく調査区から除外した。これ以後、調査は、Ⅰ、Ⅷ、Ⅸ区に絞っておこなった。

Ⅰ区では、やはり、第Ⅰ層中より上述したような遺物と、弥生土器片、打製石斧等が出土した。第Ⅳ層（包含層）中から縄文時代早期の押型文土器片が出土し、この層上面で弥生時代後期の住居址1軒、縄文時代早期の集石遺構1基を検出した。

Ⅷ区は、全調査区中最も広く、アカホヤ層が比較的広範囲に残存しており、弥生時代後期の住居址1軒をこの層上面で検出できた。また、第Ⅳ層下位で縄文時代早期の集石遺構3基を検出した。

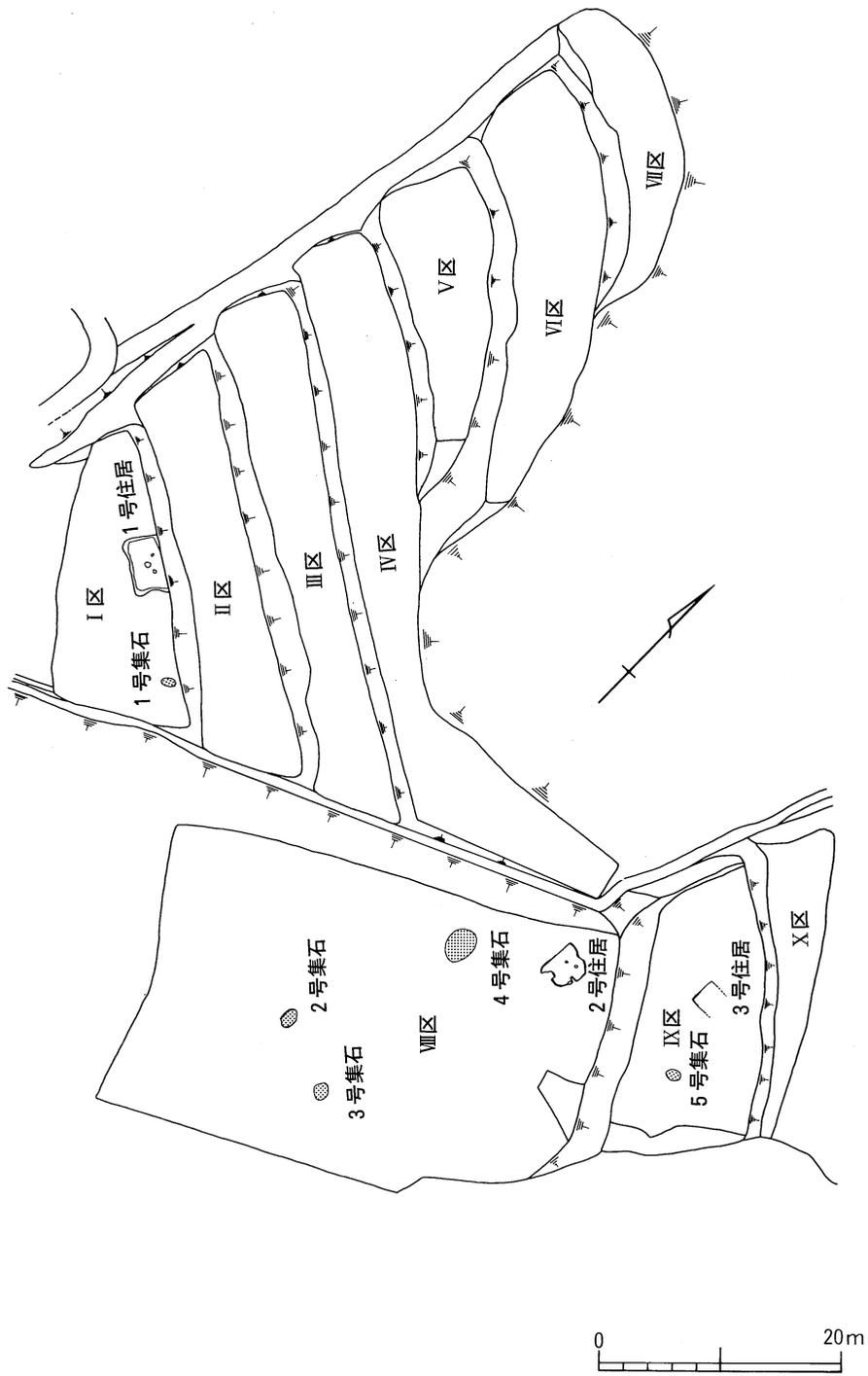
Ⅸ区では、第Ⅳ層上面で弥生時代後期の住居址の一部とみられる落ち込み、散礫がみられ、この散礫中より縄文時代早期の集石遺構1基を検出した。（第1図参照）

第2節 層序

平谷遺跡の基本層序は、Ⅷ区北東端において確認した。（第2図）

第Ⅰ層から第Ⅱ層は、水田面確保のために造成により移動したらしく、これらの層位中より時期を異にした遺物が混じって出土している。また、第Ⅲ層のアカホヤ火山灰と第Ⅶ層の始良・丹沢火山灰（AT）は場所によって堆積がみられない部分があり、前述の造成や旧地形の傾斜といった二次的移動の様相がうかがえる。（第3図）

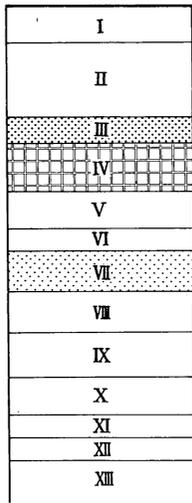
今回、包含層としてとらえたのは第Ⅳ層で、押型文土器、石鏃といった縄文時代早期遺



第1图 遺構分布图 (1 / 600)

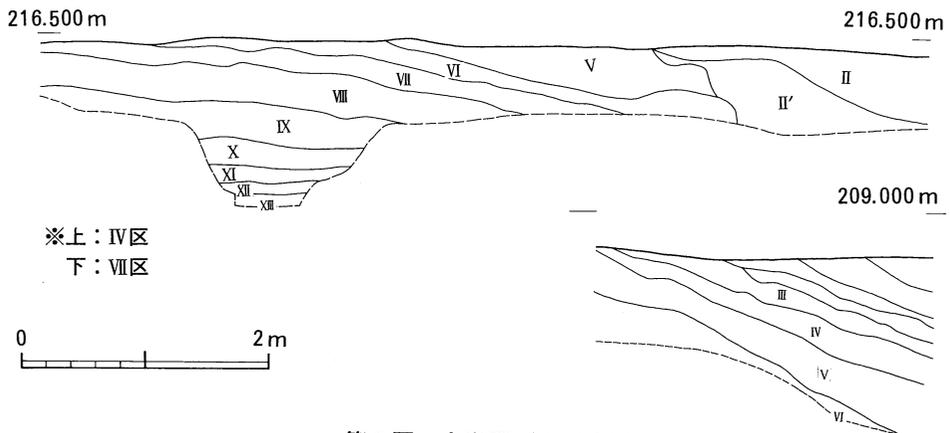
物の包含層であった。

なお、本遺跡では古環境研究所による土壌分析を実施したが、諸般の事情により割愛した。



第2図 土層概念図

- I層 表土（耕作土、水田の床土も含む）
- II層 造成時に生じたと思われるⅢ、Ⅳ、Ⅴ層の混合土
- Ⅲ層 アカホヤ火山灰
- Ⅳ層 暗褐色土（10YR 3／4）縄文時代早期包含層、しまっている。
- Ⅴ層 黒褐色土（10YR 3／2）しまっている。
- Ⅵ層 黄褐色粘質土（10YR 5／6）固くしまっている。
- Ⅶ層 始良・丹沢火山灰（AT）上下の層との混合がはげしく、完全な純層ではない。
- Ⅷ層 黄褐色土（2.5Y 5／6）
- Ⅸ層 黄褐色土（2.5Y 5／4）同色の固い粘土ブロックを含む。
- X層 にぶい黄色粘質土（2.5Y 6／4）しまっている。
- XI層 にぶい黄色粘質土（2.5Y 6／3）しまっている。
- XII層 黄褐色粘質土（2.5Y 5／3）しまっている。
- XIII層 明黄褐色粘質土（2.5Y 6／6）固くしまっている。



第3図 土層図（1／40）

第3節 各時代の遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構としては、第IV層上面で集石遺構5基と散礫を検出した。集石遺構は全て実測できたが、散礫に関しては、諸般の事情により範囲のみの確認にとどまった。

遺物としては、第II層より一括採集した早、後、晩期の各土器、打製石鏃、打製石斧等の石器と、第IV層（包含層）より出土した早期の押型文土器等がある。包含層出土の遺物を除いたその他の遺物は、遺構に伴うものはほとんどなく、時期を決定する要素に乏しいが、これらの遺物が圧倒的に多いため、土器は、およそ考えられる時期ごとにまとめてふれ、石器は器種ごとにまとめてふれている。また、土器、石器の出自に関しては、それぞれ土器観察表、石器計測表を参照されたい。

遺 構

1号集石遺構

I区で検出され、検出された集石遺構のなかでは最も高所に位置する。長軸0.7m、短軸0.6mを計る。礫は角礫がほとんどで、熱を受けたのか赤く変色している。掘り込みを有するが、埋土に炭化物はみられなかった。

2号集石遺構

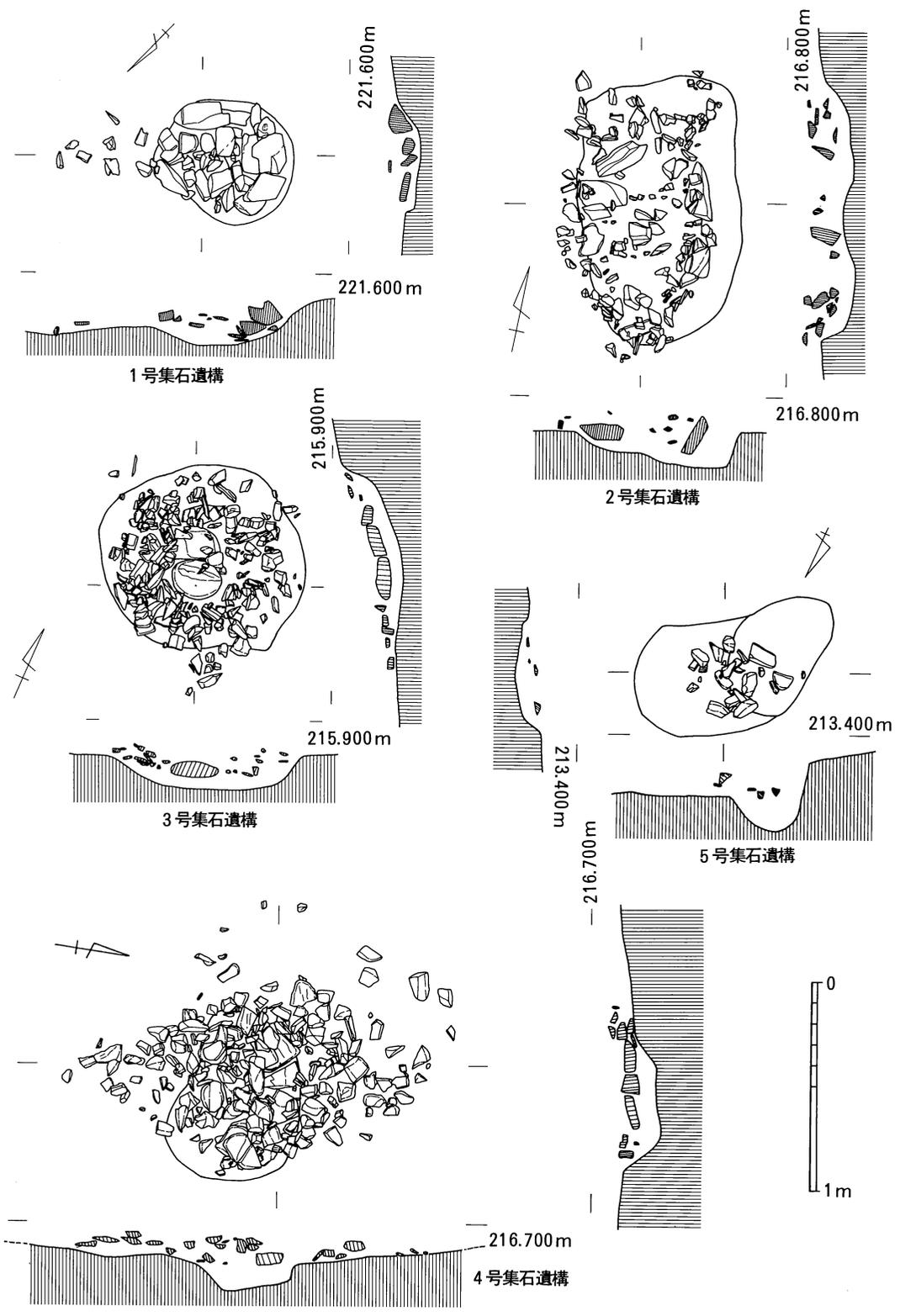
VIII区に検出された。長軸1.2m、短軸0.8mの規模をもち、礫は角礫で変色していなかった。下部に約20～30cmほどの偏平な礫を斜め、あるいは横に配する。掘り込みは不整楕円形を呈しているが窪みが2カ所あり、2つの集石遺構が切り合っていた可能性がある。また、埋土には炭化物は含まれていなかった。

3号集石遺構

VIII区東側斜面に検出された。長軸0.95m、短軸0.8mを計る。礫はほとんど角礫で下部に径20cmほどの円礫を配する。埋土には炭化物は含まれておらず、礫の変色もみられなかった。不整円形の掘り込みを有する。

4号集石遺構

VIII区に検出された。長軸1.7m、短軸0.9mの規模をもつ。礫は角礫で変色していなかったが、埋土に炭化物を含む。不整楕円形の掘り込みを有し、下部に約20～30cmほどの礫を配する。



第4図 集石遺構実測図 (1 / 30)

5号集石遺構

IX区の散磔下で検出された。攪乱を受けており全容を知り得ないが、礫は角礫ばかりで掘り込みを有する。

遺物

縄文時代早期（第5、6、7図）

押型文土器（第5～6図）

本遺跡から出土した押型文土器は、楕円、山形が主体をしめ、格子目文が3点のみ出土している。全体的器形を知り得る資料はないが、底部が平底のみの出土であることから、概ね15に代表されるように口縁部がわずかに外傾し、胴部に若干の膨らみを持ちながら平底の底部へ移行するものとかがえられる。

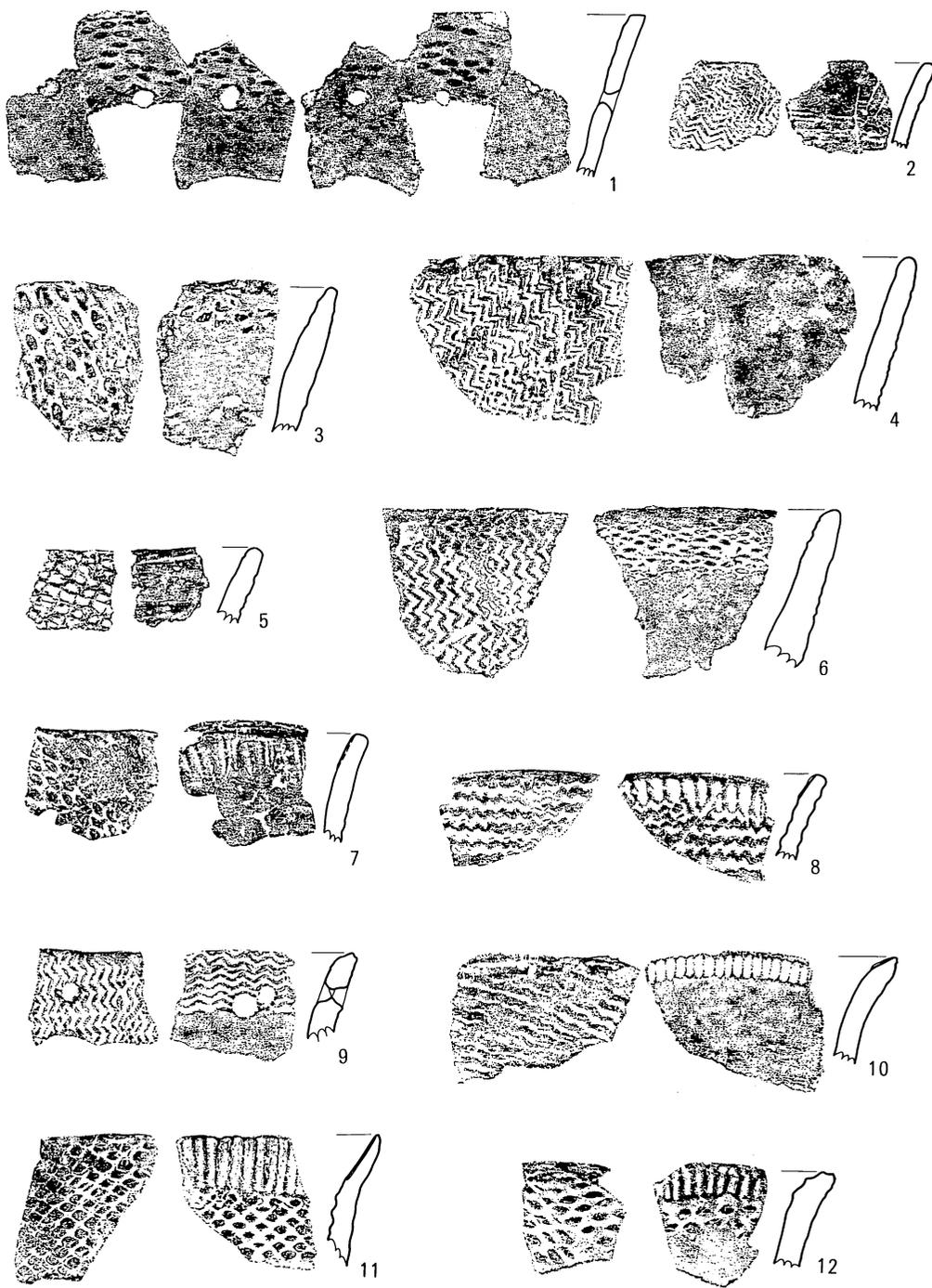
施文に関しては、いずれも一定の方向性を欠き、文様の粗大化などの特徴があげられる。また、内面と外面の施文の種類によって下記のように分けられる。

- a 内、外面が同一のもの（1、3、9）
- b 内、外面が異なるもの（6）
- c 内面に原体条痕をもつもの（7、8、10～13）
- d 外面のみに施文がみられるもの（2、4、5、14～21）

aでは、1は内、外面の口縁部下に帯条に施文するもので、3、9は、内面のみ帯状に施文するものである、bは6のみだが、外面に山形、内面に楕円の押型が帯状に施文されている。cでは、7、10が内面に原体条痕のみをもち、8、11、12が内面の原体条痕下に外面と同様の押型を帯状に施文するもの、13は内面に原体条痕のみだが、原体条痕が他のものとは異なり、粗雑で規格性がみられない。dの中では15が楕円というよりも円に近い粗大な施文で、5、16、17が、格子目、18～21は底部で、いずれも平底を呈し、外面に山形文をもつ。

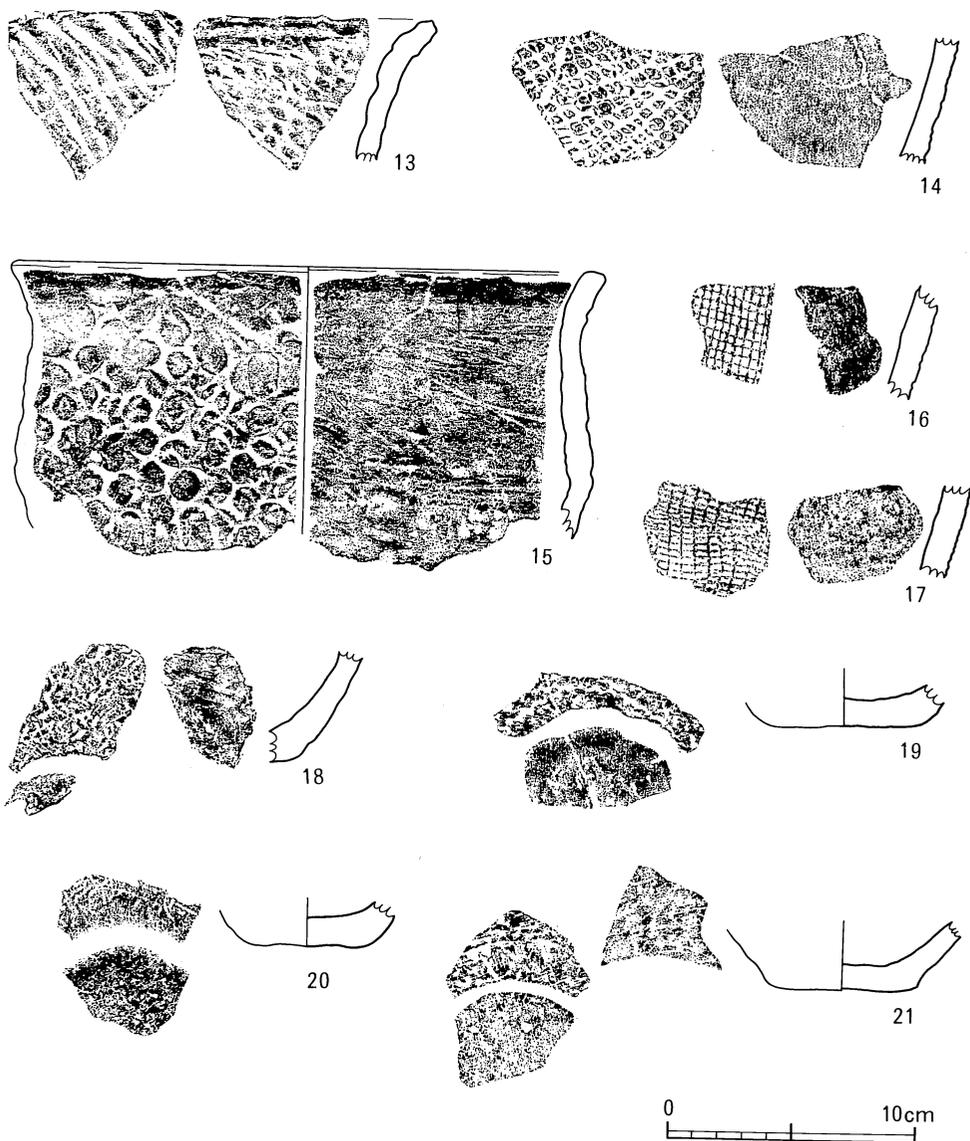
撚糸文土器（第7図 22、25、26）

3点のみの出土で、小片のため器形等は知り得ないが、22は口縁部から直線的に底部に接続するものと考えられる。また、22の外器面の施文は4条ほどの撚糸文を1単位とし、それを直交させ格子目の文様を形成している。



0 10cm

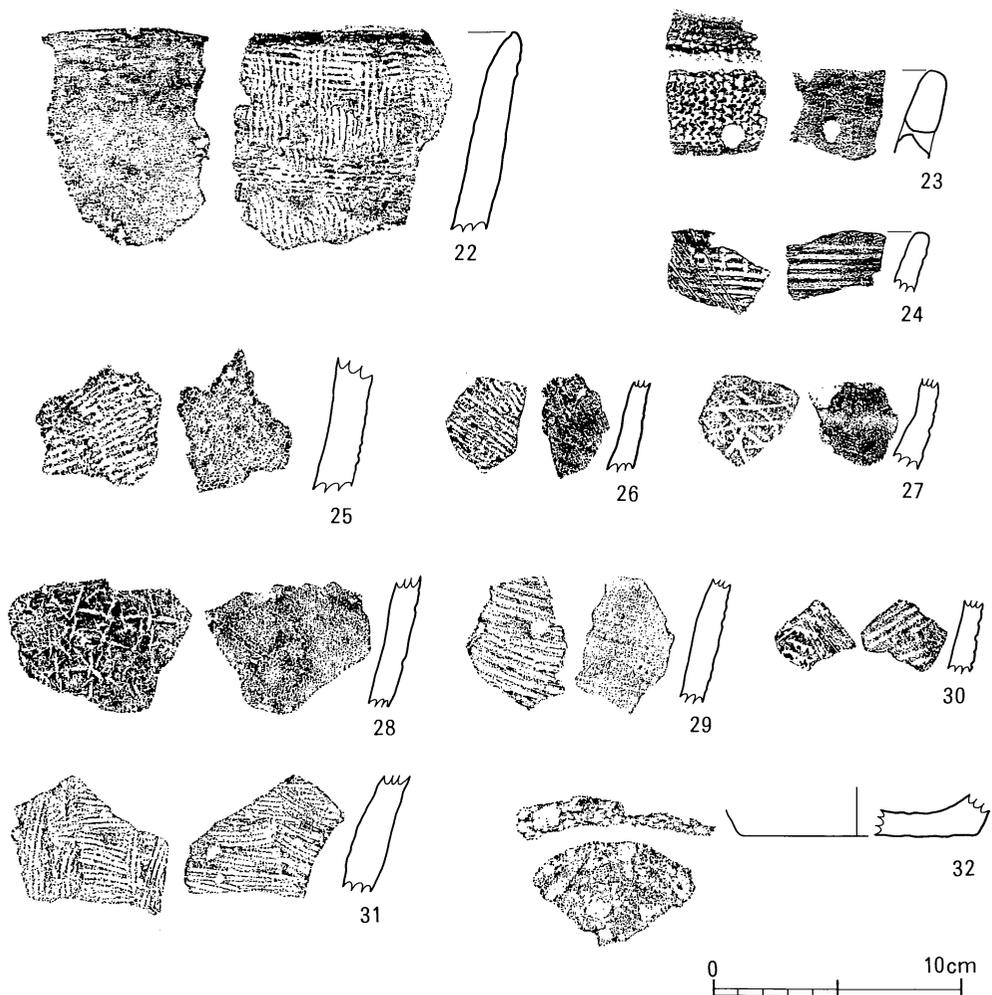
第5图 出土土器实测图 (1/3)



第6図 出土土器実測図 (1 / 3)

条痕文土器 (第7図24、29、30、31)

4点のみの出土である。24、30は内、外器面とも貝殻条痕を地文として、外器面には貝殻腹縁刺突が施され、さらに、細く鋭い沈線が刻まれる。24は口縁部で、この沈線が口唇部にまで及んでいる。31は他の3点の条痕とは異なり、方向の不規則な条痕が内、外器面に、施されている。



第7図 出土土器実測図（1／3）

その他の土器（第7図23、27、28、32）

23は外器面の口唇部端より帯状に縦の貝殻腹縁刺突が施されたもので、補修孔がみられる。27、28は網目撚糸文の可能性が考えられる。32は平底の底部だが、表面の剥落がひどく、調整等は不明である。

縄文時代後、晩期（第8、9、10図）

第8図に揚げた土器は、本遺跡出土の縄文時代後、晩期のものの中では古い時代のものと考えられ、ほとんどの土器は地文に貝殻疑似縄文を有する。ただし、38、39に関しては表面の摩滅が激しく、第9図に揚げた西平系の土器に含まれる可能性がある。

33は口縁部から胴部にかけて斜めに沈線を施すもので、鉢かキャリパー様の器形をもつものと思われる。34、36は沈線と貝殻疑似縄文、刺突文の組み合わせによる文様をもつ口縁部で、34が平、36が波状口縁を呈する。35は内器面に沈線と貝殻疑似縄文による施文をもち、内、外器面とも丁寧なヘラミガキがみられる。また、口縁端部を折り曲げて成形した突起を有し器形としては皿または高杯形土器の口縁部と思われる。37も高杯形土器の杯部と脚部の接続部分と思われ、内、外器面に丁寧なヘラミガキがみられる。38、39は、外器面に沈線と貝殻疑似縄文、刺突文の組み合わせによる文様をもつ胴部片だが39の沈線は細く深い。40は貝殻疑似縄文をもたない。41も沈線と貝殻疑似縄文、刺突文の組み合わせにより文様を構成し、一部渦巻文に似た文様をもつ。また、内、外器面には丁寧なヘラミガキ、屈曲する部分より上部に透かしがみられ、器形的には高杯形土器の胴部と考えられる。42、43は底部でいずれも平底を呈するが、42は底面までヘラミガキがみられる。

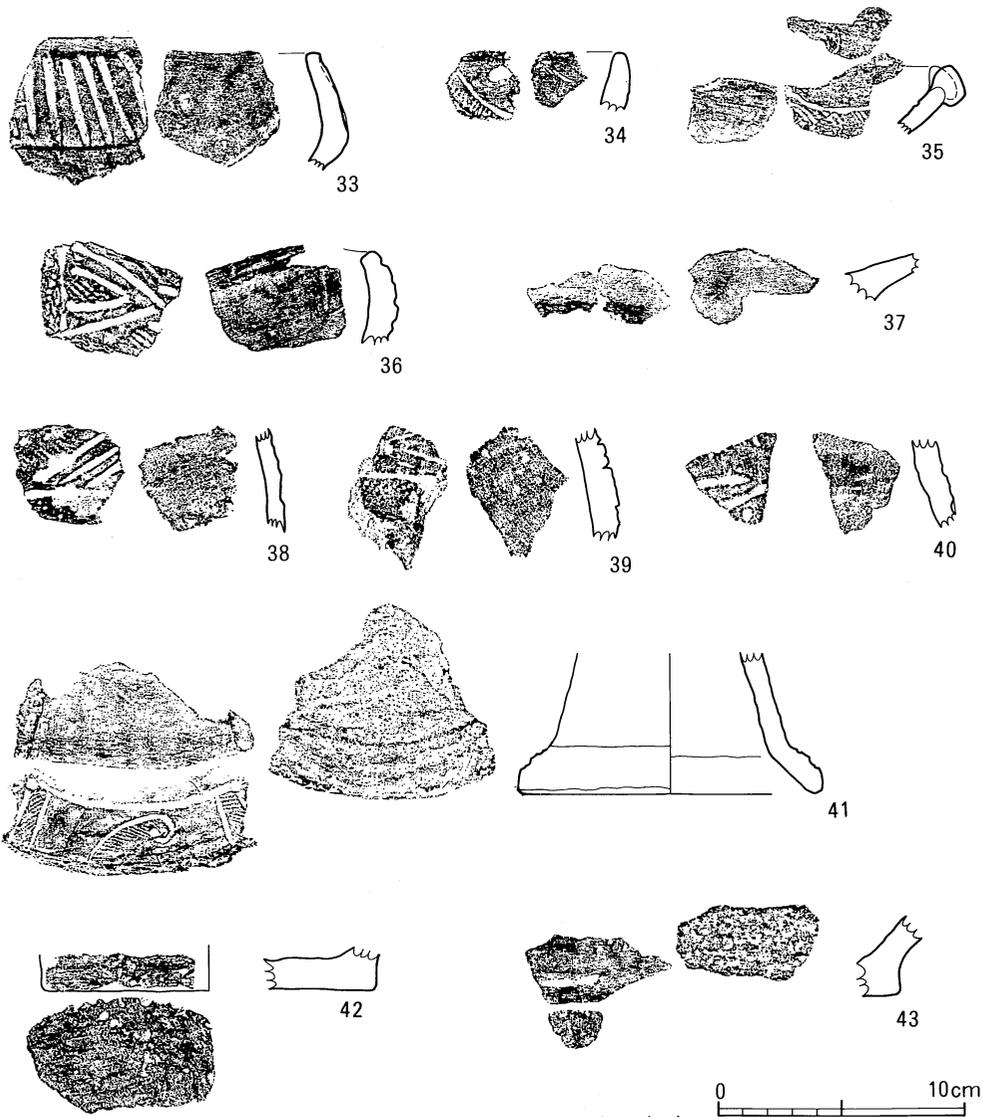
第9図にあげたものはいわゆる西平式系の土器群で、口縁部と胴部に磨消縄文を地文とした文様帯をもつ深鉢型土器の一部と考えられる。

44、46は波状口縁で3本沈線を有し、波頂部に鉤手と弧線の組み合わせ文や刺突文といった文様集約がみられる。50、51も3本沈線を有する平口縁で前者とは時期的格差が感じられる。45、48、49は2本沈線のもので、波頂部以外にも刺突文がみられる。また、45、48、52は頸部に明瞭な稜をもち、胴部文様帯に刺突列点文を有する。55、56も刺突列点文がみられるが、55は角張った押し引き状のもので、56は爪形状のものである。

第10図はおおむね西平系以後の所産と思われる土器である。

57は内、外器面ともヘラミガキ調整の深鉢で、口縁部付近が肥厚し2条の浅い沈線がみられる。58は3条の沈線がみられ、59は口縁部付近が肥厚し突帯を形成する口縁部で両者ともヘラミガキ調整がみられる。60～63の胴部片はすべて内、外器面ともヘラミガキ調整で、60、62が浅鉢、61が深鉢とみられる。63は器形など知り得ないが、その外器面に斜位の撚糸文を有する。

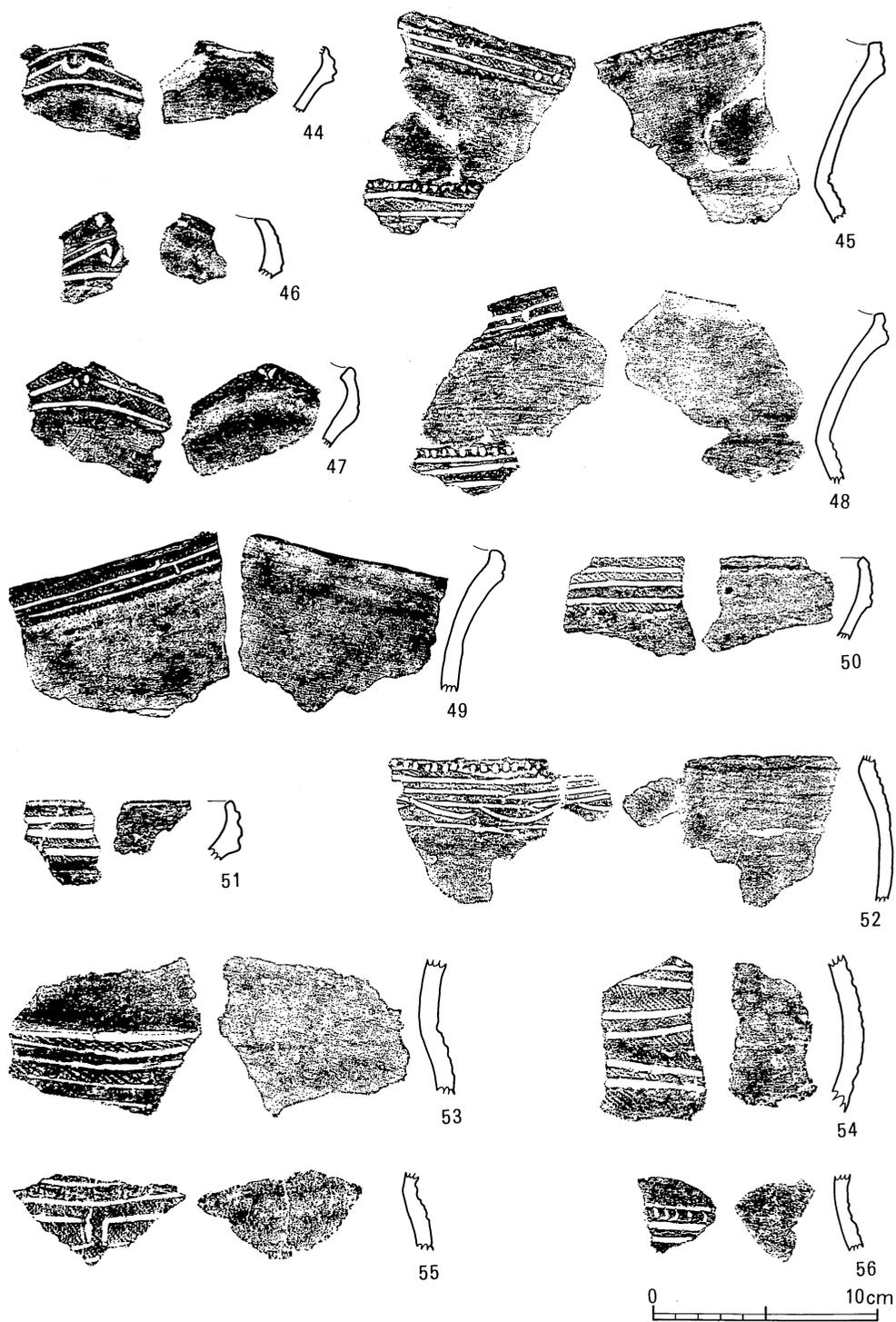
64～70はいわゆる突帯文土器である。64、65は口縁部が大きく外反しており他のものと



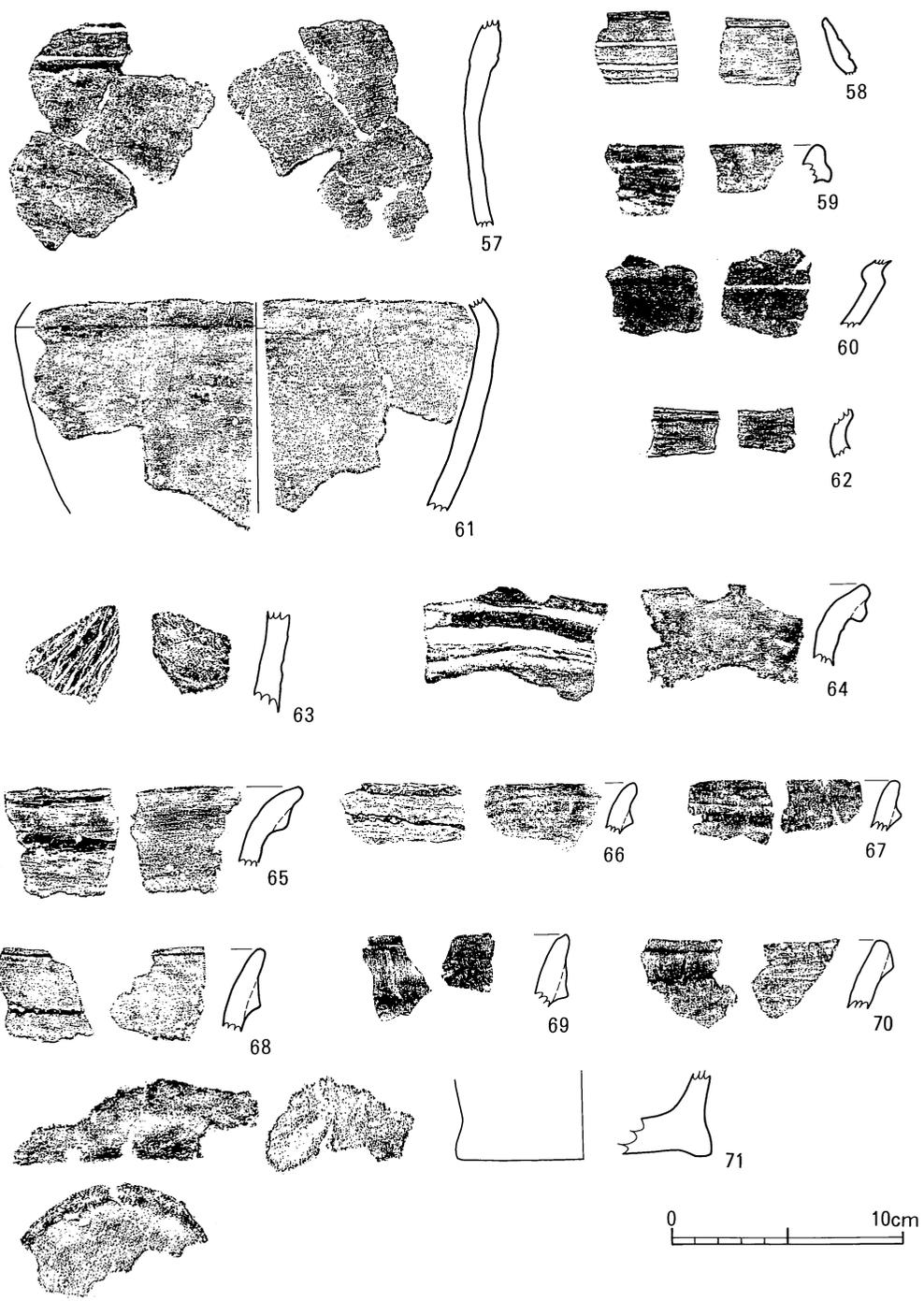
第8図 出土土器実測図 (1/3)

やや違った様相を呈する。また70は突帯が他のものとは違い口縁端部にある。

71は底部でげ底を呈する。



第9图 出土土器实测图(1/3)



第10图 出土土器实测图 (1 / 3)

図面 番号	出土 層位	文様および調整		焼成	色 調		胎 土	備 考
		外 面	内 面		外面	内面		
1	IV	横方向の楕円押形文 ナデ	横方向の楕円押形文 ナデ	良好	明赤褐色 明黄褐色	明赤褐色 明黄褐色	1~3mmの褐色、灰 色の砂粒や6mmほど の小礫を含む。	補修孔あり
2	—	方向性を欠く山形押 形文	ナデ 条痕状の工具痕?	良好	橙色	明黄褐色	0.1~2mmの淡黄、褐、 灰白色砂粒と4mmほどの 乳白色小礫を含む。	
3	IV	斜方向の楕円押形文	横方向の楕円押形文 ナデ	良好	橙色	明赤褐色	0.5~3mmほどの褐、 淡黄色砂粒、雲母を 含む。	
4	IV	斜方向の山形押形文	ナデ	良好	橙色 暗赤褐色	にぶい 橙色	0.1~3mmほどの淡黄、 灰色砂粒と7mmほどの 褐色小礫を含む。	
5	—	格子目押形文	ナデ	良好	にぶい 褐色	にぶい 褐色	0.5~3mmの淡黄、茶 色の砂粒を含む。	
6	IV	縦方向の山形押形文	横方向の楕円押形文 ナデ	良好	橙色	明褐色	1mmほどの白、黒、黄色 の砂粒と、4mmほどの黄 、灰色小礫を含む。	
7	—	斜方向の楕円押形文	原体条痕 ナデ	良好	明赤褐色	橙色	0.1~2mmほどの淡黄、 灰白、褐色砂粒を含む。	
8	IV	横方向の山形押形文	原体条痕 横方向の山形押形文	良好	明黄褐色 灰黄褐色	明黄褐色	0.5~2mmほどの淡黄、 黒色砂粒を含む。	
9	—	縦方向の山形押形文	横方向の山形押形文 ナデ	良好	橙良 好色	橙色	5mm以下の褐色砂粒 と、2mm以下の雲母 を含む。	
10	—	斜方向の山形押形文	原体条痕 ナデ	良好	淡黄色 明黄褐色	淡黄色 明黄褐色	0.5~2mmほどの淡黄、 灰白、黒色砂粒と雲母を 含む。	非常にくずれた山形
11	IV	横方向の楕円押形文	原体条痕 横方向の楕円押形文	良好	明黄褐色 にぶい黄 褐色	明黄褐色 にぶい 橙色	0.1~2mmほどの淡黄、 灰白、黒、褐色砂粒を 含む。	
12	—	方向性を欠く楕円押 形文	原体条痕 横方向の楕円押形文 ナデ	良好	淡黄色	黄灰色	3mm以下の褐色砂粒 と、1mm以下の雲母 を含む。	
13	IV	斜方向の楕円押形文	粗い斜方向の原体条 痕	良好	明黄褐色 にぶい黄 褐色	明黄褐色	4mm以下の褐、白色 の砂粒を含む。	
14	IV	楕円押形文	ナデ	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	4mm以下の褐、乳白 色の砂粒と、1mm以 下の雲母を含む。	
15	IV	楕円押形文?	ナデ	良好	橙色	明赤褐色 黄褐色	1mm以下の灰白色砂粒、 6mmほどの灰白色小礫、 2mm以下の雲母を含む。	楕円の1単位が大き く、円に近い
16	IV	格子目押形文	ナデ	良好	にぶい 褐色	にぶい 黄褐色	3mm以下の褐、灰白 色砂粒、1mm以下の 雲母を含む。	
17	IV	格子目押形文	ナデ	良好	淡黄色	黄灰色	1mm以下の白、褐色砂 粒と、雲母を含む。	
18	—	山形押形文	ナデ	良好	明赤褐色 明黄褐色	にぶい 赤褐色	0.5~5mmほどの淡黄 色砂粒を含む。	
19	IV	山形押形文	ナデ	良好	橙色	にぶい 黄褐色	3mm以下の半透明、 褐色の砂粒を含む。	
20	IV	山形押形文	ナデ	良好	橙色	にぶい 黄褐色	4mm以下の褐色砂粒、2 mm以下の灰、暗褐色砂粒 を含む。	
21	IV	山形押形文	ナデ	良好	黄褐色 灰黄褐色	黄褐色	3mm以下の灰白色砂 粒、2以下の雲母を 含む。	
22	—	撚糸文(格子状)	ナデ	旅行	明赤褐 灰赤色	赤褐色	0.5~3mmほどの淡黄、 灰白色の砂粒と雲母を 含む。	
23	—	貝殻腹縁刺突文	ナデ	良好	浅黄褐色 黒褐色	黒褐色	0.5~2mmほどの褐、 灰、黄色の砂粒と雲 母を含む。	穿孔あり
24	—	貝殻条痕文 貝殻腹縁刺突文 沈線文	貝殻条痕文	良好	にぶい 褐色	にぶい 黄褐色	1mm以下の褐色、淡 黄色の砂粒を含む。	
25	IV	撚糸文	ナデ	良好	にぶい 褐色	褐色 黒褐色	2~5mmほどの褐、黒、 白色の砂粒と1mm以下の 雲母を含む。	

第1表 土器観察表

図面 番号	出土 層位	文様および調整		焼成	色 調		胎 土	備 考
		外 面	内 面		外面	内面		
26	—	燃糸文	ナデ	良好	黄橙色	明黄褐色	2~4mmほどの褐色、乳白色の砂粒と1.5mm以下の雲母を含む。	
27	IV	燃糸文か	ナデ	良好	明赤褐色	橙色	5mm以下の褐色、2.5mm以下の黒褐色砂粒と1.5mm以下の雲母を含む。	
28	IV	燃糸文か	ナデ	良好	にぶい 橙色	にぶき 赤褐色	4mm以下の褐色、1.5mm以下の乳白色砂粒と2mm以下の雲母を含む。	
29	—	貝殻条痕文	貝殻条痕文 ナデ	良好	橙色	にぶい 褐色	2mm以下の褐色、2.5mm以下の黒い砂粒を含む。	
30	—	貝殻条痕文 貝殻腹縁刺突文 沈線文	貝殻条痕文	良好	にぶい 黄橙色	にぶい 黄褐色	3.5mm以下のにぶい橙色、2mm以下の褐色砂粒を含む。	
31	—	条痕文	条痕文	良好	明赤褐色	にぶい 赤褐色	5mm以下の乳白色、3.5mm以下の褐色砂粒を含む。	
32	—	ナデ	ナデ	良好	橙色	にぶい 橙色	5.5mm以下の乳白色、5mm以下の褐色、2mm以下の黒い砂粒と雲母を含む。	剥離がはげしい
33	IV	沈線文	ナデ	良好	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	橙色	0.5~2mmほどの淡黄色、黒色、灰白色の砂粒を含む。	
34	—	貝殻疑似縄文 沈線文、刺突文 ナデ	ナデ	良好	にぶい 黄褐色	褐灰色	1~1.5mmほどの黒色、淡黄色、灰色の砂粒を含む。	
35	—	横方向のミガキ	貝殻疑似縄文 沈線文 ナデ	良好	にぶい 褐色	褐色 橙色	1~2mmほどの褐色、灰色、黄色の砂粒と雲母、透明で光る砂粒を含む。	突起をもつ
36	—	貝殻疑似縄文 沈線文	ナデ	良好	にぶい 黄褐色	黄灰色	1mm以下の淡黄色、透明で光る砂粒を含む。	
37	—	ミガキ	ミガキ	良好	灰黄褐色	黄灰色	0.5~2mmほどの淡黄色、乳白色の砂粒と透明で光る砂粒を含む。	
38	—	貝殻疑似縄文 沈線文	ナデ	良好	にぶい 黄褐色 黒	黄褐色	6.5mm以下の褐色、3.5mm以下の乳白色の砂粒を含む。	
39	—	貝殻疑似縄文 沈線文	ナデ	良好	淡黄色	浅黄色	5mm以下の乳白色、2.5mm以下の褐色の砂粒と3mm以下の雲母を含む。	
40	—	沈線文 刺突文 ナデ	ナデ	良好	にぶい 橙色	にぶい 橙色	6.5mm以下の褐色、5mm以下の浅黄色の砂粒と雲母を含む。	
41	—	貝殻疑似縄文 沈線文 ミガキ	ナデ	良好	灰黄褐色 浅黄色	灰黄褐色 浅黄色	0.5~2mmの淡黄色砂粒と1mmほどの透明で光る砂粒を含む。	透かしをもつ
42	—	ミガキ	ナデ	良好	にぶい黄褐色 灰黄色	にぶい 黄褐色	0.5~2mmの浅黄色、灰、白、黒色の砂粒と雲母を含む。	
43	—	ミガキ	ナデ	良好	黄褐色	淡黄色	5.5mm以下の乳白色、5mm以下の褐色、2mm以下の黒色砂粒と雲母を含む。	
44	SA-1	磨消縄文 沈線文、刺突文 ナデ	ナデ	良好	にぶい 橙色	灰黄褐色	0.5~2mmの淡黄色、乳白色、灰色の砂粒を含む。	
45	SA-1	磨消縄文 沈線文、刺突文 ナデ	ナデ	良好	にぶい 橙色	にぶい 橙色	0.5~1mmの淡黄色、乳白色の砂粒を含む。	
46	—	磨消縄文 沈線文、刺突文 ナデ	ナデ	良好	暗赤灰色 灰赤色	暗赤灰色	0.5~2mmの淡黄色灰白色褐色砂粒と雲母を含む。	
47	—	磨消縄文 沈線文、刺突文 ナデ	ナデ	良好	にぶい 黄褐色	にぶい 橙色	2mm以下の黒色、褐色の砂粒と1.5mm以下の雲母を含む。	
48	—	磨消縄文 沈線文、刺突文 ナデ	ナデ	良好	にぶい 橙色	にぶい 橙色	0.5~2mmの淡黄色、黒色の砂粒を含む。	
49	—	磨消縄文 沈線文、刺突文 ナデ	ナデ	良好	灰黄褐色	明黄褐色 黒褐色	1mmほどの乳白色、灰色、透明、雲母を含む。	
50	—	磨消縄文 沈背文 ナデ	ナデ	良好	黒橙色	にぶい 橙色	4mm以下の褐色の砂粒と2.5mm以下の雲母を含む。	

第2表 土器観察表

図面 番号	出土 層位	文様および調整		焼成	色 調		胎 土	備 考
		外 面	内 面		外面	内面		
51	1号 住居	磨消縄文 沈線文	ナデ	良好	明赤褐色	にぶい 赤褐色	1~2mmの茶色、淡 黄色の砂粒と透明で 光る砂粒を含む。	
52	—	磨消縄文 沈線文、刺突文 ナデ	ナデ	良好	明黄褐色	にぶい 黄褐色	2.5mm以下の暗褐色に光 る砂粒と1.5mm以下の乳 白色の砂粒を含む。	
53	—	磨消縄文 沈線文 ナデ	ナデ	良好	灰黒褐色	にぶい 黄褐色	5mm以下の褐色、2 mm以下の黒い砂粒と 雲母を含む。	
54	—	磨消縄文 沈線文 ナデ	ナデ	良好	黒褐色 橙色	灰褐色 橙色	7mm以下の褐色、5mm以下の灰 色、にぶい褐色、2mm以下の黒 、赤褐色砂粒と雲母を含む。	
55	—	磨消縄文 沈線文、刺突文 ナデ	ナデ	良好	暗褐色	橙色	4.5mm以下の褐色砂粒 と雲母を含む。	
56	—	磨消縄文 沈線文、刺突文 ナデ	ナデ	良好	暗褐色	にぶい 褐色	2.5mm以下の褐色、灰 色の砂粒を含む。	
57	—	ミガキ 沈線文	ナデ	良好	にぶい 橙色	にぶい 橙色	3.5mm以下の褐色、3 mm以下の乳白色砂粒 を含む。	
58	—	ミガキ 沈線文	ミガキ	良好	黄褐色	灰黄色	黒色の細砂粒を多く 含む。	
59	—	ナデ	ナデ	良好	橙色	にぶい 橙色	0.1~1mmほどの淡黄 色、灰白色砂粒を含 む。	
60	—	ミガキ	ナデ	良好	灰赤色	暗赤灰色	1mm以下の褐色砂粒 と雲母を含む。	
61	—	ナデ	ナデ	良好	にぶい 橙色	にぶい 黄褐色	1mm以下の褐色、透 明で光る砂粒と2mm 以下の雲母を含む。	
62	—	ミガキ	ナデ	良好	淡黄色	淡黄色	0.1~1mmほどの淡黄 色、黒色砂粒を多く 含む。	
63	—	斜め方向の燃索文 ミガキ	斜め方向のナデ	良好	明赤褐色	明赤褐色	2mm以下の褐色砂粒 と雲母を含む。	
64	IV	ナデ	ナデ	良好	明赤褐色	にぶい 褐色	0.1~3mmほどの淡黄 色、黒色砂粒と雲母 を含む。	貼付突帯をもつ
65	—	ナデ	ナデ	良好	明赤褐色 にぶい 赤褐色	明赤褐色	1~3mmの褐色砂粒 と雲母を含む。	貼付突帯をもつ
66	—	ナデ	ナデ	良好	明赤褐色	にぶい 赤褐色	1~2mmの灰色砂粒 と雲母を含む。	貼付突帯をもつ
67	—	ナデ	ナデ	良好	橙色	橙色	黒色の細砂粒を含む。	貼付突帯をもつ
68	SA-1	ナデ	ナデ	良好	にぶい 黄褐色	にぶい黄褐色 明赤褐色 褐色	0.5~1mmほどの淡黄 色、砂粒と雲母を含 む。	貼付突帯をもつ
69	—	ナデ	ナデ	良好	明褐色	明褐色	1~2mmの黒色、乳 白色、褐色砂粒と雲 母を含む。	貼付突帯をもつ
70	—	ナデ	ナデ	良好	明黄褐色 にぶい 黄褐色	明黄褐色	1~3mmの褐色、黒 色、黄色の砂粒を含 む。	貼付突帯をもつ
71	—	横方向のナデ	横方向のナデ	良好	明褐色	にぶい 黄褐色	0.5~2mmほどの褐色。 黒色、淡黄色砂粒と雲 母を含む。	やや上げ底

第3表 土器観察表

※出土層位「—」はⅡ層及び客土、不明

石器

石鏃

本遺跡出土の石鏃は50点でほとんどがチャート製だが、黒曜石製が3点みられる。ここでは、外形的な特徴からいくつかのグループにわけて考えてみた。ただし、この分類は時間的前後関係を表したものではないことをあらかじめことわっておく。

- 1類 基部を挟らないもの（1～3）
- 2類 他のものに比べ大きく、厚いもの（4～7）
- 3類 平面形が正三角形に近く、脚部端が尖っているもの（8～12）
- 4類 平面形が正三角形に近く、脚部端が尖っていないもの（13～18）
- 5類 平面形が二等辺三角形に近く、小型で脚部端が尖っているもの（19～24）
- 6類 平面形が二等辺三角形に近く、脚部端が尖っているもの（25～33）
- 7類 平面形が二等辺三角形に近く、脚部端が尖っていないもの（34～43）
- 8類 その他（44～47）
- 9類 未製品（48～50）

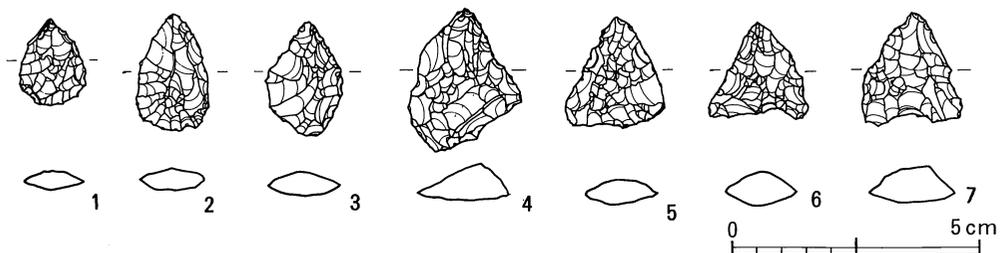
この分類では、平面形態と脚部端の処理を中心にわけ、挟りの浅いものから深いものの順にあげてみた。44、47は6類に比べ最大長と最大幅が大きく、45、46は脚部が鏃先端部から延長線よりもやや開くため、8類とした。また、9類はそのまま使用された可能性もある。

石斧（第13図51～57、62）

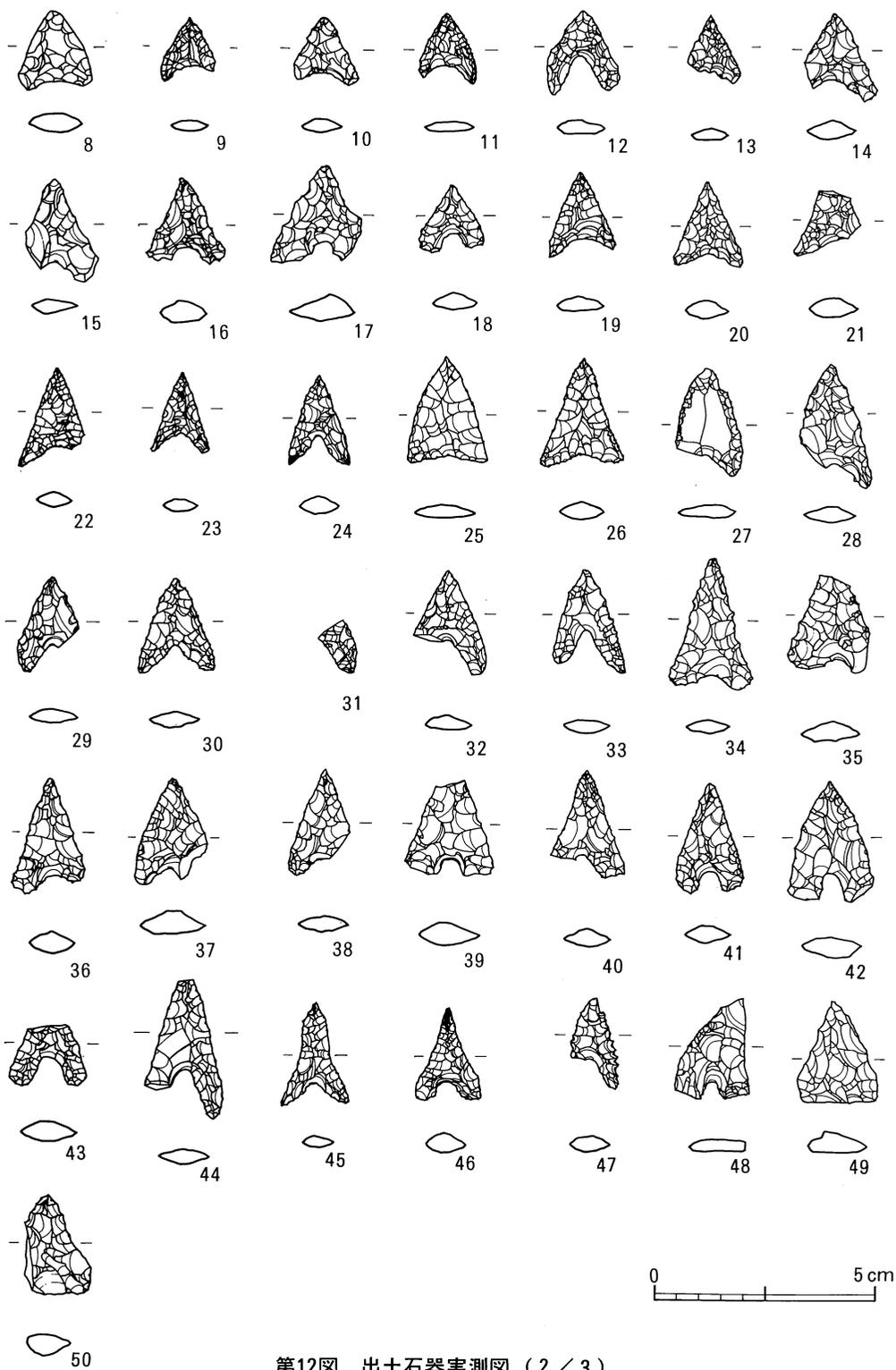
51、55は基部をやや挟るかたちであらく調整したもの、62は小型のもの、57は擦痕をもち、砥石の可能性もある。それ以外は石材の外周をあらく調整しただけのものである。

磨石（第13図58～60）

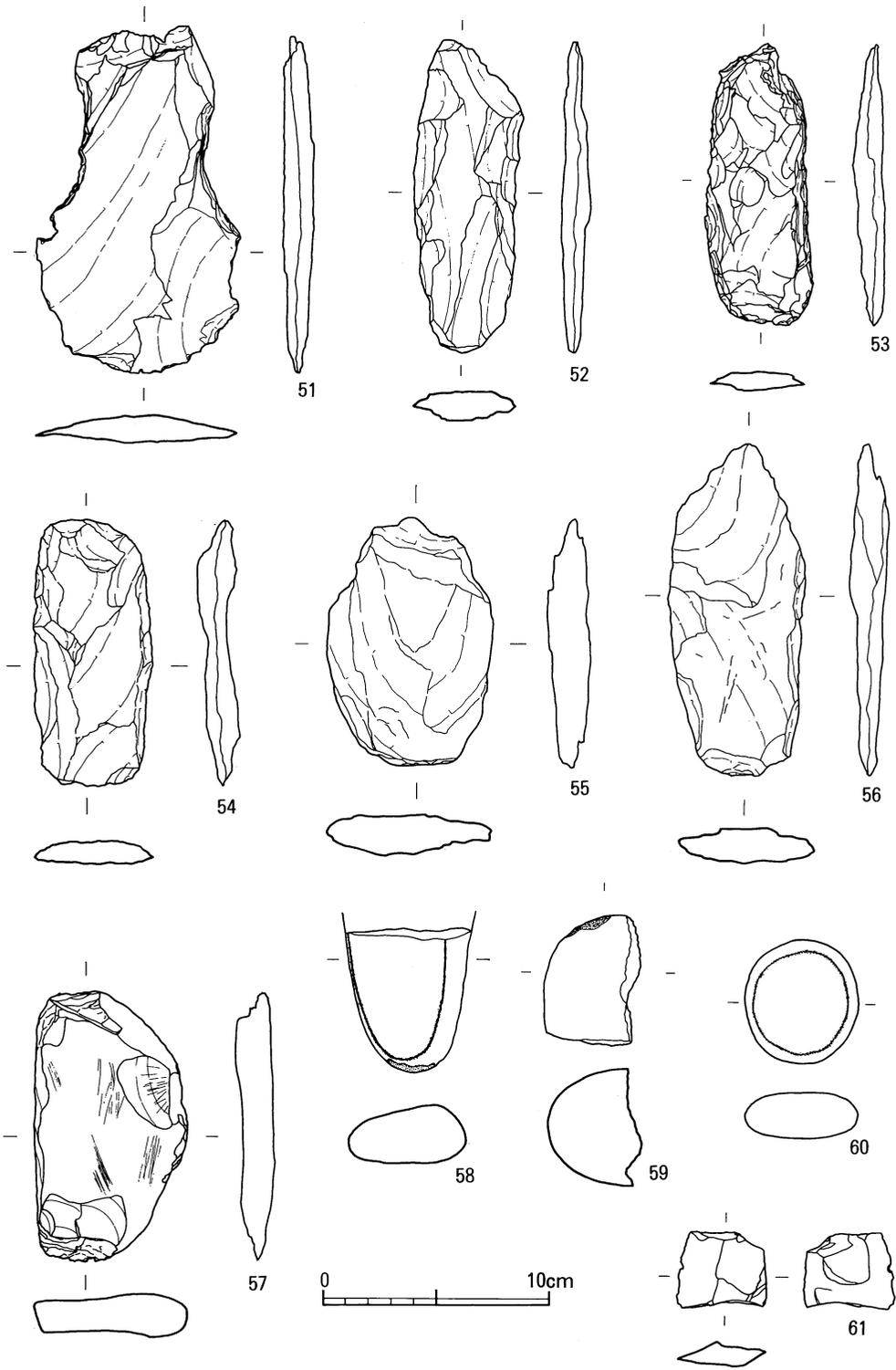
58～60は磨石と思われるが、58、60は敲打痕がみられる。



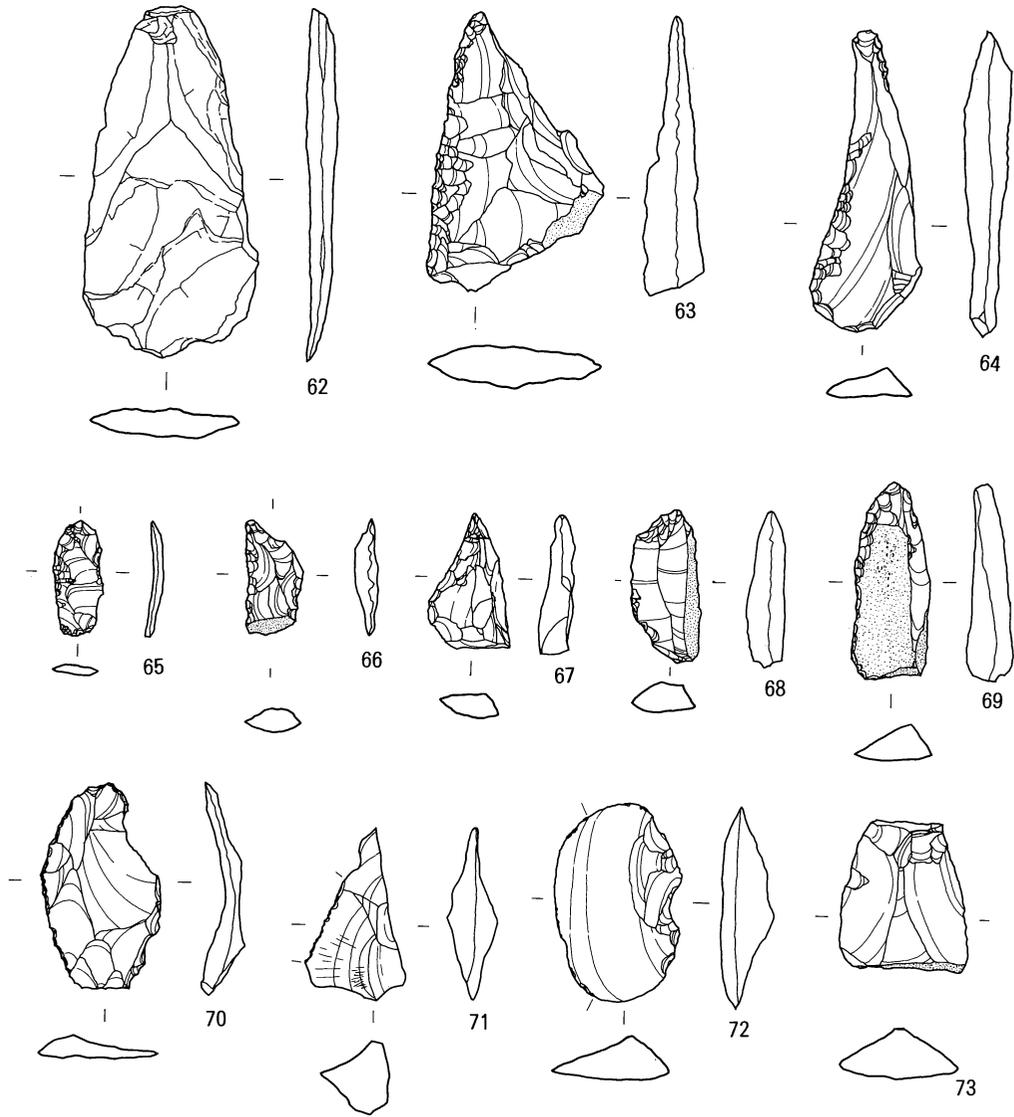
第11図 出土石器実測図（2／3）



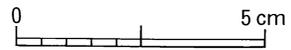
第12图 出土石器实测图 (2 / 3)



第13图 出土石器实测图 (1/3)



第14図 出土石器実測図 (2 / 3)



スクレイパー (第14図63~70)

65、68、69は黒曜石、それ以外はチャート製である。

使用痕を有する剥片 (第14図71、72)

71は姫島産の黒曜石製と思われる。

剥片 (第13図61、第14図73)

図面 番号	出土 層位	器 種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材	備 考
1	I区客土	石鏃?	1.7	1.3	0.43	1.0	チャート	
2	I区客土	石鏃?	2.4	1.4	0.53	1.0	チャート	
3	I区-IV	石鏃?	2.3	1.5	0.57	2.0	チャート	
4	VIII区-IV	石鏃?	2.9	2.3	0.77	4.4	チャート	
5	I区-IV	石鏃?	2.3	2.0	0.56	2.1	チャート	
6	IX区客土	石鏃?	1.9	2.0	0.76	1.3	チャート	
7	VIII区-IV	石鏃?	2.3	2.0	0.77	3.1	チャート	
8	II区客土	石鏃	1.8	1.6	0.49	0.9	黒曜石	姫島産
9	IX区客土	石鏃	1.5	1.2	0.26	0.3	チャート	脚片方欠損
10	I区-IV	石鏃	1.5	1.5	0.28	0.5	チャート	脚片方欠損
11	I区客土	石鏃	1.6	1.4	0.25	0.4	チャート	
12	IV区客土	石鏃	1.9	1.6	0.31	0.9	チャート	
13	VIII区-IV	石鏃	1.5	1.3	0.27	0.3	チャート	脚片方欠損
14	VIII区客土	石鏃	2.0	1.7	0.53	0.9	チャート	脚片方欠損
15	不明客土	石鏃	2.3	1.7	0.39	1.1	チャート	脚片方欠損
16	VIII区-IV	石鏃	2.0	1.8	0.46	1.0	黒曜石	
17	1号住居	石鏃	2.2	2.1	0.49	1.4	チャート	脚片方欠損
18	IX区-IV	石鏃	1.5	1.5	0.40	0.6	チャート	
19	II区客土	石鏃	1.9	1.5	0.28	0.5	黒曜石	
20	II区客土	石鏃	1.9	1.6	0.43	0.7	チャート	
21	II区客土	石鏃	1.5	1.5	0.33	0.6	チャート	先端脚片方欠損
22	IV区客土	石鏃	2.2	1.5	0.42	0.8	チャート	脚片方欠損
23	I区客土	石鏃	1.8	1.4	0.29	0.4	チャート	
24	VIII区-IV	石鏃	2.1	1.4	0.39	0.6	チャート	
25	II区客土	石鏃	2.4	1.8	0.32	1.1	チャート	
26	I区-IV	石鏃	2.5	1.9	0.39	1.2	チャート	
27	III区客土	石鏃	2.5	1.5	0.31	1.0	チャート	脚片方欠損
28	IV区客土	石鏃	2.8	1.7	0.47	1.3	チャート	脚片方欠損
29	I区客土	石鏃	2.2	1.4	0.37	0.8	チャート	脚片方欠損

第4表 石器計測表

図面 番号	出土 層位	器 種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材	備 考
30	Ⅷ区-Ⅳ	石鏃	2.3	1.8	0.36	0.6	チャート	
31	2号住居	石鏃			0.29	0.3	チャート	
32	Ⅳ区客土	石鏃	2.4	1.6	0.39	0.9	チャート	脚片方欠損
33	Ⅸ区客土	石鏃	2.4	1.7	0.34	1.0	チャート	
34	3号住居	石鏃	3.0	1.9	0.34	1.3	チャート	
35	Ⅳ区客土	石鏃	2.2	1.9	0.58	1.8	チャート	
36	Ⅷ区-Ⅳ	石鏃	2.6	1.7	0.46	1.5	チャート	
37	Ⅰ区客土	石鏃	2.4	1.6	0.57	1.6	チャート	脚片方欠損
38	Ⅱ区客土	石鏃	2.4	1.4	0.32	0.6	チャート	脚片方欠損
39	Ⅰ区客土	石鏃	2.2	2.0	0.51	1.9	チャート	先端欠損
40	Ⅳ区客土	石鏃	2.4	1.7	0.44	1.0	チャート	脚片方欠損
41	Ⅰ区客土	石鏃	2.5	1.5	0.41	1.1	チャート	
42	Ⅰ区客土	石鏃	2.8	2.0	0.51	2.0	チャート	
43	Ⅰ区客土	石鏃	1.4	1.8	0.42	0.8	チャート	上半部欠損
44	Ⅳ区客土	石鏃	3.2	1.8	0.36	1.3	チャート	先端脚片方欠損
45	Ⅸ区客土	石鏃	2.4	1.5	0.26	0.6	チャート	
46	Ⅰ区-Ⅳ	石鏃	2.1	1.5	0.39	0.7	チャート	
47	Ⅸ区客土	石鏃	2.0	1.1	0.29	0.5	チャート	脚片方欠損
48	Ⅰ区-Ⅳ	石鏃	2.3	1.7	0.37	1.1	チャート	未成品?
49	Ⅷ区-Ⅳ	石鏃	2.3	1.8	0.53	2.2	チャート	未成品?
50	Ⅸ区-Ⅳ	石鏃	2.3	1.5	0.57	1.7	チャート	未成品?
51	Ⅰ区客土	石斧	15.4	9.0	1.28	240	頁 岩	
52	Ⅸ区客土	石斧	13.8	4.8	1.2	88	頁 岩	
53	Ⅸ区客土	石斧	12.5	4.8	1.2	85	頁 岩	
54	不 明	石斧	11.8	5.3	1.1	132	頁 岩	
55	Ⅰ区客土	石斧	14.7	6.0	1.5	158	頁 岩	
56	Ⅰ区客土	石斧	10.9	7.3	1.7	168	頁 岩	
57	Ⅷ区-Ⅳ	砥石か	11.9	6.8	1.9	222	頁 岩	
58	Ⅱ区客土	磨石	6.3	5.6	2.5	114	砂 岩	

第5表 石器計測表

図面 番号	出土 層位	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 材	備 考
59	不 明	磨石	5.5	5.0	2.0	82	砂 岩	
60	2号住居	磨石	5.8	4.5	5.4	172	砂 岩	
61	I区客土	剥片	3.4	4.3	1.1	15	チャート	
62	I区客土	スクレイパー	7.2	3.5	0.7	16.8	頁 岩	
63	II区客土	スクレイパー	5.7	3.6	1.3	16.5	チャート	
64	I区客土	スクレイパー	6.3	2.3	0.9	7.4	チャート	
65	IX区客土	スクレイパー	2.4	1.0	0.3	0.7	黒曜石	
66	I区-IV	スクレイパー	2.3	1.2	0.5	1.4	チャート	
67	II区客土	スクレイパー	2.8	1.7	0.7	3.0	チャート	
68	VIII区-IV	スクレイパー	3.1	1.4	0.8	3.2	黒曜石	
69	IX区客土	スクレイパー	4.0	1.6	1.0	4.8	黒曜石	
70	VIII-IV	スクレイパー	4.2	2.5	0.9	5.2	チャート	
71	I区客土	使用痕剥片	3.5	2.1	1.1	2.9	黒曜石	姫島産か
72	I区客土	使用痕剥片	4.1	2.6	1.1	9.3	チャート	
73	VIII区-IV	剥片	3.1	2.7	1.0	8.7	チャート	

第6表 石器計測表

2 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構としては、竪穴住居址3軒が検出された。3軒ともあまり良好な検出状況ではなかったものの方形を基調とした住居址で、第3層（アカホヤ）上面で検出した2号住居は張り出しをもつ可能性が指摘でき、注目される。

遺物は土器、石器とも少なく、縄文時代の遺物同様に一括採集したものが多い。しかし、その出土がI、VIII、IX区に限られ住居址を検出した調査区と符合することから、住居址との何らかの関連が想定される。

遺 構

1号住居

I区第IV層上面に検出された。現存する1辺が4.25mで、方形プランと思われる。柱穴

2と焼土を含む土坑がみられた。検出面から床面までの深さは最大60cmで、床面は落ち際に向かって若干下がるものの、ほぼ水平に近い状況であった。

遺物は少なく、小破片であったため3点（第17図1、7、8）のみをあげた。1は器形を知り得ないが、頸部で大きく外反する甕と思われる。7、8はいわゆる工字突帯文土器の胴部片とみられ、突帯の周囲に突帯成形の際にできたと思われる爪形がめぐっている。

2号住居

Ⅷ区Ⅲ層（アカホヤ）上面で検出された。残存状態が非常に悪く、検出面から床面まで10cm程度しかなかったが柱穴2と焼土面を検出した。現存する1辺が約3.5mを計り平面プランはおそらく方形を基調とすると考えられるが、2カ所の張り出した部分が認められる。

遺物はやはり少なく（第17図10、11、12、17）、10は頸部がややくの字を呈する甕、12は頸部に明瞭な稜をもちくの字を呈する甕であると思われ、17は小型の平底を呈する底部である。

3号住居

Ⅸ区Ⅳ層上面に検出された。この遺構は、住居址のコーナーとみられるわずかな落ち込みと床面と思われる若干固い地面をもつ。1号、2号住居に比べ小さく、1辺が、2m程しかない。

また直接この遺構に伴う土器は出土しておらず、住居址でない可能性も否定できない。しかしこの遺構周辺には、Ⅰ、Ⅷ区を上回る弥生土器片が散在しており、ここでは住居址として扱った。

土器

Ⅰ区出土の土器（第17図2～6、9）

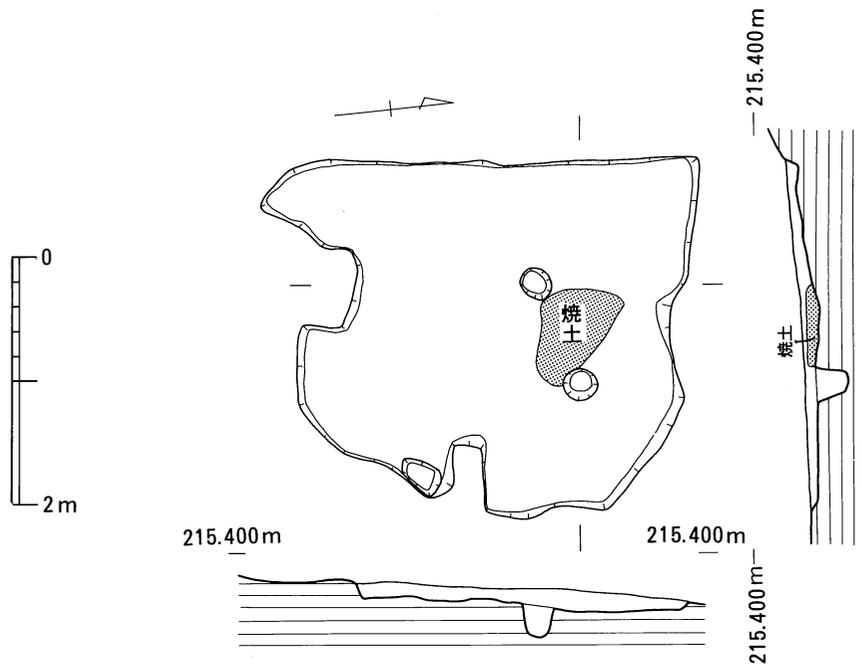
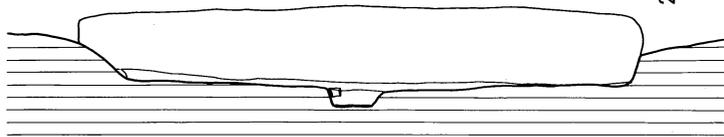
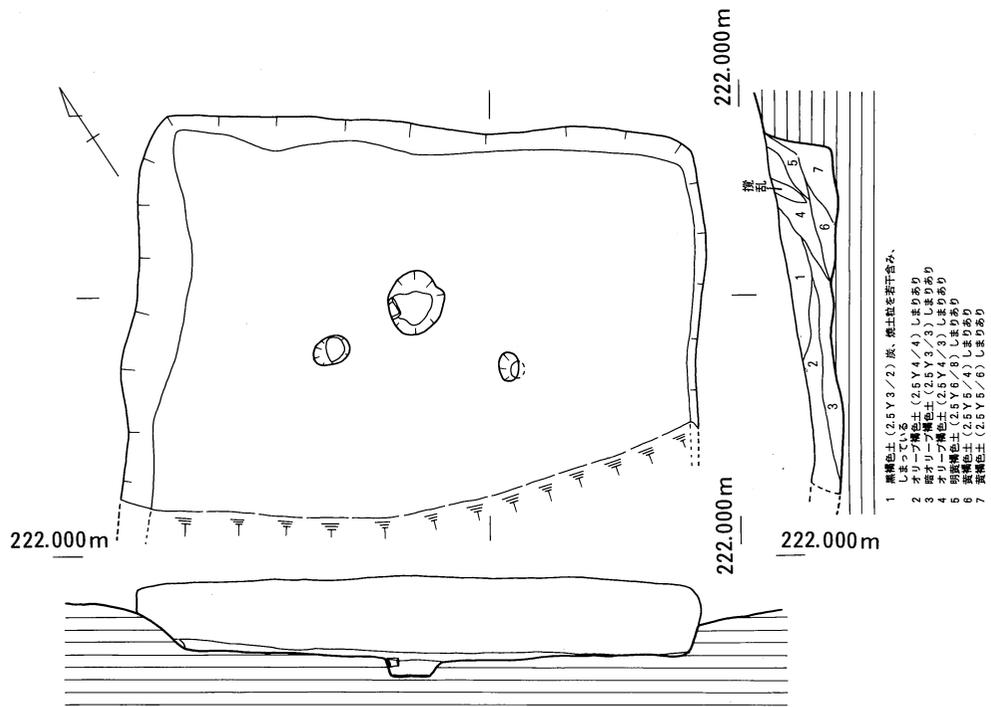
2は口唇部が若干窪んでいる。3は複合口縁壺の口縁部とみられ、外器面に櫛描波状文がみられる。5は粗製甕の口縁部、6は工字突帯文土器の胴部片とみられ、7、8と類似した突帯整形がみられる。9の底部は薄い平底を呈する。

Ⅷ区出土の土器（第17図13～17）

13は口唇部が若干窪んでいる。16は粗製甕の頸部で、大きく外反する。

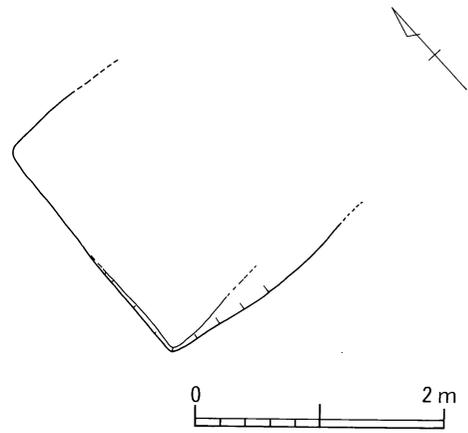
Ⅸ区出土の土器（第18、19図）

甕には口縁部に最大径をもち、やや屈曲した頸部から若干膨らみをもつ胴部に続くもの

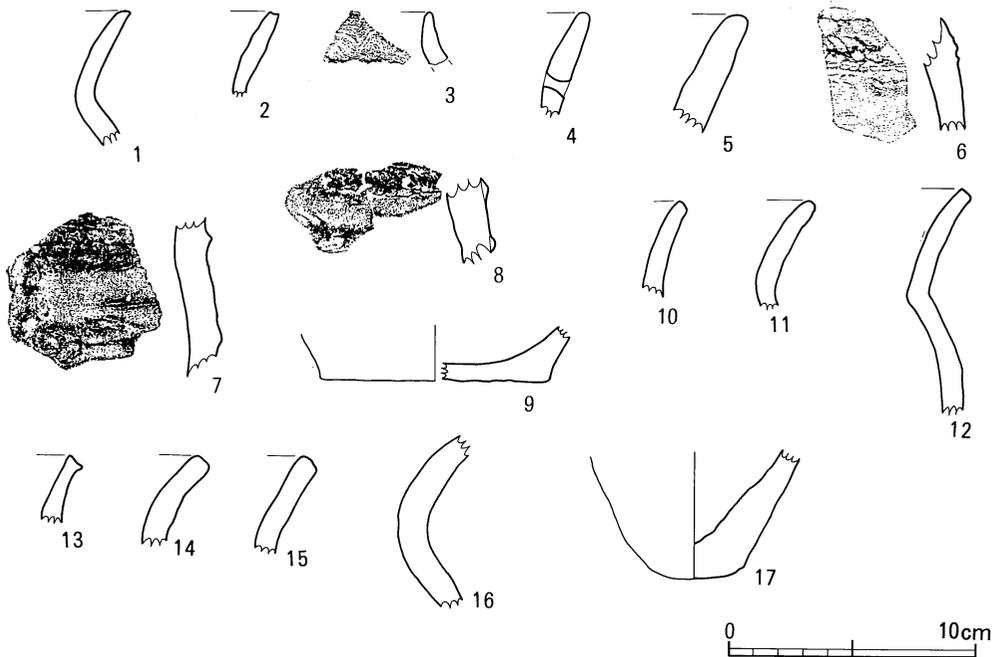


第15図 1号・2号住居跡実測図 (1/60)

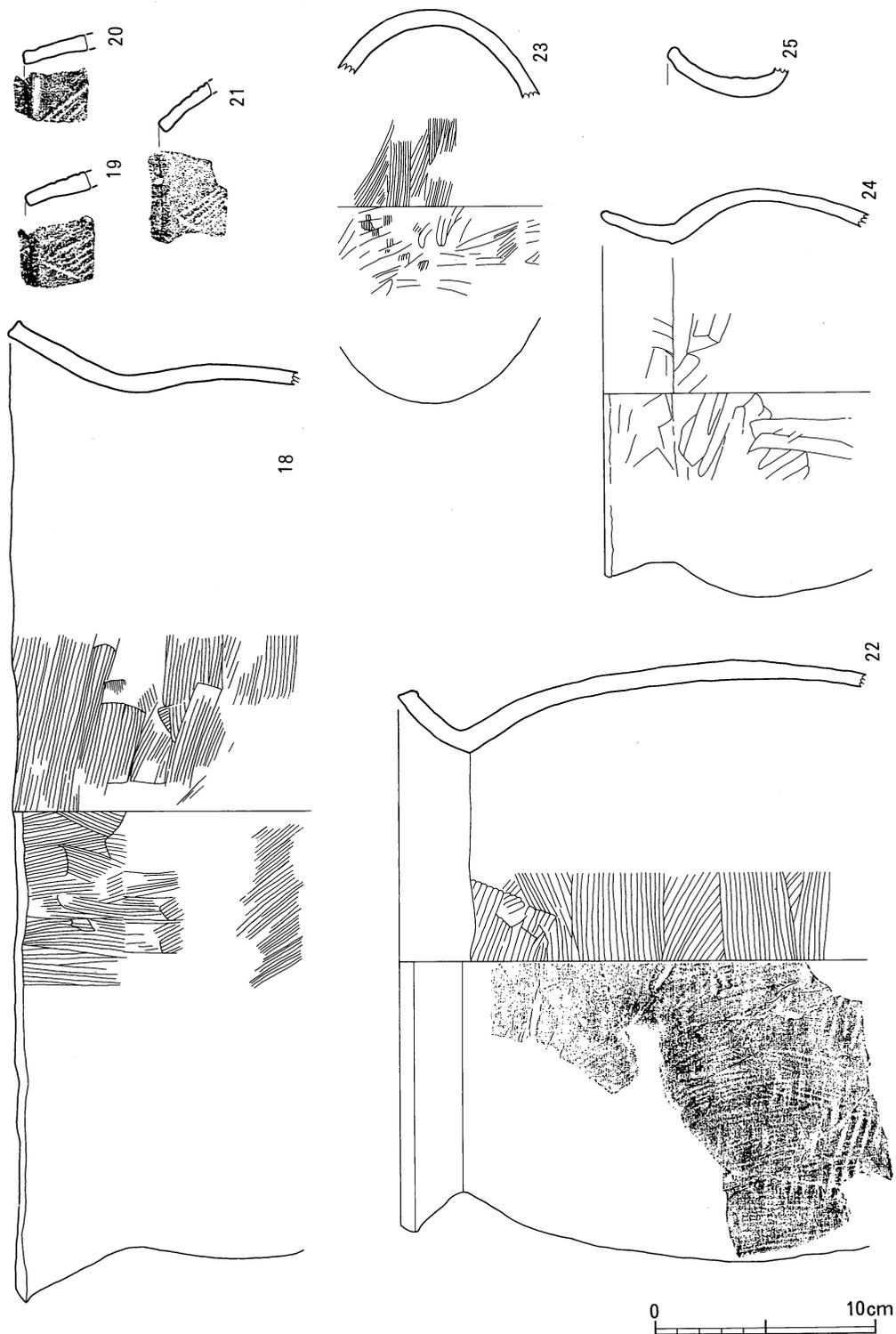
(18)、頸部がくの字形を呈して大きく屈曲し、胴中位で最大径をもつもの (22) 頸部がくの字を呈して屈曲し、胴上位で最大径をもつもの (24) がある。また22は胴中位から胴下位にかけてタタキ調整がみられ、それをハケ等によりなで消している。19~21は複合口縁壺の口縁部で鋸歯文が施されているが、21は19、20に比べ強く内傾している。23は壺の胴部とみられ外器面には刷毛目調整の後のヘラミガキ調整がみられる。26は粗製甕の胴部で工字突帯文がみられる。28は粗製甕の口縁部で口唇部が若干窪んでいる。29は平底を呈する底部で、外器面にヘラミガキ調整がみられる。



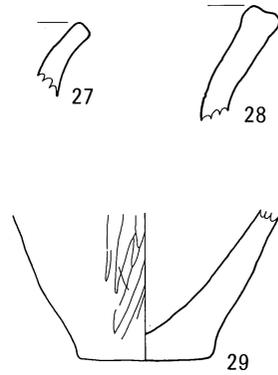
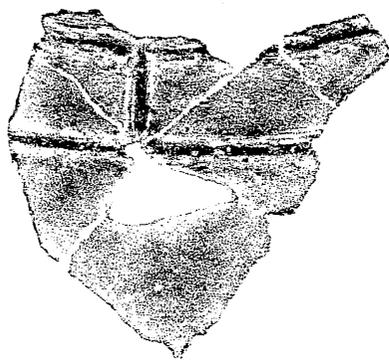
第16図 3号住居跡実測図 (1/60)



第17図 土器実測図 (1/3)



第18图 出土土器实测图 (1 / 3)



第19図 出土土器実測図 (1 / 3)

図面 番号	出土 層位	文様および調整		焼成	色 調		胎 土	備 考
		外 面	内 面		外面	内面		
1	1号 住居	斜め方向のハケメ	斜め方向のハケメ	良好	浅黄橙色	におい 黄橙色	1~2mmの黒色、灰色、 黄色の砂粒と4mmほどの 褐色の小礫を含む。	外器面にスス付着
2	—	横、斜め方向のハケ メ	斜め方向のハケメ	良好	浅黄橙色	黄橙色	0.5~1mmの灰白色、褐 色、白色、2~4mmの黄 褐色の砂粒を含む。	外器面にスス付着
3	—	ナデ 横方向の櫛描波状文	ナデ	良好	淡黄色	淡黄色	淡黄色の細砂粒を少量 含む。	
4	—	ナデ	ナデ	良好	におい 橙色	におい 褐色	1mm以下の黒色、淡黄色、 透明で光る砂粒と2mmほど の褐色の砂粒を含む。	穿孔をもつ
5	—	ナデ	ナデ	良好	橙色	明赤褐色	0.5~4mmの灰白色、黒色、 淡黄色の砂粒を覆う含み4 mmほどの雲母を含む。	
6	—	ナデ 工字突帯文	ナデ	良好	におい 褐色	明赤褐色	1~2mmの灰色、黄色、 白色砂粒を多く含み、1 mm以下の雲母を含む。	
7	1号 住居	ナデ 工字突帯文	ナデ	良好	におい 褐色 黒褐色	におい 褐色 灰黄褐色	0.5~4mmの灰白色、 淡黄色砂粒と雲母を 含む。	
8	1号 住居	ナデ 工字突帯文	ナデ	良好	明褐色 灰褐色	明褐色	0.5~2mmの灰色、黒、 黄色の砂粒と4mmほどの 灰色の礫を含む。	
9	—	ナデ	ナデ	良好	におい 黄褐色	淡黄色 浅黄色	1mm以下の灰白色、 褐色、透明で光る砂 粒と雲母を含む。	
10	2号 住居	横方向のハケメ	ナデ	良好	におい 褐色 黒褐色	黄褐色	0.5~5mmの褐色、灰 白褐色の砂粒、小礫 を含む。	外器面にスス付着
11	—	斜め方向のハケメ	ナデ	良好	黒色 におい 黄褐色	におい 黄褐色	1~3mmの灰白色、 乳白色の砂粒を多く 含む。	外器面にスス付着
12	2号 住居	横方向のハケメ	ナデ	良好	黒色 褐色	黄褐色	1mm以下の淡黄色砂粒、 1~3の灰色、黒色、う す茶色砂粒を多く含む。	外器面にスス付着
13	—	ナデ	ナデ	良好	におい 黄褐色	灰白色	5mm以下の灰色、3 mm以下の褐色砂粒を 含む。	外器面にスス付着
14	—	ナデ	ナデ	良好	におい 褐色	におい 褐色	1mm以下の灰色、乳 白色の砂粒を含む。	
15	—	ナデ	ナデ	良好	におい 褐色	におい 褐色	3mm以下の灰色、褐 色の砂粒と2.5mm以下 の雲母を含む。	

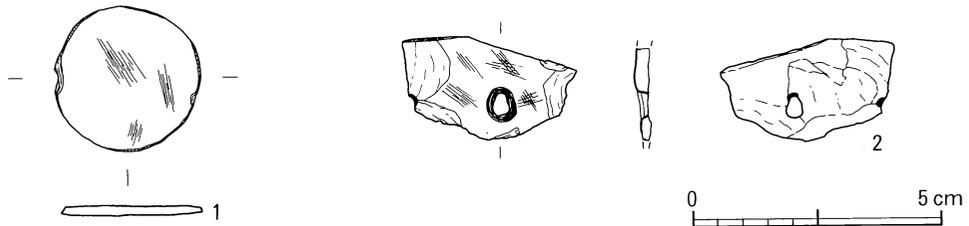
第7表 土器観察表

図面 番号	出土 層位	文様および調整		焼成	色 調		胎 土	備 考
		外 面	内 面		外面	内面		
16	—	ナデ	ナデ	良好	におい 赤褐色	におい 褐色	1~3mmの灰色、褐色の 砂粒と5mmほどの灰色の 小礫、雲母を含む。	外器面にスス附着
17	2号 住居	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙色	浅黄橙色 灰色	2.5mm以下の灰色、褐 色の砂粒を含む。	内器面にスス附着
18	—	ハケメ	ハケメ	良好	浅黄橙色 黒褐色	浅黄橙色 灰白色 褐灰色	1~3mmの灰色、褐色、黒、白 色の砂粒を含み、4~7mmの褐 色、黒色小礫を多く含む。	
19	—	ナデ 鋸歯状文	ナデ	良好	黄橙色	橙色	1mm以下の褐色の砂 粒を少し含む。	
20	—	ナデ 鋸歯状文	ナデ	良好	浅黄橙色	橙色	1mm以下の褐色の砂 粒を少し含む。	
21	—	ナデ 鋸歯状文	ナデ	良好	橙色	橙色	1mm以下の褐色、灰白 色砂粒を少し含む。	
22	—	ナデ 格子目タタキ ハケメ	ハケメ	良好	明黄褐色 黒褐色	におい 黄橙色 暗褐色	0.1~1mmほどの褐色、 黒色砂粒雲母を含む。	外器面にスス附着
23	—	ハケメ ミガキ	ハケメ	良好	におい 黄橙色 浅黄橙色	浅黄橙色	5mm以下、3mm以下 の褐色、黒色、灰白 色砂粒を少し含む。	内、外器面にスス付 着
24	—	ヘラケズリ	ヘラケズリ	良好	浅黄橙色	浅黄橙色	4mm以下の褐色、黒 色、灰白砂粒を少し 含む。	外器面にスス附着
25	—	風化のため不明	ナデ	良好	橙色	橙色	3mm以下の褐色砂粒。 1mm以下の透明で光る 砂粒を多く含む。	
26	—	ナデ 工字突帯文	ナデ	良好	におい 橙色	明褐色	0.5~2mmの白色、褐色、灰 色の砂粒、4mmほどの黄色 褐色小礫、雲母を含む。	
27	—	ナデ	ナデ	良好	灰黄褐色	褐灰色	1mm以下の砂粒を含 む。	
28	—	ナデ	ナデ	良好	におい 橙色	におい 赤褐色	3mm以下の灰白色砂 粒、1mm以下の雲母 を含む。	
29	—	ヘラミガキ	ナデ	良好	におい 橙色	におい 褐色	2mm以下の褐色砂粒 を含む。	内器面にスス附着

第8表 土器観察表

石 器

弥生時代の所産と思われる石器は2点のみであった。1はいわゆる円盤状石製品で2ヶ所の欠損部分をもつが、用途などは不明である。2は2つの孔と擦痕がみられ石包丁片と考えられるが、欠損が激しく全容は知り得ない。



第20図 出土石器実測図(2/3)

図面番号	出土層位	器 種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	石 材	備 考
1	VIII区客土	円盤状 石製品	3.0	3.0	0.2	4.0	頁 岩	
2	IV区客土	石包丁	2.1	3.6	0.3	2.4	頁 岩	

第9表 石器計測表

第4節 まとめ

今回の調査では縄文時代、後、晩期、弥生時代後期の遺構、遺物が検出された。アカホヤ火山灰層以降の土層が調査区全般に渡り、ほとんど攪乱を受けていたことによって弥生時代以降の時期に関しては判然としない。しかし、これまでほとんど発掘調査の行われていなかった当地域において、わずかばかりとはいえ歴史の一端を垣間見ることができた今回の調査は、大変意義あるものであったといえよう。以下、本調査において気付いた点をいくつか述べて簡単ではあるがまとめとしたい。

まず縄文時代早期では5基の集石遺構が検出されたが、すべてが掘り込みを有する点や4号のみに埋土中の炭化物がみられた点は注意しなければならない。また、Ⅸ区で検出された礫群は調査区ではかなり低い位置にあり、廃棄礫の可能性が指摘できる。

土器は縄文時代早期では押形文土器が主体を占め、その文様が粗大で施文方向の不規則な点から押形文土器の中でもかなり新しい段階のものと考えられる。全体的に土器の出土量が少なく、詳細な分類は困難である。

縄文時代後、晩期では概ね北久根山式から三万田式の流れと黒色磨研系から突帯文土器への流れが考えられるが、これも出土量の少なさから詳細な分類は困難である。しかし、第8図35、37、41のように脚台付皿とみられるものも含まれ、今後の資料増加とあわせ検討を要する。

弥生時代では概ね後期と考えられる住居跡3件と土器が検出された。住居跡では2号が張り出しを持つ可能性を指摘したが、周辺地域では検出例はほとんどないことと検出状況の悪さからここでは可能性を指摘するのみにとどめたい。土器に関しては、工字突帯土器の出土が目される。工字突帯土器は大分県の大野川上、中流域を中心として宮崎県五ヶ瀬川上流域にも分布が知られている。そのほとんどは高千穂町からの出土で、今回の出土は五ヶ瀬川流域ではこれまででは最も下流にあたる。今後の調査例の増加によりさらに分布域の拡大が予想され、周辺地域との関連などさらに検討していかねばならない。また、今回出土した工字突帯土器にはその突帯に関して2つの異なった成形方法がみられる。1つは突帯を指でつまみ成形したもので、突帯の上下、左右に爪形を残す。もう1つは突帯をきれいに撫でて成形したものである。この差は時期的な相違なのか、制作途上もしくは個体ごとの相違なのか層位的にとらえられなかった本遺跡では知り得ないが、今後の資料増加を待って再度検討したい。

紙数の制約により非常に概略的なまとめとなったが、本遺跡、出土資料の提供してくれる情報や問題点などは、あらためて別の機会に公表していくことで御容赦いただきたい。また文末ではありますが、本報告書執筆にあたり御教示、御協力くださいました地元住民の方々、関係諸機関、諸先輩、その他本遺跡に関わられた皆様に心より御礼申し上げたい。



遺跡遠景（北から）



遺跡遠景（北東から）



作業風景



Ⅶ区土層堆積状況



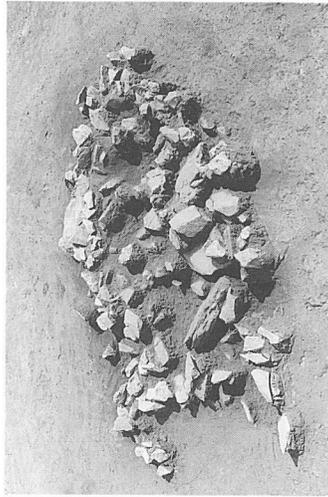
遺跡全景（東上空より）



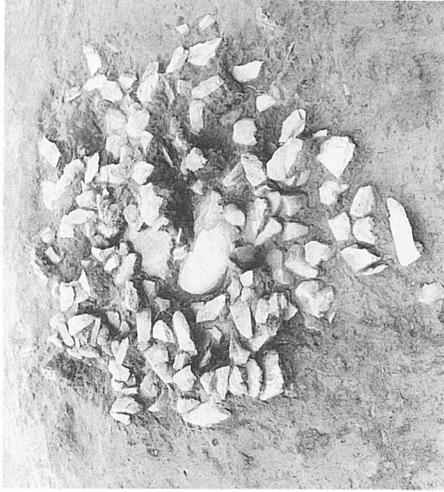
遺跡全景（上空より）



1号集石遺構



2号集石遺構



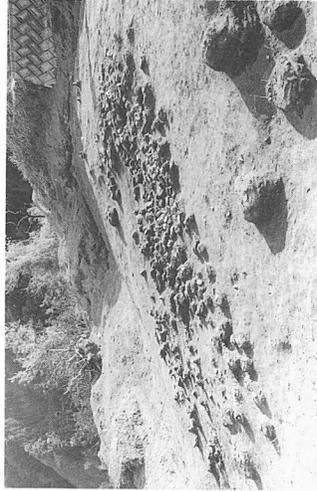
3号集石遺構



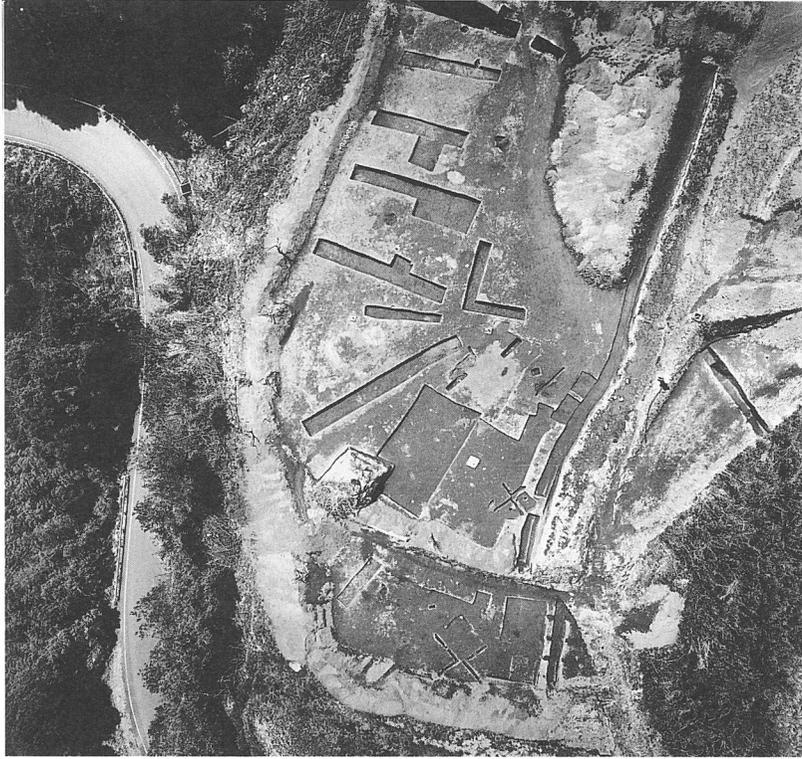
4号集石遺構



5号集石遺構



散離状況 (IX区)



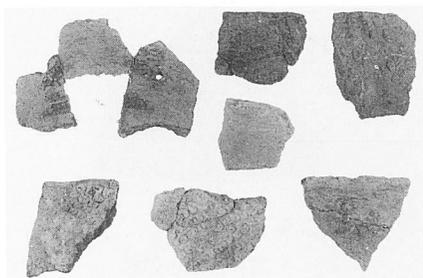
Ⅶ区 (上空より)



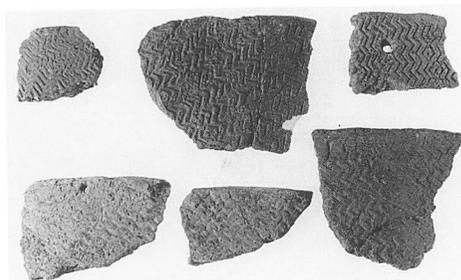
2号住居跡



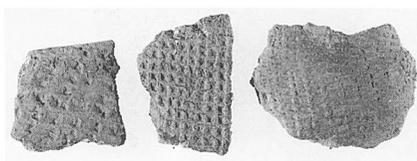
1号住居跡



橢円押形文土器



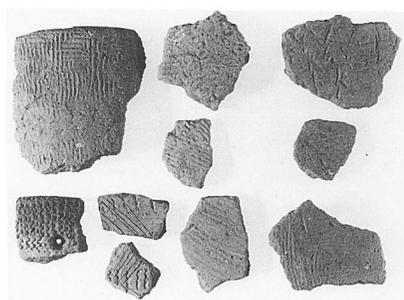
山形押形文土器



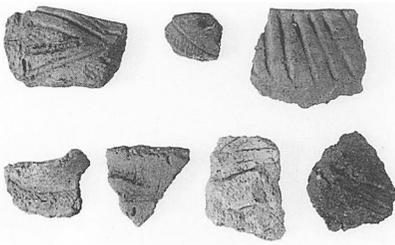
格子目押形文土器



押形文土器



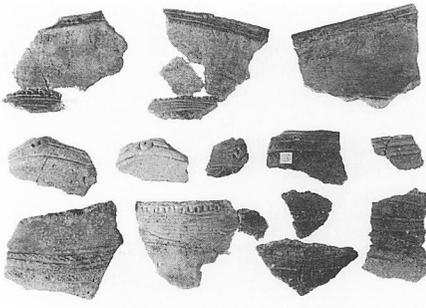
縄文時代早期土器



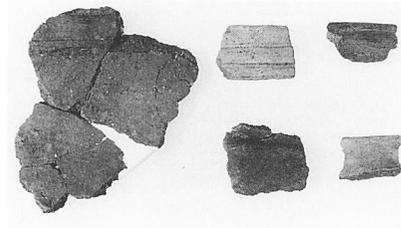
縄文時代後期土器（西平系以外）



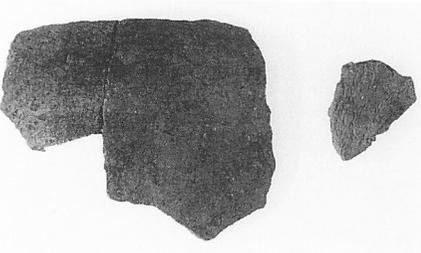
高杯形土器脚部



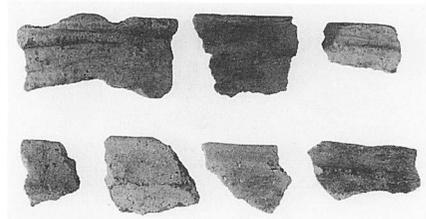
縄文時代後期土器（西平式系）



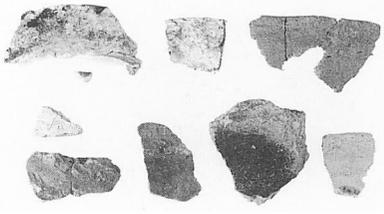
縄文時代晚期土器 1



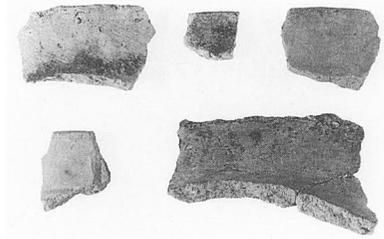
縄文時代晚期土器 2



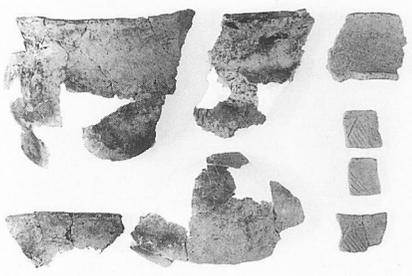
縄文時代晚期土器 3（突帯文）



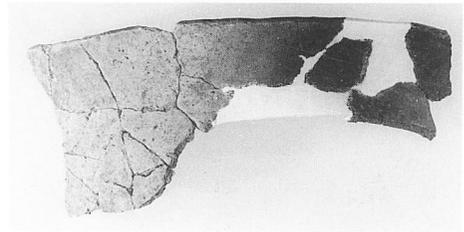
弥生土器 1 (I、VIII区出土)



弥生土器 2 (I、VIII区出土)



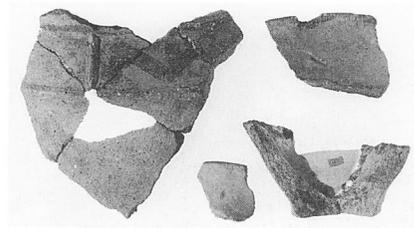
弥生土器 3 (IX区出土)



弥生土器 4 (IX区出土)



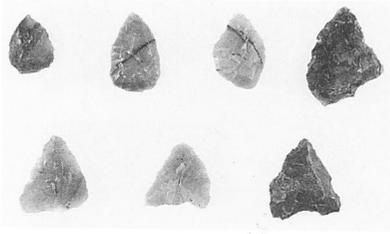
弥生土器 5 (IX区出土)



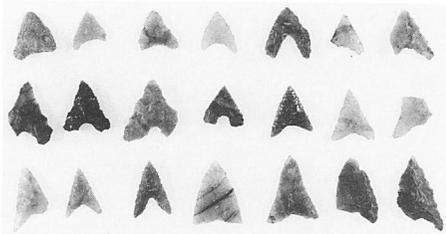
弥生土器 6 (IX区出土)



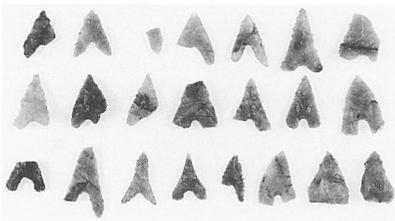
弥生土器 (底部)



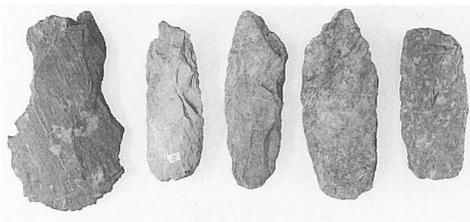
石鏃1



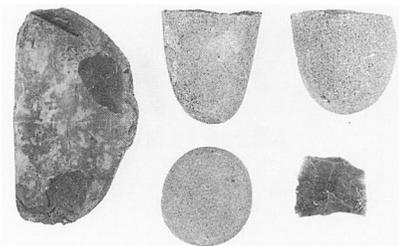
石鏃2



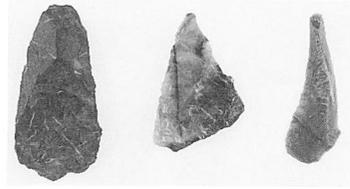
石鏃3



石斧



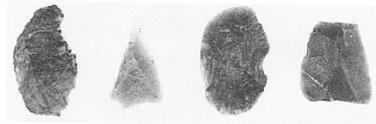
砥石?、磨石、剥片



石斧、スクレイパー



スクレイパー



スクレイパー、使用痕剥片、剥片



石包丁、円盤状石製品



剥片 (旧石器時代)

**県道向山・日之影線道路改良事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告書
田向遺跡・平谷遺跡**

発行年月日 平成6年3月
発行 宮崎県教育委員会
編集 宮崎県教育庁文化課
印刷所 宮崎紙工印刷株式会社